

## 外部評価報告書：九州大学総合研究博物館：平成 12-16年度

九州大学総合研究博物館

自己点検・評価委員会

外部評価委員会

<https://doi.org/10.15017/25286>

---

出版情報：外部評価報告書：九州大学総合研究博物館. 12-16, 2006-03-31. 九州大学総合研究博物館  
バージョン：  
権利関係：

外部評価報告書

# 九州大学総合研究博物館 (平成12～16年度)



九州大学総合研究博物館  
自己点検・評価委員会  
外部評価委員会

(2006年3月)



外部評価報告書

九州大学総合研究博物館  
(平成12～16年度)  
— その使命、活動と将来展望 —

(2006年3月)

九州大学総合研究博物館

## 外部評価委員

藤田 正一氏	委員長、北海道大学総合博物館館長
板橋 旺爾氏	読売新聞西部本社編集委員
遠藤 秀紀氏	京都大学霊長類研究所教授
大場 秀章氏	東京大学総合研究博物館教授
菊水 研二氏	元岡「市民の手による生物調査」代表
斉藤 靖二氏	前国立科学博物館地学研究部長
西 憲一郎氏	福岡市博物館館長
山内 祐司氏	九州大学理学部地球惑星科学科二年

## まえがき

欧米の大学教育においては博物館の重要性は既に100年以上前から認識されていたと考えられます。今から130年前の1876年、日本で最初の官立大学である札幌農学校に教頭として赴任したクラーク博士は、「札幌農学第一年報」に「米国人教師たちと学生たちは北海道の各地の山野を跋涉し、動植物、鉱物標本を採集している。これらの標本は博物館を建設してそこに収められるべきである。」と、当たり前のことのように記述しています。彼は歴史の長いヨーロッパの大学に留学し、貴重な学術標本・資料の収蔵と研究成果の公開、学生の教育のために実物を見せることの出来る博物館の教育研究上の重要性を認識していたのでしょう。

ひるがえってわが国を見ますと、文部科学省が大学博物館の必要性を認めたのはほんの数年前のことです。過去100年余りの間に蓄積されたはずの貴重な学術標本・資料はどここの大学でも行き場に困り、散逸し、劣悪な管理の下、傷んだり、あるいは捨てられるという憂き目にあってきました。国の予算を使って行った研究の過程や成果として得られた学術標本は国民の財産であり、国と大学がその維持管理を国民から委託されていると考えるべきものでありましょう。研究者の血のにじむような努力の結晶や、大発見の根拠となった貴重な標本を粗末に扱うわけには行きません。しかし、いまだに各大学の博物館に十分な手当てがなされていないのが現状です。

そのような中で、九州大学には750万点にも及ぶ学術標本が維持されています。おそらく日本の大学で随一の標本数でしょう。しかし、それらを適切に収蔵管理する博物館の建物があるわけではなく、各部局の研究者がなけなしの予算で維持してきたのだということです。九州大学に博物館が設置されたのは平成12年です。「博物館」とはいえ、今述べたように、いまだに「館」はありません。創設5年を経た今年、九州大学総合研究博物館は外部評価を受けることを決定しました。九州大学総合研究博物館によれば、ここに至るまでの経緯は以下のとおりです。

九州大学総合研究博物館は平成12年の創設以来、

- (1) 九州大学での教育と研究の支援、
- (2) 学内各部局に分散収蔵されている学術資料の状況の把握、データベース化と公開、
- (3) 公開展示、サテライト博物館、講演会等社会教育、
- (4) 博物館および標本・資料に関する研究、

を精力的に行ってきました。これらの活動を総括し、今後の活動の参考とするために、平成16年度には博物館運営委員会で選ばれた学内の5名の自己点検・評価委員により点検・評価を行い、自己点検・評価報告書「九州大学総合研究博物館（平成12～16年度）-創設からの歩みと将来展望-」を作成しました。

平成17年度第1回博物館運営委員会において、村江達士館長より外部評価の必要性について説明があり、審議の結果、博物館自己点検・評価委員会（松隈明彦（委員長）、岩永省三、服部英雄、毛利孝之）において手順、内容を検討し、外部評価を行うことが決まりました。博物館自己点検・評価委員会では、3回の会合を重ねて、評価対象の年度、評価項目、評価の方法、報告書作成までのスケジュールを検討し、外部評価委員の人選を行いました。外部評価では、より広い視野から九州大学総合研究博物館のこれまでの活動を分析し、今後さらに一層内外の期待と要望

に答えるよう批判、助言を頂くため、博物館関係者（大学博物館2名、その他の博物館2名）、学識経験者（1名）、博物館利用者（2名）、マスコミ関係者（1名）合計8名の方を外部評価委員に選びました。

平成17年12月18日、九州大学総合研究博物館外部評価委員は九州大学箱崎キャンパスの記念講堂小会議室において外部評価委員会を開催し、忌憚のない意見を述べ合いました。まず、議事に先立ち、学術資料の収蔵状況や展示場の状況、将来収蔵庫に改造する予定の工学部工場なども見学し、博物館の現状を把握しました。議事では、沢山の評価項目の中でも大学博物館のあるべき姿の議論に最も多くの時間を割きました。その上で、委員それぞれの立場と経験に基づいて現状を分析し、九大博物館がその役割・使命を果たすために改善すべき点、努力すべき点について意見を出し合いました。ここに外部評価委員会での議論と各委員の評価をまとめて、評価報告書として公表致します。この評価が、完成すればおそらく日本一の大学博物館になるであろう九州大学総合研究博物館のあるべき姿の検討にいかばかりか、お役に立つことができれば幸甚です。また、ここで論議された大学博物館のあり方については、九州大学総合研究博物館のみならず、わが国の大学博物館のあり方に大きな示唆に富むものであったと認識しております。委員の皆様の博物館に対する熱い思いと、熱心な論議に感謝いたします。最後に、この外部評価のために、極めて適切な資料その他の準備をしてくださいました九州大学総合研究博物館の教員、事務方にも厚く御礼申し上げます。

九州大学総合研究博物館外部評価委員会  
委員長 藤田 正一

## 外部評価の要約

[各項目のA-Eは、評価の平均レベルを示す。詳細は本文1頁の対象年度と評価の方法を参照]

### 1. 九州大学総合研究博物館の使命・役割

#### (1) 活動の理念と役割 B

大学博物館の本来の使命は、大学に蓄積された膨大な学術標本の整理、保存、活用のための公開、および学術標本に基づく研究と教育である。大学博物館の特色を生かした社会貢献の重要性を社会に訴える必要がある。全国の大学博物館との横並びを目指すのではなく、九州大学の歴史と地理を踏まえて、独自の使命を明確にするべきである。

大学博物館はまた、社会と大学をつなぐ重要な窓口の役割を担っている。大学博物館と国、公立博物館の使命の違い、地域連携、社会貢献を掲げる大学の中での博物館活動、九州大学博物館の独自性など重要な問題について、外部評価や博物館セミナーなど様々な機会を設けて、内外の意見を真摯に聞き、中長期的な視野の下に議論を続けて行くことが必要である。

### 2. 博物館活動

#### (1) 研究 B

研究活動は、概ね目標を達成しているが、専任教員個々の研究のほか、博物館スタッフとして行うべき系の研究の充実が図られなければならない。研究時間の確保に努め、研究面での実績を増やすこと、英文論文の執筆、国際共同研究の推進、学際的研究の企画などに取り組む必要がある。

#### (2) 教育 B

博物館設置後直ちに学芸員資格関連授業・実習を立ち上げて、学部教育に大きく貢献しており、評価できる。大学院教育についても、博物館全教員が参加する共通講義・演習を立ち上げて貢献することが望ましい。学術標本に関する基礎的研究分野の後継者の養成を教育の柱とすべきである。

#### (3) 学術標本 C

創造的な標本蓄積の未来像を構築することが重要である。保存や貸借の組織化、収蔵場所、データベース化のための人、経費などは博物館職員だけで解決できる問題ではなく、大学として博物館をどのように支援するか、全学的合意形成を図るべきである。学内の学術資料を取りまとめ、「九州大学所蔵標本・資料」を編集・出版したことは高く評価できる。

#### (4) 展示 B

展示を教育研究に有効に機能させるためには、十分な広さの常設展示のスペースの確保が必要である。大学博物館における展示の目的、必要な展示の規模など基本的な問題から議論を行い、活動の方針を決めるべきである。

他の博物館等を借りての公開展示、サテライト展示などに工夫が見られるが、学内での特別展示にはより一層の努力と工夫が必要である。



#### (5) 社会貢献 B

サテライト展示、地域資源再発見塾など工夫をこらして地域社会の教育に貢献しているが、大学博物館の重要な社会貢献は標本資料の収蔵・公開と研究・教育であるという観点からは、収蔵施設・設備の手当てをはじめとする博物館に対する全学的なサポートが欠如している。公開講座は回数を減らしてでも、九大でなければ行えないようなインパクトのある貢献を考えるべきである。

#### (6) 学内他部局との連携 B

公開展示での他部局からの協力、支援は概ね順調に得られており、卒論公開講演会における他部局へのサポートなど、協力関係が蓄積しつつある。博物館が一方的に他部局を支援するのではなく、博物館に対する全学的な支援・協力体制を作ることも重要である。

標本の一元管理については、他部局からの物心両面のサポートを取り付ける努力が必要である。

#### (7) 他博物館等との連携 A

展示スペースがない九州大学が、近隣の博物館・科学館内での展示を取り付けるなど、連携がうまく機能している。九州国立博物館との連携にも努力すべきである。今後、双方向の協力体制を構築することが重要であるが、それにどこまでエネルギーを割くか、大学博物館の使命に立ち返って議論する必要がある。

#### (8) 国際連携 B

国際連携、国際交流はおおむね良好に機能しているが、教員個々の連携とともに、博物館としての連携を計画すべきである。標本収蔵の充実に関する多国間連携をさらに強化すべきである。アジア地域の自然史インベントリー、歴史民俗学資料の集積拠点として機能することを期待する。

経常的な外国旅費や海外からの研究者を受入れるための施設、設備など、博物館の努力だけでは解決困難な問題であり、大学として用意できるかが緊急の課題である。

#### (9) 情報発信 B

ITを利用した情報発信は高く評価できるが、マスコミへの発信、およびマスコミを利用した発信への取り組みが不足している。時間と人手のかかるデータベースの構築について、学内での協力者(教職員や学生または非常勤職員やボランティア)の確保が必要であろう。

#### (10) 出版 B

「九州大学所蔵標本資料冊子」は作成の労力と内容を高く評価したい。標本資料冊子英語版の出版が待たれる。「博物館概要」も必要情報を網羅し、適切といえる。特に、英語版を準備したことは高く評価できる。今流のサイテーション評価になじまない紀要類を、あえて粘り強く出版することは博物館の不変の責任である。廉価で良質な図録を作成し、有料化についても検討すべきである。

### 3. 管理運営と財政

#### (1) 管理運営のあり方 B

「本学の(標本資料に基づく)学術研究の中核」というより、組織を拡充して「本学の学術研究のデータベースセンター」になることを目指すべきである。大学の博物館に対する

考え方が明確になっていることが大事である。

透明性の高い管理運営を目指し、情報公開に努めることを明確にすべきである。

## (2) 体制 B

運営体制と意思決定の体制については、副館長制度、運営委員会、各種委員会の体制でおおむね機能できる体制になっているが、教員会議が非公式の会議であるのは問題である。博物館内規として明文化すべきである。大学本部との意思疎通が十分図られるような館長機能の高度化が望まれる。

博物館事務は理学部事務部との共同で行われているが、学内共同教育研究施設という性格上、一部局の事務部との連携ではなく、博物館独自の事務部を持つべきである。

## (3) 教員組織と人事 B

教員人事は公募を原則としており、公正な選考が行われる体制ができています。

要員不足は明白であり、九大は博物館の人的拡大を必須としている。法人として定員が増やせないのならば、各部局からの、より大規模な人員の異動配置が必要である。

## (4) 財政 C

大学からの予算規模は、同規模の国立大学法人の博物館に配分される予算と比較すると同等以上の予算を得ているといえる。また、学内の競争的資金も獲得している。一方で、外部資金の獲得についてはいっそうの努力が望まれる。博物館独自の継承的予算体系を備えるべきである。

# 4. 施設設備

## (1) 施設の状況 D

現状はタコ足、狭隘、全くの未整備と言わざるを得ない。九州大学では、新キャンパス移転の際、行き場を失った貴重な学術標本が廃棄される可能性が考えられる。いま緊急に必要なのは廃棄の危機に直面している学術標本の大規模かつ高度な収蔵施設である。また、分散している施設の一本化、博物館専任教員や学生・院生の研究スペースの確保も重要な課題である。大学としての対応が望まれる。

## (2) 設備の状況 C

展示スペースが不足する中、展示用設備は現有でほぼ満足できる状態にある。収蔵設備の充実、重要事項として自己点検・評価で取上げるべきである。研究設備については、自らの標本資料を自らデータ化して新しい理論の創出者となるため、個々の研究者が外部資金獲得等により充実させてゆくことが望ましい。

学内的にはもちろんのこと、国際的、社会的にも共同利用施設である博物館を、全学的にどのように考えるか議論すべきである。

## (3) 新キャンパス計画 B

キャンパス計画でその中心的位置に博物館を置くというアイデアは評価できる。このアイデアを維持し続ける努力が必要である。大学博物館として研究と教育に貢献しつつ、九州大学の存在が市民のプライドとなる活動が展開されるだろうと期待される。

新キャンパスに新しい博物館が建設されるまでは、移転の際に廃棄される可能性の高い学術標本を保管するため、学内の空きスペースやプレハブの設置により対応すべきである。

## 5. 将来構想・将来計画

### (1) 新しい大学博物館を考える会 B

大学全体として、この提言を尊重し、実現に向けて行動することを希望する。地域と大学との橋渡しとしての博物館となるためには、大学博物館の特色とは何か、大学博物館の理念とは何かについての議論が必要であり、新たな役割を担う「考える会」を検討する必要がある。

### (2) 事業部構想 C

地域社会への貢献のための具体的な組織の構想として高く評価される反面、大学博物館の設置理念との整合性が厳しく評価された。現段階では不要ではないかという意見もあり、十分な議論が必要である。

## 6. 中期目標・中期計画

### (1) 教育に関する目標 B

総合大学の博物館として、優れた教育計画を備えている。分野的にも、また質的にも多彩な要望があるなか、限りある人員で最大限の成果をあげることを期待する。学芸員養成にかかわる教育は博物館が行っている博物館らしい教育である。自己点検・評価報告書の中期目標・中期計画の要約に記載すべきである。大学院レベルの教育における博物館の貢献として何を指すのかを明らかにすべきである。

博物館から大学の他部局への教育支援だけでなく、博物館活動への全学的支援が必要であることを訴えるべきである。

### (2) 研究に関する目標 B

国際的な研究交流、共同研究は重要な課題なので、研究目標の中に入れるべきである。目指す研究水準を明確に記載することが必要である。境界研究、学際研究、資料部設置などの推進が望まれる。

博物館での研究と教育には博物館からの主張よりも、周りの理解が大きな力となる。全学的研究支援のための活動も重要である。

### (3) その他の目標 B

九大博物館が行っている地域貢献や社会連携は高く評価されるが、社会への盲目的追隨に陥らないよう、大学博物館の使命との整合性に常に留意すべきである。貴重な学術資料、特にタイプ標本の収蔵管理の再点検、整理、よりよい保管への移行など機能強化の位置づけが必要である。

ボランティア制度の導入、インタープリターの養成を検討すべきである。制度、組織の具体化に向け、地方自治体教育委員会などと協議していく必要がある。

## 7. 点検評価

### (1) 自己点検・評価委員会内規 A

内規は、点検評価という目的に対して十分に機能しているが、何年毎に自己点検・評価、外部評価を行うか規程が無い。館長や委員の任期、中期計画に配慮しながら、明文化を検討すべきである。

外部評価と自己点検・評価との関係を明確にすることが必要である。

## (2) 外部評価の体制 B

委員の構成は適当であり、外部評価の体制は、概ね機能しているが、もう少し委員の数を増やして、きめ細かな点検をすべきである。

## (3) 点検評価報告書 A

自己点検・評価報告書は、必要事項を網羅し、きちんと評価まで踏み込んだコメントを記載して十分に目的を達成している。

公開展示などの反省点を、次回に生かすよう早急に改善を要する。

## 8. 大学の対応

### (1) 中期目標・中期計画 B

博物館に関する記述は極めて少なく、大学の財産である学術標本を如何に管理し、未来に生かすのか、具体性に欠ける記述に終わっている。大学が不屈の姿勢を示し、博物館を育てる大学の支援体制あるいは補償制度策を実際に打ち出すべきである。

### (2) 博物館に対する対応 C

大学の総合研究博物館としては、資料保存、管理のセンター的機能、及び施設が最重要だが、現状では全くそれが保障されていない。博物館をどう育てるかという思慮、姿勢、施策が総じて薄弱である。

九大はキャンパス移転を控え、学術的に貴重な研究資料が散逸してしまう恐れがある。貴重な学術標本は国家的財産であり、それらの適切な管理は大学の責任である。このため、それらを一時的にも収蔵する施設の手当てが急務である。大学側の善処が望まれる。

## 9. 総合評価 C

常設展示の場所（博物館）がないという極めて悪い条件の中で、館員の創意と工夫で多角的な活動を行っている。大学の博物館の本来的な業務は貴重な学術資料を教育研究に利用可能な形に収蔵管理・展示することであろうが、開かれた大学として、市民に常時研究成果を公開できる施設が求められ、博物館がその使命をも担うことが要求されている。博物館の建物がない状況下で、これらの要求に応えるべく、館員が非常な努力をしていることは明白である。学内学術標本の一元管理へ向けて、「九州大学所蔵標本資料冊子」を出版し、来るべき博物館の完成に備える努力していることと合わせて高く評価できる。一方で、学術資料が各部局で個別管理され、管理状況も必ずしも適切とはいえない現実は博物館員の努力の及ばないところとはいえ、博物館の評価の観点からは、高く評価できない。750万点という国内の大学では圧倒的に優位な標本数を持ちながら、まとまった博物館が存在しないのは、九州大学総合研究博物館の致命的な弱点である。日本一の大学博物館となり得るポテンシャルを持ちながら、それが生かしきれていない。これは大学側の姿勢に関わることであるが、フィールドワーク、フィールドサイエンスに強い九大という特徴づけを鮮明に出せる可能性をなぜ早急に生かさないのであるか、外部からは不思議に映る。博物館員の努力はAに近いB、大学の対応はDに近いCと評価され、総合評価はCとなる。

## 目 次

### 第1部 外部評価

I. 対象年度と評価の方法	1
II. 評価項目について	2
III. 外部評価（詳論）	3
1. 九州大学総合研究博物館の使命・役割	3
(1) 活動の理念と役割	3
2. 博物館活動	4
(1) 研究	4
(2) 教育	4
(3) 学術標本	5
(4) 展示	6
(5) 社会貢献	7
(6) 学内他部局との連携	8
(7) 他博物館等との連携	9
(8) 国際連携	9
(9) 情報発信	10
(10) 出版	11
3. 管理運営と財政	12
(1) 管理運営のあり方	12
(2) 体制	12
(3) 教員組織と人事	13
(4) 財政	14
4. 施設設備	14
(1) 施設の状況	14
(2) 設備の状況	15
(3) 新キャンパス計画	16
5. 将来構想・将来計画	17
(1) 新しい大学博物館を考える会	17
(2) 事業部構想	17

6. 中期目標・中期計画	18
(1) 教育に関する目標	18
(2) 研究に関する目標	19
(3) その他の目標	20
7. 点検評価	20
(1) 自己点検・評価委員会内規	20
(2) 外部評価の体制	21
(3) 点検評価報告書	21
8. 大学の対応	22
(1) 中期目標・中期計画	22
(2) 博物館に対する対応	23
9. 総合評価	24

## 第2部 参考資料

自己点検・評価報告書「九州大学総合研究博物館（平成12～16年度）一創設からの歩み  
と将来展望一」



## 第 1 部 外部評価





## 1. 対象年度と評価の方法

平成17年度実施の外部評価は、以下の要領で行う。

- (1) 博物館創設の平成12から16年度までの5年について点検・評価を行う。
- (2) 評価のための資料は、基本的には平成16年度発行の「自己点検・評価報告書」本文、および添付資料を使う。必要に応じて、博物館は補足資料等を準備する。
- (3) 評価結果を明瞭にするため、A～Eの5段階評価とする。

A: 目標・目的が十分に達成され、向上および改善のためのシステムが十分に機能している。

B: 概ね達成されている、或いは概ね機能している。

C: 相応に達成されている、或いは相応に機能している。

D: ある程度達成されている、或いはある程度機能している。

E: ほとんど達成されていない、あるいはほとんど機能していない。

### (4) スケジュール

- (1) 平成17年11月 「自己点検・評価報告書」および補足資料を各外部評価委員に配布。
- (2) 平成17年12月18日 第1回外部評価委員会を九州大学で開催。外部評価委員会委員長の選出、評価項目、評価方法、資料、スケジュールについて検討、事前に配布した資料に基づき各評価項目に関する質疑応答。追加資料の提出が必要な場合は、後日追加資料を配布。
- (3) 平成18年1月末 各外部委員より評価の報告。外部評価報告書（案）の取りまとめ。
- (4) 平成18年2月 第2回外部評価委員会（書面会議）。外部評価報告書（案）の修正、報告書（原稿）の作成。
- (5) 平成18年3月 外部評価報告書（原稿）を自己点検・評価委員会へ提出。
- (6) 平成18年3月末 外部評価報告書の印刷刊行。

## II. 評価項目について

以下の大項目について外部評価を行うが、具体的には、各大項目の中を1～10個の中項目に分け、評価はこれら各中項目について行う。更に、大学博物館の使命、活動、大学の対応など全体について、総合評価を行う。

1. 九州大学総合研究博物館の使命・役割
2. 博物館活動
3. 管理運営と財政
4. 施設設備
5. 将来構想・将来計画
6. 中期目標・中期計画
7. 点検評価
8. 大学の対応
9. 総合評価

### III. 外部評価（詳論）

#### 1. 九州大学総合研究博物館の使命・役割

##### (1) 活動の理念と役割 AAABBBBCD [平均 B]

「大学博物館の使命は何か」という最も根本的な問題について、外部評価委員会の議論が白熱した。評価は、目標に十分に達しているから、ある程度達しているまで分かれた。評価の平均は概ね達しているである。

##### **収蔵と研究が主体の、独自性を生かした大学博物館を**

大学博物館の本来の使命は、大学に蓄積された膨大な学術標本の整理、保存、活用のための公開、および学術標本に基づく研究と教育である。大学教員という高度な専門家を多数擁し、収蔵と研究主体という大学博物館しか行うことができない特色を生かした社会貢献の重要性を強力に社会に訴える必要がある。また、九州大学総合研究博物館は、全国の大学博物館と横並びになるのを目指すのではなく、九州大学の歴史と地理的位置を踏まえて、独自の使命を明確にすることが望ましい。

大学博物館は、社会と大学をつなぐ重要な窓口の役割を担っている。大学博物館と国、公立博物館の使命の違い、地域連携、社会貢献が求められる社会情勢の中での博物館活動、九州大学博物館の独自性など重要な問題について、外部評価や博物館セミナーなど様々な機会を設けて、内外の意見を真摯に聞き、中長期的な視野の下に議論を続けて行くことが必要である。

**藤田**：展示、公開セミナー等による一般市民とのかかわりの強化という形での地域社会への貢献も重要であるが、九州大学総合研究博物館の本来の使命は、100年間にわたり蓄積された貴重な学術標本を現在、未来の研究者のために劣化を防ぎ、利活用可能なように収蔵管理することであり、これが大学博物館でなければできない最大の社会貢献であろう。この面での社会貢献の重要性を学内外で十分にアピールすべきである。

大学として、学内の貴重な学術資料の散逸を防ぎ、一元管理可能なように、学術資料の博物館への集約を推進する姿勢が必要である。

**遠藤**：総花的・社会追従的な博物館機能論を組織の使命として掲げたために、九大博物館独自の理念に基づく成果として、成果を高く評価するに至らない。九大として築くべき、他の博物館や世論と異なるアイデンティティを明確にし、学術の源泉として責任ある理念を実現するべきである。

**菊水**：十分なスペースがないにもかかわらず、大学と社会との接点となる施設であり、大学で行われている教育・研究を社会へ紹介し、社会の大学への要望を受け取る窓口としての機能をもっている。また社会に貢献する博物館であることも理念とする、ことに関しては評価できる。

**山内**：大学内へ向けた面はよく言及されているが、大学外への役割を明確にすべきだと思う。

**西**：理念、目標は十分確立しているが、その達成のための現在までの活動については、

施設、設備の絶対的不足のため、問題が山積している。

**板橋**：「社会貢献」の要素が強いが、町立郷土資料館ではない。自治体や国の博物館とは違った収蔵と研究主体の理念を持つべきである。

**斉藤**：大学博物館として横並び的にするのではなく、九州大学独自のミッションとして、明確なものにする方がよりよいのではないか。そこで対象とすべきは、まず九州大学の教官と学生である。

## 2. 博物館活動

### (1) 研究 ABBBBBBC [平均 B]

概ね目標を達成している。

#### 国際共同研究、学際的研究の推進

九州大学博物館における研究活動は、概ね目標を達成しているが、専任教員個々の研究のほか、博物館スタッフとして行うべき系の研究の充実が図られなければならない。

今後、研究時間の確保に努め、研究面での実績を増やすこと、英文論文の執筆、国際共同研究の推進、学際的研究の企画などに取り組む必要がある。

**藤田**：博物館活動に忙殺されているためか、研究面での展開、実績、蓄積がやや少なめである。さらに、国際性を強調しているのであるから、英文論文の執筆を増やすべきである。

**遠藤**：多分野にわたる総合的科学哲学に根ざす研究姿勢は、世界に誇れる水準にある。博物館の研究成果を短期的に定量化することは元来不可能であり、昨今巷によくあるそのような評価方針の誘導に惑わされることなく、長期的視野に立った研究を、このまま継続し、発展させていきたい。

**山内**：3つの研究系に分けられているが、系の枠を超えた研究をそれぞれしているのなら別の枠を設けたほうが良いと思う。

**西**：大学博物館の得意とする分野であり、「教官全員が学芸員」という強みを持つ。ただ、学部教官と博物館教官の研究は、本来少し違うものと思うが。

**板橋**：専任教員の研究活動については評価できる。

**斉藤**：同一テーマで継続的な研究費の獲得は普通あり得ず、同一メンバーで異なる魅力的なテーマの研究の計画企画も困難であるから、博物館のような小世帯で外部資金を獲得する学際的計画の立案は難しい。学内的にどんな支援体制がとられているかが問題であろう。

**大場**：研究者個々の研究と博物館スタッフとして行うべき研究の別が意識されていないように思われる。

### (2) 教育 ABBBBBBB [平均 B]

大学博物館の教育面での活動は、概ね目標を達成している。

### 学術標本に関する基礎的研究分野の後継者の養成を

博物館設置後直ちに学芸員資格関連授業・実習を立ち上げて、学部教育に大きく貢献しており、評価できる。大学院教育についても、博物館全教員が参加する共通講義・演習を立ち上げて貢献することが望ましい。学術標本に関する基礎的研究分野の後継者の養成を教育の柱とすべきである。

**藤田**：学芸員資格関連授業・実習により学部教育に大きく貢献している。大学院教育においては、各教員の専門分野での教育のみで、博物館としての貢献が見えない。

博物館としての共通講義などの形での貢献が望まれる。

**遠藤**：高度な大学教育と広い社会教育の両場面で、十二分に責務を果たしている。教育を形式的に評価しがちな今、大学博物館を研究から分離して、粗末な社会向けPR装置にしようとする意志が学内外からもたらされるはずだが、今後、そうした誤った意志に屈してはならない。

**山内**：授業等で博物館の標本資料の見学をしたが、講義よりも実物を見たほうが良くわかるのでとても良いと思った。さらに、大型プリンター等の貸し出しはとても魅力があると思う。

**西**：この分野も大学博物館得意の分野であり、概ね機能している。さらに充実強化していく必要がある。

**板橋**：「学術標本に関する基礎的研究分野の後継者の養成」を教育の本務とすべき。

**斉藤**：博物館から大学院・学部へでかけるだけでなく、ユニバーシティ・ワイド・プログラムのような、学生たちが博物館にきて学び、かつボランティアとして博物館の仕事をするのができないか。

**大場**：二足の草鞋を履かねばならない博物館教員はただでさえ多忙である。より本質的で重要な課題で十分な貢献をするためには、やるべきことを厳選すべきで、何でもすればよいわけではない。博物館で研究を行っている教員でなくてはできない教育への貢献を検討すべきで、計画の一部には必要性に疑問を抱くものがある。

### (3) 学術標本 ABCCCCDD [平均 C]

学術標本に関する活動は、相応に機能している。

#### 保管・管理体制整備に関する全学的合意形成を

創造的な標本蓄積の未来像を構築することが重要である。保存や貸借の組織化、収蔵場所、データベース化のための人、経費などは博物館職員だけで解決できる問題ではなく、大学として博物館をどのように支援するか、全学的合意形成を図るべきである。

博物館が学内の学術資料を取りまとめ、「九州大学所蔵標本・資料」を編集・出版したことは高く評価できる。

**藤田**：一級の学術資料でも劣悪な保管設備の片隅に眠っては宝の持ち腐れである。

文字通り、腐れてしまわないような保管設備と管理体制の構築が急務である。収蔵場所、データベース化のための人、金の不足は明白である。大学側の善処を促したい。博物館が学内の学術資料を取りまとめ、「九州大学所蔵標本・資料」を編集・出版したことは高く評価できる。

**遠藤**：標本収蔵の理念、収集活動の水準は、研究・大学教育・社会教育よりもはるかに遅れをとっている。現状は恥ずかしくない収蔵整理体制を築くのに精一杯で、創造的な標本蓄積の未来像の構築に成功していない。博物館の責任とアイデンティティが、標本収蔵にあることを銘記されたい。

**菊水**：標本整理の必要性を大学の内外問わずに訴えていただき、整理とデータベース化を推し進めていただきたい。大切な財産である。

**山内**：資料によると、九州大学博物館での保管を希望する人がいるが、一部しか引き受けられないという現状から、より多くの標本資料を受け入れるべきだと思う。さらに、標本資料が学内教員によって捨てられるという事態を防ぐべきである。

**西**：収蔵庫が不十分なため、まだ保管も学部まかせのところがある。現状ではやむを得ぬが、データベース化に積極的に取り組むとともに、保管方法も十分検討すべきである。

**板橋**：学内標本の管理・保存面での体制強化、組織拡充が必要。

**斉藤**：大学移転に関連するのであろうが、標本収納スペース、整理するための要員不足、保存や貸借の組織化、予算的配慮など、問題が多いようにみえる。これらは博物館職員だけで解決できる問題ではなく、大学として博物館をどのように支援するか、全学的意志の問題である。

**大場**：博物館の第一の目的は学術標本・資料の恒久的な保管とその活用にあることに照らして、余りにも劣悪な施設の中でスタッフは最大限の努力をしている。

#### (4) 展示 AAACCCCD [平均 B]

展示活動について、委員の評価が大きく分かれたが、平均すると概ね目的を達成しているという評価となった。

##### **展示スペースの確保を**

展示を教育研究に有効に機能させるためには、十分な広さの常設展示のスペースの確保が必要である。大学博物館における展示の目的、必要な展示の規模など基本的な問題から議論を行い、活動の方針を決めるべきである。他の博物館等を借りての公開展示、サテライト展示などに工夫が見られるが、学内での特別展示にはより一層の努力と工夫が必要である。

**藤田**：九州大学の標本サイズとその学術的価値に見合った展示および収蔵スペースを持った博物館の設置が急務である。小規模の展示室が学内に散在している現状で、展示が教育研究に有効に機能しているとは言い難い。一方、こうした現状で、会場を借りて質の高い企画展示を展開している博物館の努力は高く評価できる。

**遠藤**：展示場が乏しい実情は褒められないが、そもそも九州大学の博物館に大規模な展示活動は必要ない。展示活動は先発の大学博物館や公的博物館組織で、すでに実現していることである。九大は現状で十分で、これ以上の展示への投資は大学原資の浪費と非難されても止むを得まい。

**菊水**：十分に目的が達成されていると思うが、より一層の努力と工夫を求める。準備や解りやすさに配慮すべきであろう。

**山内**：サテライト展示は非常に有効だと思う。博物館独自の建物はないが、このような展示をさらに増やすことで宣伝にもなり、いざ博物館の建物が出来た時に受け入れられやすくなると思う。

**西**：公開展示は現況の中でよく頑張っている。特別展示は、場所等の制約があり、不十分。

**板橋**：「サテライト展示」など工夫と努力が見られる。ただし、これにエネルギーを取られ過ぎると困る。

**斉藤**：展示施設の無い状況で、よい実績をあげている。しかし、博物館の努力を大学側が評価して支援しているかに疑問がある。例えば、特別展示の観客数は、大学教職員と学生の全員が知合いとともに、展示に参加してくれたとは見えない。

**大場**：一流大学が情報発信すべき内容の展示なのか疑問を抱く。

#### (5) 社会貢献 AAABBCCC [平均 B]

社会貢献活動に関しては、概ね目標を達成している。

##### **本質的な貢献は収蔵、研究・教育で**

サテライト展示、地域資源再発見塾など工夫をこらして地域社会の教育に貢献しているが、大学博物館の重要な社会貢献は標本資料の収蔵・公開と研究・教育であるという観点からは、収蔵施設設備の手当てをはじめとする博物館に対する全学的なサポートが欠如している。

公開講座は回数を減らしてでも、九大でなければ行えないようなインパクトのある貢献を考えるべきである。

**藤田**：公開展示、特別展示、サテライト展示などの展示、公開講演会、地域資源発見塾などにより、地域社会の教育に貢献している。一方で、貴重な学術標本の適正な収蔵管理が大学博物館が担うべき重要な社会貢献であるという観点からは、収蔵施設設備の手当てをはじめとする博物館に対する全学的なサポートが欠如している感がある。自らの大学の貴重な知的資産を粗末にすることの無いようお願いしたい。貴重な学術資料・標本は人類の資産でもあり、その管理を国民が大学にゆだねているという視点を忘れずに願いたい。

**遠藤**：現有スタッフの能力で最大限の貢献を続けている。大学博物館を単なる宣伝装置とする誤謬は、政官財界にも学内にも見られようが、学術の社会貢献は大学・学界全体の課題であって、一部局の責務ではない。九大内の一組織たる博物館が、今



以上の貢献を求められる理由はない。十分である。

菊水：展示の共同企画や巡回をぜひとも検討して頂きたい。

山内：概ね達成されていると思う。学内・学外でのシンポジウム・セミナーの案内を詳しく書いたポスター等を掲示板に貼ってほしい。

西：九大・糸島会での活動など、よくやっている。社会貢献は、施設の整備にあわせて、これから着実に取り組んでいくこと。

板橋：特に「地域資源再発見塾」は良いアイデア。ただし、大学博物館としての「社会貢献」は、資料保存、研究的機能によるものであると思う。

斉藤：積極的な取組みがなされていることがうかがわれる。しかし、大学博物館として優先すべきは、あくまでも大学における研究と教育への貢献である。

大場：公開講座は回数を減らしてでも、九大でなければ行えないようなインパクトのある貢献を考えるべきである。

#### (6) 学内他部局との連携 AABBBBCC [平均 B]

他部局との連携は、概ね目標を達成している。

##### 博物館に対する全学的支援・協力体制を

公開展示での他部局からの協力、支援は概ね順調に得られており、卒論公開講演会における他部局へのサポートなど、協力関係が蓄積しつつある。博物館が一方向的に他部局を支援するのではなく、博物館に対する全学的な支援・協力体制を作ることも重要である。

標本の一元管理については、他部局からの物心両面のサポートを取り付ける努力が必要である。

藤田：学内に散在している学術標本を博物館が一元管理することを目標としていることからみると、この目標に向けて、他部局からの協力がどの程度得られているかは不明である。

公開展示における他部局からの支援、卒論公開講演会における他部局へのサポートなど、協力関係が蓄積しつつある面もあり、これらを基礎に他部局から、一元管理に向けての物心両面からのサポートを取り付ける努力が必要である。

大学は貴重な学術資料の一元管理を指導的、組織的に実現させる努力をするべきである。

遠藤：総合大学の事情に力強く対処している。が、各部局が博物館を便利な粗大ゴミ処理施設、あるいは広告塔だと誤解している傾向はないか。象徴的には分子生物学者が自然史標本を博物館に捨てに来る現状が見られているが、それが資料部の未来の姿であるなら、部局間関係の改善を要する。

菊水：より一層の各部局への宣伝、働きかけに努力すべきであろう。研究室を公開し、サテライト展示としてはどうか。

山内：新キャンパスでの博物館への資料の移動や、データベース化など、他部局との

連携がこれまで以上に必要になると思う。

**西**：全学委員会などに参画し、博物館の存在をよく訴えている。

**斉藤**：博物館が一方的に他部局を支援するのではなく、いま必要なのは、博物館に対する全学的な支援・協力体制をつくることであろう。双方向のサイエンス・コミュニケーションをとることが重要である。

#### (7) 他博物館等との連携 AAAABBBB [平均 B]

他博物館との連携は、概ね目標が達成されている。

##### 双方向の協力体制構築を

展示スペースがない九州大学が近隣の博物館・科学館内での展示を取り付けるなど、連携がうまく機能している。九州国立博物館と資料の研究、保存、修復などで十分連携を図ることなどに努力すべきである。今後、双方向の協力体制を構築することが重要であるが、それにどこまでエネルギーを割くか、大学博物館の使命に立ち返って議論し、活動方針を決める必要がある。

**藤田**：学内に展示スペースがないことを逆手にとって、近隣の博物館・科学館内での展示を取り付けるなど、連携がうまく機能しているといえる。大学博物館としての特色、個性を認識し、維持することが必要課題である。

**遠藤**：自治体の博物館・社会教育施設との連携は、数々の教育事業の実施に見えている。スペースをもたない九大が、立地に恵まれた学外の博物館と協力体制を築くのは当然で、地道な館外協力を継続していると評価することができる。だが、これ以上の力をこの種の活動に割くのは無駄である。

**菊水**：より一層の情報交換や緊密な連携を求める。インタープリターを養成する必要がある。

**山内**：福岡市博物館や福岡市立少年科学文化会館での公開展示など、うまく連携がなされていると思う。

**西**：福岡市博物館、少年科学文化会館などよく連携をとっている。今後九州国立博物館と資料の研究、保存、修復などで十分連携できるのではないかと。

**板橋**：工学的資料を文化史系博物館で「人の生活」として展示したのは、工夫が見られる。

**斉藤**：博物館の努力が認められる。ここでの連携も双方向の協力体制を構築することが大事であるが、大学博物館としてはやはり研究と教育に力点をおくべきであろう。

#### (8) 国際連携 AAABBBBC [平均 B]

国際連携活動は、概ね目標を達成している。

##### アジア地域の学術標本の集積拠点に

国際連携、国際交流はおおむね良好に機能しているが、標本収蔵の充実に関する多国間連携をさらに強化すべきである。アジア地域の自然史インベントリー、歴史

民俗学資料の集積拠点として機能することを期待する。

博物館の努力だけでは解決困難な問題があり、経常的な外国旅費や海外からの研究者を受入れるための施設、設備など、大学として用意できるかが緊急の課題である。

国際コミュニケーション可能な言語で論文を書くよう努力する必要がある。教員個々の連携とともに、博物館としての連携を計画すべきである。

**藤田**：海外拠点形成、国際交流協定の締結、海外研究者の招聘など、国際連携、国際交流はおおむね良好に機能していると思われる。研究論文を通しての国際交流という面からは、日本語の論文がほとんどという研究者もおられる。学問分野の特性もあろうが、その分野を紹介する意味でも広く国際コミュニケーション可能な言語で記載された論文が期待される。

**遠藤**：現状の交流は評価できる。が、標本収蔵の充実に関する多国間連携をさらに強化すべきだろう。アジア地域の自然史インベントリー、歴史民俗学資料の集積拠点として機能することを期待する。途上国は文化を継承する能力に乏しく、九大への国際的期待は大きい。

**菊水**：外来研究者の研究スペース確保に努めていただきたい。

**西**：現況の人員体制でよくやっている。

**板橋**：今後ともアジアとの研究連携推進を。

**斉藤**：これから充実していく課題と理解されるが、博物館の努力だけでは解決困難な問題がある。経常的な外国旅費や海外からの研究者を受入れるためのスペースとファシリティなど、大学として用意できるかが緊急の課題であろう。

**大場**：博物館としての連携か、教員個々の連携かよく判らない。

#### (9) 情報発信 AAABBBCC [平均 B]

情報発信活動は、概ね目標を達成している。

##### マスコミへの取り組み強化を

ITを利用した情報発信は高く評価できるが、マスコミへの発信、およびマスコミを利用した発信への取り組みが不足している。時間と人手のかかるデータベースの構築について、学内での協力者（教職員や学生または非常勤職員やボランティア）の確保が必要であろう。

**藤田**：ホームページ、インターネット博物館、データベース公開など、ITを利用した情報発信は高く評価できる。一方で、マスコミへの発信、およびマスコミを利用した発信の必要性が感じられる。

**遠藤**：持ち得る学術資産に関してすでに十分な努力を経て、情報発信を実行している。ただし、気をつけるべきは、情報発信は社会教育を目的としたものだけではない。アカデミズムの高度化のための情報発信体としての責任が、今後は厳しく問われる

だろう。

**菊水**：マスコミを上手に利用した宣伝も工夫の余地あり。ウェブサイトのほか、携帯サイトやハプニングを上手に生かす方法も。たまたまぶらり見に来た人を増やす工夫も必要であろう。

**山内**：ホームページやインターネットでは、閲覧者は能動的に見るのであって、少しでも興味があるからだと思う。九州大学の博物館の存在を知らない人を対象とした、利用者が受動的に知ることが出来る宣伝方法を考えるべきだと思う。

**西**：「学部教官はすべて学芸員」という強みを活かして、ホームページなどよくやっている。

**板橋**：人手不足か。公開データベースはもう少し親切に。

**斉藤**：インターネット利用の情報発信の努力が認められる。時間と人手のかかるデータベースの構築について、学内での協力者（教職員や学生または非常勤職員やボランティア）の確保ができているのであるだろうか。

#### (10) 出版 AABBBBBC [平均 B]

出版活動は、概ね目標を達成している。

##### サイテーション評価になじまない出版物でも出版を

「九州大学所蔵標本資料冊子」は作成の労力と内容を高く評価したい。標本資料冊子英語版の出版が待たれる。「博物館概要」も必要情報を網羅し、適切といえる。特に、英語版を準備したことは高く評価できる。

遠い未来にも学者から引用されるような今流のサイテーション評価\*になじまない紀要類を、あえて粘り強く出版することは博物館の不変の責任である。（\*引用件数に基づく評価）

廉価で良質な図録を作成し、有料化を検討すべきである。

**藤田**：特に、「九州大学所蔵標本資料冊子」は作成の労力と内容を高く評価したい。「博物館概要」も必要情報を網羅し、適切といえる。特に、英語版を準備したことは高く評価できる。「九州大学所蔵標本資料冊子」の英語版の出版が待たれる。

**遠藤**：展示図録のようなこれ以上の社会貢献的出版は博物館の機能バランスを崩壊させる。それよりも、遠い未来にも学者から引用されるような、今流のサイテーション評価になじまない紀要類を、あえて粘り強く出版する成果を追うべきである。それは博物館たるものの不変の責任である。

**菊水**：図録の有料化（低価格で良質なものを）を検討すべきである。

**山内**：九州大学博物館の紹介、図録など、資料はとて見やすく、内容も面白いのでとても素晴らしいと思う。

**板橋**：「図録の有料化」は当然。

**斉藤**：若者の活字離れ、ネット情報の氾濫、印刷製本費確保の問題などで、出版物の刊行が難しくなっている。しかし、内容が明らかにされた年月日が固定されて記録

される印刷物は、移り変わりながら、ついには消失してしまうネット上の情報と違って、とても重要である。

### 3. 管理運営と財政

#### (1) 管理運営のあり方 AAABBBC- [平均 B]

大学博物館の管理運営のあり方は、概ね目標を達成している。

##### 学術研究のデータベースセンターに

「本学の（標本資料に基づく）学術研究の中核」というより、組織を拡充して「本学の学術研究のデータベースセンター」になることを目指すべきである。大学の博物館に対する考え方が明確になっていることが大事である。

透明性の高い管理運営を目指し、情報公開に努めることを明確にすべきである。

藤田：管理運営の理念に「本学における学術研究の中核として活動していかなければならない」とあるが、本当に「学術研究の中核」となることが博物館に求められているのか。「学際的研究の中核」「学術研究情報の発信拠点」ならまだ理解できる。

「結果を学内外に情報発信することにより理解と信頼を得られるように」とあるが理解と信頼を得るための情報は結果だけではないはずである。「透明性の高い管理運営を目指し、情報公開に努める」ことを明確にすべきである。

遠藤：博物館のあり方としては、十分な実現を見ている。問題は、今後より九大独自の博物館像を模索し、学術文化の未来を第一に考えた管理運営のあり方を生み出していくことである。現状は大学博物館の一般的な姿勢として、あるレベルに達しているということに過ぎない。

板橋：「本学の学術研究の中核」というより、組織を拡充して「本学の学術研究のデータベースセンター」に。

斉藤：大学の博物館に対する考え方が明確になっていることが大事である。

#### (2) 体制 ABBBBCE- [平均 B]

管理運営体制については、委員の評価が分かれたが、平均すると概ね体制が整っているという評価となった。

##### 教員会議の明文化、博物館独自の事務部を

運営体制と意思決定の体制については、副館長制度、運営委員会、各種委員会の体制でおおむね機能できる体制になっているが、教員会議が明文化されていない非公式の会議であるのは問題である。博物館内規として明文化すべきである。

博物館事務は理学部事務部との共同で行われているが、学内共同教育研究施設という性格上、一部局の事務部との連携ではなく、博物館独自の事務部を持つべきである。また、「資料管理部」の設置が必要であろう。

大学本部との意思疎通が十分図られるような館長機能の高度化が望まれる。

藤田：運営体制と意思決定の体制については、副館長制度、運営委員会、各種委員会の体制でおおむね機能できる体制になっていると考えられるが、それらを機能させるための重要な会議体である教員会議が明文化されていない非公式の会議であるのは問題である。この会議は他部局から選任される館長と博物館専任スタッフとの意思疎通においても重要な役割を担っていると考えられる。博物館内規として明文化すべきである。

博物館事務は理学部事務部との共同で行われているが、学内共同教育研究施設という性格上、一部局の事務部との連携にそぐわないところがある。

遠藤：博物館の内政としては妥当なシステムを備えているが、一方で、これでは九州大学本体に対して、部局の意志を表明する機能が保証されていないといえる。弱小部局として、瑣末な責任を押し付けられないように、大学本部との意思疎通が十分図られるような館長機能の高度化が望まれる。

菊水：博物館独自の事務体制を持たれたし。

西：博物館としてあたえられた体制の中で、よくやっている。

板橋：資料の保存管理体制拡充のため事務部の他、「資料管理部」の設置が必要。

斉藤：大学外にある一般の博物館と同じではなく、大学博物館として特有の体制をとることが望ましい。その基本となるのは、研究と学生の教育である。

### (3) 教員組織と人事 AAABCDD- [平均 B]

評価が分かれたが、平均すると概ね機能しているという評価となった。

#### 博物館の人的拡大は必須

教員人事は公募を原則としており、公正な選考が行われる体制ができている。

要員不足は明白であり、九大は博物館の人的拡大を必須としている。法人として定員が増やせないのならば、各部局からの、より大規模な人員の異動配置を必要とするだろう。

研究体制の充実が重要である。

藤田：教員人事は公募を原則としており、公正な選考が行われる体制ができている。

遠藤：人員数の貧困は明白である。法人として定員が増やせないのならば、各部局からの、より大規模な人員の異動配置を必要とするだろう。今後の大学に必要なのは、研究の合理的生産性ではなく、人類への恒久的文化的貢献である。そのために九大は博物館の人的拡大を必須としている。

山内：気軽に標本を閲覧できるようにしてほしい。

西：現況の中でよくやっている。

板橋：要員不足と思われる。

斉藤：大学博物館が目指すところは、九州大学の知的財産の蓄積の上にとって、研究を発展させ、良質の教育を展開することにあるはずだから、博物館の緊急課題は研究体制をより充実するところにある。

#### (4) 財政 ABBBCDE- [平均 C]

財政に関しては、評価が大きく分かれた。平均は、相応に目的を達しているという評価である。

##### 継承的予算体系を

大学からの予算規模は同規模の国立大学法人の博物館に配分される予算と比較すると、同等以上の予算を得ているといえる。また、学内の競争的資金も獲得している。一方で、外部資金の獲得額についてはいっそうの努力が望まれる。博物館独自の継承的予算体系を備えるべきである。

藤田：大学からの予算規模は同規模の国立大学法人の博物館に配分される予算と比較すると同等以上の予算を得ているといえる。また、学内の競争的資金も獲得している。一方で、外部資金の獲得額についてはいっそうの努力が望まれる。

遠藤：慢性的な財政の困窮にあることは間違いない。専任教官の学術予算獲得の努力もさらに必要だろうが、より深刻なのは、博物館の特殊性を考慮した、長期的安定財源をもたないことである。競争的資金獲得という評価基準に吞まれない、博物館独自の継承的予算体系を備えるべきである。

菊水：資金確保に努める。

山内：この先の経費が確保できるようにこのまま取り組んでいくのが大事だと思います。

西：予算確保にも努力している。今後、移転前でもデータベース化など相当の経費が必要であるが、将来の博物館活動の基盤となるものであり、大学としても十分配慮していくべきである。

板橋：予算規模が小さく、資料管理面の体制が保障されていない。

斉藤：博物館に対する予算措置が合理的であるかどうか。そのことに関して、学内では、だれが、どこで、どのように評価しているのでしょうか。

#### 4. 施設設備

##### (1) 施設の状況 CCDDDEEE [平均 D]

設備の状況は、目標が相応に達成されているから、ほとんど達成されていないままで、評価が分かれた。平均は、ある程度目的が達成されているである。

##### 収蔵施設の設置が急務

現状はタコ足、狭隘、全くの未整備と言わざるを得ない。九州大学では、新キャンパス移転の際、行き場を失った貴重な学術標本が廃棄される可能性が考えられる。いま緊急に必要なのは展示場ではなく、廃棄の危機に直面している学術標本の大規模かつ高度な収蔵施設である。また、分散している施設の一本化、博物館専任教員や学生・院生の研究スペースの確保も重要な課題である。大学としての対応が望まれる。

藤田：博物館とはいえない狭隘な数個の展示・収蔵スペースが学内に散在している。

最近確保した工学部の工場跡を有効利用すればスペース問題はやや緩和されるであろうが、九州大学が大切に保管すべき資料のサイズにあった収蔵・展示スペースの面積には満たない。また、博物館専任教員や学生・院生の研究スペースの確保も重要である。

新キャンパス移転を控えて、行き場を失った貴重な歴史的資料や学術標本が廃棄される可能性も考えられる。博物館完成まで、これらを収蔵する収蔵庫の設置が急務である。大学としての対応が望まれる。

**遠藤**：独自の収蔵庫をすぐにでも新規に獲得していくべきである。キャンパス移転にともなって、部局から譲り受ける施設や新規起工計画施設もあろうが、現状はあまりにも貧困である。強調するが、いま必要なのは展示場ではない。大規模かつ高度な資料収蔵施設である。

**菊水**：スペース確保に努める。館長にモバイルをおすすめ。フリースペース。空間圧縮。いまある空間を最大限に有効活用。

**山内**：標本の保存スペースが少なく、消失の危険性が懸念される。早急に保存スペースの確保が必要だと思う。

**西**：博物館活動を果たしていくためには、全く不十分な状況である。大学としても可能な限り配慮すべきである。

**板橋**：タコ足。狭隘。全くの未整備と言える。

**斉藤**：現状では、まだ不十分である。博物館は地域に根ざしているとはいえ、その活動は国際的な活動を分担しているのであるから、最低限の対応ができるようにしておく必要がある。

## (2) 設備の状況 CCCCCCEE [平均 C]

設備の状況については、相応に達成されているという評価が大多数であった。

### 収蔵設備を自己点検・評価すべき

展示スペースが不足する中、展示用設備は現有でほぼ満足できる状態にある。収蔵設備の充実は、重要事項として自己点検・評価で取上げるべきである。研究設備については、自らの標本資料を自らデータ化して新しい理論の創出者となるため、個々の研究者が外部資金獲得等により充実させてゆくことが望ましい。

学内的にはもちろんのこと、国際的、社会的にも共同利用施設である博物館を、全学的にどのように考えるか議論すべきである。

**藤田**：展示スペースが不十分な中、展示用設備は現有でほぼ満足できる状態にあると考えられる。当然、スペースの拡充に伴って、展示用設備の拡充も必要になる。

収蔵用設備について自己点検評価では点検を行っていないようであるが、多くの貴重な学術標本を預かる各部局で適切な環境の下に保管できる収蔵設備が完備されているのであろうか。博物館に移管された標本の収蔵は塵埃はもとより、カビや昆虫の侵入を防止できる設備、空調設備の整った保管場所に保管されているのであ



うか。学術的に貴重な標本・資料を適切に保管し、現在、未来の研究者の利用に供することが博物館の重要な使命である以上、収蔵設備の充実は忘れてはならない重要事項として点検評価すべきである。

研究設備については、個々の研究者が外部資金獲得により充実させてゆくことが望ましい。

**遠藤**：研究のかなりのプロセスを他部局との共同で遂行している現状を認識した。しかし、近未来的には、自らの標本資料を自らの設備でデータ化し、新しい理論の創出者とならなくてはならない。設備という観点からは、明らかな予算規模の拡大で対応する必要がある。

**西**：現況は、施設の制約もあり最低限でやっている。資料の保存のための設備も検討されるべきである。

**斉藤**：これも充分とはいえない状況にある。学内にはもちろんのこと、国際的にも、社会的にも共同利用施設である博物館を、全学的にどのように考えられているかが問題である。

### (3) 新キャンパス計画 AAAABBCC [平均 B]

新キャンパス計画における博物館の位置付けは、目標が概ね達成されている。

#### 新キャンパスの中心に博物館を

キャンパス計画でその中心的位置に博物館を置くというアイデアは評価できる。このアイデアを維持し続けるため、博物館の努力に期待する。大学博物館として研究と教育に貢献しつつ、九州大学の存在が市民のプライドとなる活動が展開されるだろうと期待される。

新キャンパスに新しい博物館が建設されるまでは、移転の際に廃棄される可能性の高い学術標本を保管するため、学内の空きスペースやプレハブの設置により対応すべきである。

**藤田**：新キャンパスへの移転は古い学術的価値の高い標本が廃棄されてしまう可能性の高い危機であると同時に、博物館にとってはそれらの標本収集のチャンスでもある。そこで必要となるのが収蔵庫である。学内の空きスペースやプレハブの設置により対応すべきであろう。また、その中に収納すべき標本類を、劣化を防ぎ、安全に保管するための密閉型収蔵ケースが必要となる。新博物館で展示を優先するのであれば、ますます博物館外の収蔵スペースと設備が重要となってくる。

**遠藤**：キャンパス計画でその中心的位置に博物館を置くというアイデアは評価できる。しかし、あまりにも先のことになるため、昨今の朝令暮改の法人経営のなかで、このアイデアを維持し続けるのは至難の業である。博物館の努力に期待する。

**菊水**：新たな「大学の顔」としての重要な役割が求められる。

**山内**：博物館の移転は第三ステージということで時期がかなり遅いので、なるべく早めるよう努めるのが大切だと思う。

西：現在考えられている内容は良い。社会貢献のための施設整備のあり方は、もっとよく論議する必要がある。

板橋：「大学の顔」となることを望む。

斉藤：大学博物館として研究と教育に貢献しつつ、九州大学の存在が市民のプライドとなる活動が展開されるだろうと期待される。

## 5. 将来構想・将来計画

### (1) 新しい大学博物館を考える会 AAAABBCE [平均 B]

概ね高い評価が付けられたが、提言に具体策が乏しく、大学博物館の発展にまったく寄与していないという意見もあった。

#### 大学博物館の理念や提言の具体化の議論を

大学全体として、この提言を尊重し、ぜひ実現に向けて行動することを希望する。地域と大学との橋渡しとしての博物館となるためには、大学博物館の特色とは何か、大学博物館の理念とは何かについての議論が必要であり、新たな役割を担った「考える会」を検討してはどうか。

藤田：専門委員会「新しい大学博物館を考える会」を運営委員会の下に設置したことは高く評価できる。全学からの委員が考えることにより、大学博物館の重要性を再認識し、博物館のサポーターとして博物館を支援する側に回ってくれる可能性もある。答申内容に大学博物館の特色を生かした魅力ある博物館作りを目指すべきであるとあるが、大学博物館の特色とは何か、大学博物館の理念とは何かについての議論はなかったのだろうか。

遠藤：大学博物館の発展には、知を育て、未来へ引き継ぐというアカデミズムの目標を達成することが不可欠であり、その意義を理解する者が初めて地域貢献や社会連携を熟慮すべきである。が、この会は、形式的な地域貢献と社会連携のみを大学博物館の責任として提起し、その議論の水準は平凡で、大学博物館の発展にまったく寄与していない。

菊水：新たな役割を担った「考える会」の必要性は？

地域と大学との橋渡しとしての博物館。

山内：現在の問題や社会貢献の在り方などを十分に検討されていると思う。

板橋：提言に具体策が乏しい。

斉藤：大学全体として、この提言を尊重し、ぜひ実現に向けて行動することを希望する。

### (2) 事業部構想 AAABBCE- [平均 C]

事業部構想については、地域社会への貢献のための具体的な組織の構想として高く評価された反面、大学博物館の設置理念との整合性が厳しく指摘され、現段階では不要ではないかという意見や、大学博物館としては不要であるという意見もあり、評価が大きく分かれた。

### 大学博物館の設置理念との整合を

地域社会への貢献面と、大学博物館の特色である収蔵、研究面を両立させるための具体的な組織の構想であり、高く評価される反面、大学博物館の最大の使命が何か、現段階で必要か検討することが望まれる。

**藤田**：博物館の地域社会に対する社会貢献、社会連携の事業を遂行する部署として事業部を設ける。博物館事務は独立した事務組織とする。地域社会への貢献のための具体的な組織の構想であり、高く評価できる。博物館の設置理念との整合を図る必要がある。理念の見直しも必要であろうが、大学博物館の最大の使命が何かを踏まえたうえで、構成員のエネルギーの注ぎ方を検討すべきである。設立当初の設置理念にも、地域社会への貢献事業に勝るとも劣らない社会貢献が含まれることを認識した上での構想であることを確認したい。

**遠藤**：全面的に再考を要する。これは文科省や自治体が運営する巷の博物館と同一レベルである。大学とアカデミズムが200年後に何を残せるかという視点で、社会の現実と対話しなければ、大学の博物館としては失格である。現状は単にどこにでもある民営的サービス部門の羅列に過ぎない。

**菊水**：大いに期待できる。

**西**：施設の整備、充実状況を見ながら着実に取り組んでいく必要がある。：

**板橋**：資料保存・管理、研究面と「社会貢献」面をそれぞれ分担するためには必要と思われる。単に「必要」というのではなく、大学博物館の「社会貢献」は資料保存・管理・研究と思うが、それにしわ寄せがくるのであれば「必要」という意味だ。

**斉藤**：展示や普及活動を主体的な業務とする部門は、現段階では不要ではないか。現在の研究部門を充実することで、ほとんどの事業展開は可能であると考え。その意味からいって、いま必須かつ緊急になすべきことは、期限付きあるいは非常勤であっても、研究者の確保である。

## 6. 中期目標・中期計画

### (1) 教育に関する目標 AAAABBBC [平均 B]

目標は、概ね達成されている。

#### 学芸員養成教育の一層の充実を

総合大学の博物館として、優れた教育計画を備えている。分野的にも、また質的にも多彩な要望があるなか、限りある人員で最大限の成果をあげることを期待する。

学芸員養成にかかわる教育は博物館が行っている博物館らしい教育である。自己点検・評価報告書の中期目標・中期計画の要約に記載すべきである。大学院レベルの教育における博物館の貢献として何を目指すのかを明らかにすべきである。

施設の整備、充実状況を見ながら着実に取り組むとともに、博物館から大学の他部局への教育支援だけでなく、博物館活動への全学的支援が必要であることを訴えるべきである。

藤田：学芸員養成にかかわる教育は博物館が行っている博物館らしい教育である。自己点検・評価報告書の中期目標・中期計画の要約に記載すべきである。

大学院レベルの教育における博物館の貢献として何を目指すのかを明らかにすべきである。

遠藤：伝統ある総合大学の博物館として、優れた教育計画を備えている。分野的にも、また質的にも多彩な要望が届けられていると推察されるが、限りある人員であっても、最大限の成果をあげられることを期待する。

山内：十分な教育の目標が定められていると思う。

板橋：博物館専任教員養成を。

斉藤：博物館から大学の他部局への教育支援だけでなく、まだ弱体とってよい博物館活動への全学的支援に配慮していただきたい。

大場：何故卒業論文発表会を博物館が支援しなければならないのか。仮に大学が行っている先端研究教育を具体的に提示することが目的とするなど、明確な目的を定められているのであれば、そのこと（先端研究教育の公開）は博物館に課せられた業務だからこれを支援する必要があることが理解できる。この例に象徴されるように、色々なことを実施しているが、それがどのようなヴィジョンのもとになされているのか、またそれが大学及び博物館が決めた博物館の目標・計画にどのように位置づけられるものなのか、明確にすべきなのではないか。

## (2) 研究に関する目標 AAABBBBB [平均 B]

研究に関する目標については、目標が概ね達成されている。

### 国際的共同研究、学際的研究を

国際的な研究交流、共同研究は重要な課題となりえるので、研究目標の中に入れるべきである。

目指す研究水準を明確に記載することが必要である。境界研究、学際研究、資料部設置などの推進が望まれる。

博物館での研究と教育には博物館からの主張よりも、周りの理解が大きな力となる。全学的研究支援のための活動も重要である。

藤田：国際的な研究交流、共同研究についての記述がなく、その他の目標の中に記載されているが、重要な課題となりえるので研究目標の中に入れるべきであろう。

点検評価報告書の研究に関する目標の(1)と(2)は同じことではないのか。

目指す研究水準を明確に記載していない。

遠藤：研究集団としてすぐれた計画を備えていると推察される。あえて指摘すると、博物館という属性のもとで、世界をリードするという気概が、計画や目標により強く打ち出されているべきかと感じる。しかし、総じて、館の研究機能に関する将来像は的確である。

山内：十分な研究の目標が定められていると思う。化石標本以外でもさらにデータベ

ース化が進んでいくと良い。

**板橋**：境界研究、学際研究、資料部設置などの推進を。

**斉藤**：博物館に対する全学的研究支援が必要である。九州大学にかかわるすべての人が、自分の博物館であるという意識をもって、研究と教育に協力していただきたい。そのためには博物館からの主張よりも、周りの理解が大きな力となる。

### (3) その他の目標 AAABCCD- [平均 B]

その他の目標に関しては、目標が概ね達成されている。

#### 人的ネットワークの構築を

九大博物館が行っている地域貢献や社会連携は高く評価されるが、社会への盲目的追随に陥らないよう、大学博物館の使命との整合性に常に留意すべきである。

貴重な学術資料、特にタイプ標本の収蔵管理の再点検、整理、よりよい保管への移行など機能強化の位置づけが必要である。

学術標本を一般に開放する方法・手段を構築すべきである。また、各分野における人的ネットワークの構築の必要性もあるのではないか。ボランティア制度の導入、インタープリターの養成を検討すべきである。制度、組織の具体化に向け、地方自治体教育委員会などと協議していく必要がある。

**藤田**：貴重な学術資料、特にタイプ標本の収蔵管理の再点検、整理、よりよい保管への移行などを加えるべきである。さらに、移転に伴い廃棄の危機にある貴重学術標本の収集、管理、および、「捨てない」ことの徹底もキャンパス移転完了まで必要であろう。

**遠藤**：十分すぎるほどの地域貢献や社会連携を実施している。評価は高いが、評価者としては、これが衆愚や政官財界への盲目的追随に陥らないように警告を發しておきたい。大学はつねに文化を自分の責任でリードしなくてはならない。それが実現できる「その他の目標」であってほしい。

**菊水**：学術標本を一般に開放する方法・手段を構築して頂きたい。また、各分野における人的ネットワークの構築の必要性もあるのではないか。ボランティア制度を導入することは結構だが、ボランティアのみに頼らないインタープリターを養成することも大切。

**山内**：十分な目標が定められていると思う。

**西**：具体化に向け、地方自治体教育委員会などと協議していく必要がある。

**板橋**：博物館の「地力」である資料の収集、保存、管理機能強化の位置づけが欲しい。

## 7. 点検評価

### (1) 自己点検・評価委員会内規 AAABBB-- [平均 B]

内規は、点検評価という目的に対して概ね機能している。

### 評価の間隔の規程を

何年毎に自己点検・評価、外部評価を行うか規程が無い。館長や委員の任期、中期計画に配慮しながら、明文化を検討すべきである。

外部評価と自己点検・評価との関係を明確にすることが必要である。

藤田：何年ごとに自己点検評価を行い、何年ごとに外部評価を行うのか、記述がない。

外部点検評価と、内部点検評価の関係を明記すべきである。

委員の任期は2年であるが、点検評価は2年ごとにやるのか。より長期の周期で行うとすれば、2年任期の委員が同時に辞めると、継続性が失われないか。

遠藤：点検評価という目的に対して、十分に満たされている規定と考えられる。時代に即応した変更は必要だろうが、現状は十分に目的を達している。

斉藤：館長の任期と中期計画との対応などで、業務の遂行に影響がないよう検討する必要がある。

### (2) 外部評価の体制 AAABBBC- [平均 B]

外部評価の体制は、概ね機能し、目的を達成している。

#### 委員の数を増やしてきめ細かい評価を

委員の構成は適当であるが、もう少し委員の人数を増やしてきめ細かな点検をすべきであるという意見があった。

運営委員会の機動的な開催について、更に工夫する必要がある。

藤田：委員の構成は適当である。

遠藤：大学について自己点検では十分ではないという意見が政府内や世論に見られるようだが、そのようなある意味無責任な意見よりも、まず自己点検・評価体制自体が、公的原資を浪費しないように工夫されていることの方が重要である。この点で、現状は無駄のない優れた評価体制である。

板橋：もう少し人数を増やして細かな点検をすべきである。

斉藤：すべての重要事項を決定する運営委員会の機動的な開催が可能であるかどうか検討する必要がある。

### (3) 点検評価報告書 AAAAAC- [平均 A]

自己点検・評価報告書は十分に目的を達成している。

#### アンケート結果の活用を

報告書は必要事項を網羅し、分かりやすい。単なる点検にとどまらず、きちんと評価まで踏み込んだコメントを記載している。

公開展示などの反省点を、次回に生かした形跡がみあたらず、感想を集めただけ、集計をとっただけに終わっており、早急に改善を要する。

**藤田**：報告書は必要事項を網羅し、分かりやすい。単なる点検にとどまらず、きちんと評価まで踏み込んだコメントを記載している。評価自体は多少博物館に同情的、甘い評価となっているが、点検評価報告書としての目的と機能を十分に果たしている。

**遠藤**：組織の力量を端的に表現したすぐれた報告書が出来上がっている。これ以上の報告書の作成は、説明責任を過度にとらえた大学の頭脳の浪費につながる。現状は最高度に練られた報告書として評価できる。

**菊水**：公開展示などの反省点を、次回に生かした形跡がみあたらない。感想を集めただけ、集計をとっただけに終わっている感がある。報告書自体は良い。

**山内**：非常にわかりやすくとても参考になった。

**西**：短期間のうちに各項目についてよく調べ、評価している。

## 8. 大学の対応

### (1) 中期目標・中期計画 ABBCCCC- [平均 B]

中期目標・中期計画については、概ね目標を達成している。

#### 大学の姿勢を明確に

博物館に関する記述は極めて少なく、大学の財産である学術標本を如何に管理し、未来に生かすのか、極めて具体性に欠ける記述に終わっている。学術の牽引車たる大学の不屈の姿勢を見せて、博物館を育てる策を実際に打ち出すべきである。

博物館の役割は述べられているものの、大学の支援体制あるいは補償制度がどのようなになっているかが、よくわからない。

**藤田**：博物館に関する記述は極めて少なく、学術標本、博物館の名前を挙げて言及している箇所は各1箇所だけである。学術標本は過去の研究の証拠であり、未来の研究の材料でもある。750万点にも及ぶ貴重な大学の財産を如何に管理し、未来に生かすのか、極めて具体性に欠ける記述に終わっている。大学中枢部の学術資料の重要性の認識に問題があるのではないか。

大学の顔として、情報発信拠点としての博物館の重要性を踏まえた計画の記述がない。

**遠藤**：大学の資産や特質、学風や伝統を熟慮した優れた目標と計画を編み出している。

大学博物館に関する文言は、抽象的レベルではあり得る表現かもしれない。しかし、真に期待されるのは、学術の牽引車たる大学の不屈の姿勢を見せて、博物館を育てる策を実際に打ち出すことである。

**斉藤**：大学の財産である学術標本に対して、博物館の役割は述べられているものの、大学の支援体制あるいは補償制度がどのようなになっているかが、よくわからない。

**大場**：大学の中期目標・中期計画中に記述される学術標本に関する事項の推進並びに大学施設の開放を実施するに足る施設状況からはほど遠い。移転計画中の臨時措置とはいえ、啞然とする。こうした粗雑きわまりない状況下にモノ（学術標本）をさ

らしておく精神が、モノ離れ社会を加速していることを厳粛に受け止めるべきだ。役員会メンバーには是非、北海道大学、京都大学等の大学博物館を見学し、九州大学の状況が如何に酷いものか知ってもらいたいものである。

## (2) 博物館に対する対応 BCCCCDE [平均 C]

博物館に対する大学の対応に関しては、各委員の評価は、概ね達成されているからほとんど達成されていないまで、低いところで大きく分かれた。評価の平均は、目的は相応に達成されているであった。

### 学術標本の適切な管理は大学の責任

大学の総合研究博物館としては、資料保存、管理のセンター的機能、及び施設が最重要だが、現状では全くそれが保障されていない。博物館をどう育てるかという思慮、姿勢、施策が総じて薄弱である。

九大はキャンパス移転を控え、学術的に貴重な研究資料が散逸してしまう恐れがある。貴重な学術標本は国家的財産であり、それらの適切な管理は大学の責任である。このため、それらを一時的にも収蔵する施設の手当てが急務である。大学側の善処が望まれる。

移転完了までは、博物館は学術標本の散逸防止を最大の責務とすべきである。その意味で「社会貢献」で過大なエネルギーを使うべきではない。一般的意味の「社会貢献」は移転後で十分であろう。

**藤田**：予算面での対応は、限られた予算の中、比較的博物館を重視した配分となっているが、現状では、間接経費等の配分の増額が望まれる。

キャンパス移転を控え、学術的に貴重な標本・資料が散逸する可能性の高い現状から、それらを一時的にも収蔵する施設の手当てが急務である。大学側の善処が望まれる。

貴重な学術資料は人類の財産であり、国家的財産である。この管理を九州大学が委託されていると考えたと、それらの適切な管理は大学の責任である。

大学は100年間にわたって蓄積された750万点にも及ぶ学術資料を一元的に収蔵管理、展示をする博物館の整備を可及的速やかに行う必要がある。

**遠藤**：博物館をどう育てるかという思慮、姿勢、施策が総じて薄弱である。九大全体には、博物館に対して、社会貢献を引き受ける便利な一部局くらいの認識しかないのかもしれない。が、行革一辺倒の学術経営時代を乗り越えて、未来永劫、博物館は学術の中心であり続ける。大学として博物館を育てるための血の滲む努力を開始するべきである。

**菊水**：博物館に「大学の顔」としての役割を与えるならば、大学側からの多面的なバックアップが必要であろう。丸投げやトップダウン方式の指揮監督は、既に古い。現場に考えさせ、解決策を導き出すべきである。

**山内**：標本の保存・管理について、研究室の教授が交代する際の標本資料の整理をき



ちんとすべきであり、標本の保存スペースの確保に力を入れるべきである。新キャンパスの博物館移転を早める必要がある。

**西：**博物館資料は、九大100年の研究過程を実物で示すものであり、この実物のもつ単純かつ確固たるインパクトは、現在の加工的情報過多の社会の中で学生や社会人の学習、とりわけ将来を担う子供たちの教育、進路選択に大きな影響を与えることができる。大学博物館は大学と社会を身近につなぐ窓口であり、顔ともなる。新キャンパスの移転にあたりこの博物館の意義を全学に浸透させ、博物館活動の基盤となる標本、資料の整理、データベース化を急ぐとともに、施設整備も可能な限り早期に実施することが重要である。また、箱崎キャンパスの旧工学部本館等九大の記念碑的建造物の取り扱いにおいては、博物館の機能を考えていく必要がある。

**板橋：**大学の総合研究博物館としては、資料保存、管理のセンター的機能、及び施設が最重要だが、現状では全くそれが保障されていない。本来は「E」評価であるが、移転前という事情下なので「D」に。

大学としての「地域貢献」は現下の社会情勢上理解できるが、やはり大学は高等教育機関であるとともに研究機関であることが真の意味での大学の社会貢献。総合研究博物館もしかりで、体制不足の現状での公開展示などは無理なのではないか。

九大は移転のため、長い歴史の中で蓄積されてきた研究資料（国民の財産）が散逸してしまう恐れがある。このため、博物館がその防止の役割を担うべきで、移転完了までは、それを最大の責務とすべきであろう。その意味で「社会貢献」でエネルギーを使うべきではない。真の総合研究博物館の社会貢献は資料の収集、保存、研究であろう。一般的意味の「社会貢献」は移転後で十分。そうしたことを位置付ける中期目標・中期計画が欲しい。

**斉藤：**教育資源の社会への開放がうたわれており、博物館も重要な役割を果たすわけであるが、それは博物館だけでできるわけではない。このことを全学的に教職員と学生が共有していなければならないが、どのようなプログラムがあるのであろうか。

**大場：**取り組みがおざなりである。

## 9. 総合評価

### (藤田外部評価委員長の総括)

常設展示の場所（博物館）が無いという極めて悪い条件の中で、館員の創意と工夫で多角的な活動を行っていることを高く評価したい。大学の博物館の本来的な業務は貴重な学術資料を教育研究に利用可能な形に収集管理・展示することであろうが、開かれた大学として、市民に常時研究成果を公開できる施設が求められ、博物館がその使命をも担うことが要求されている。前述のように博物館の建物が無い状況下で、これらの要求に応えるべく、館員が非常な努力をしていることは明白である。学内学術標本の一元管理へ向けて、「九州大学所蔵標本資料冊子」を出版し、来るべき博物館の完成に備えている努力と合わせて高く評価できる。一方で、学術資料が各部局で個別管理され、管理状況も必ずしも適切とはいえない現実、博物館員の努力の及ばない

ところとはいえ、博物館の評価の観点からは、高く評価できない。750万点と言う国内大学で圧倒的に優れた標本数を持ちながら、まとまった博物館が存在しないのは、九州大学総合研究博物館の致命的な弱点である。日本一の大学博物館となり得るポテンシャルを持ちながら、それが生かしきれていない。これは大学側の姿勢に関わることであるが、フィールドワーク、フィールドサイエンスに強い九大という特徴づけを鮮明に出せる可能性をなぜ早急に生かさないので、外部からは不思議に映る。博物館員の努力はAに近いB、大学の対応はDに近いCと評価され、総合評価はCとなる。

#### (他の委員の評価)

**遠藤**：大学博物館として設立から5年ほどを経て、また国立大学のリコンストラクションを経験しながら、未来へ向けた博物館の姿を考慮してきた努力を賞賛する。しかし苦言を呈すならば、九大総合博物館は、アカデミズムを牽引するという強力な発意とアイデンティティに欠けている。その欠点は、トップダウンなどという流行の管理形式によって得られるものではない。大学本体からの支援が少なからうが、自前の施設がなかろうが、他部局の理解が乏しかろうが、大切なのは教官一人一人が生きた博物館の闘う姿を見せて、アカデミズムの実力を、社会に行政に政治に見せつけていくことである。社会貢献というもはや陳腐な説明責任の免罪符に手を出すのではなく、またときに衆愚にすり寄る傾向を見せるよりも、九大アカデミズムの真の実力を蓄積するために、地道な標本収蔵と研究、大学院教育に邁進されることが期待されている。

**菊水**：大学を取り巻く環境は、年々厳しさを増してきていると思われる。そこで、限られた予算やスペースを最大限に有効活用し、「大学の顔」という新たな役割を担うべく、大学側も博物館側も一層の努力・邁進すべきであろう。資料の一元管理もさることながら、ひとびとから愛される博物館を目指すべきではないのか。ある時は研究者であり、またある時は教育者である。インタープリターであり、学芸員でもある。今後は、マルチな研究者と人々から愛される博物館が、大学の新たな顔として求められているのだと思う。

**山内**：博物館の現在の課題として重要なことは、第一に保存スペースの確保、そして貴重な学術標本の紛失を防ぐことだと思う。さらに九州大学総合博物館の存在を世間に伝えるための情報発信を充実させ、来館者の確保が大事だと思う。学内でも博物館の存在を認識していない学生が多数いるので、まずはターゲットを学内の学生としたらどうであろう。一学生の私としても、自分の在籍する大学に誇れるものがあつたことに喜びを感じた。足元の基盤を固めることで、社会的にも通用する博物館の建物ができると思う。

**西**：博物館の教員、職員は、新キャンパス移転という暫定的かつ厳しい状況にも拘わらずソフト面を中心によく頑張っていると思う。ただ、いかんせん施設設備の不十分さのために活動に制約を受けている印象である。しかし大学博物館の役割は、地味ではあるが非常に大きなものであり、将来目標の達成のために全学への働きかけ

や地域への働きかけなど、今後ともよろしく申し上げます。

**斉藤**：多岐にわたる博物館活動が、限られた条件の中で、限られたスタッフの努力で十分に展開されていることを評価したい。

大学博物館としてのミッションを明確にして、いまやるべきことは何か、やらなくてよいことは何か、その整理をしておく必要がある。社会的要請あるいは社会的貢献を目的に、博物館にはありとあらゆる普及教育活動が強いられることが多いが、大学博物館の基本的業務は、大学における研究で裏づけられた科学的財産について、教職員と学生に理解させ、未来へ継承していくことである。九州大学人がプライドをもてる博物館となることが、地域市民のプライドであり、それが最大の社会貢献であり、国際貢献につながるといってよい。一般の公共博物館と同様な活動をして競争する必要はない。

展示は、博物館独特の表現手法であり、他の研究・教育機関ではできないものである。したがって、博物館側とともに、他部局の教職員や学生が参加して展示を構成していく作業は、よい教育的効果をもたらすと思われる。研究や教育にくわえて、展示においても、全学的な活動となることを期待する。

日本にきた外国人が、博物館を見学して日本の国力・文化を判断するように、大学博物館を訪れた人によって九州大学の功績および学術力は判断されるであろう。

その意味で、大学は緊張感をもって博物館の発展に取り組んでいただきたい。

**大場**：大学当局に博物館を有効に活用しようという意識、取り組みのいずれも感じられない。例えば、多数のタイプを含み国際的にも著明な金平教授の熱帯植物コレクション、おびただしい数のタイプを含む昆虫、アンモナイトなどの生物標本は、九大が世界に誇れる学術財産であるが、これらについてほとんどコメントさえ見られないのは驚くばかりである。そうした学術財産を所有しない開発途上国の新興大学並みの発想では、博物館を効果的に活用する良案も浮かばないのかもしれないが、これは単に九大にとどまらず、日本の大学全体にとっても悲しいことである。





## 第 2 部 參考資料



自己点検・評価報告書

九州大学総合研究博物館  
(平成12～16年度)  
— 創設からの歩みと将来展望 —

知の泉の活用と社会貢献をめざして  
地域と作る大学博物館

(2005年3月)

九州大学総合研究博物館運営委員会  
自己点検・評価委員会





## はじめに

九州大学は平成16年度の国立大学法人化、平成17年度からの元岡地区への移転開始を迎え、大学院大学として、より一層優れた教育研究拠点形成を目指している。これと同時に、地元の行政、企業、一般の人々と緊密に連携した地域に貢献する開かれた大学造りも目指している。

九州大学総合研究博物館(以下博物館という)は平成12年4月の創設以来、各専任教員の専門に応じた研究のほか、学内に分散保存されている学術標本の教育研究への活用に取り組んできた。それに加えて、学芸員資格に関連する講義・実習、各専任教員の専門に沿った学部教育、大学院教育などの高等教育に携わる一方で、公開展示、公開講演会などを通じて九州大学の教育研究活動を社会に紹介し、理解と支援を求める活動を行ってきた。

博物館が創設以来満5年を迎えるにあたり、自ら点検・評価を行い、これまでの活動を真摯に総括し、博物館が置かれている状況を正確に把握して、今後の活動の指針の策定に反映させることが極めて重要である。

本自己点検・評価報告書は、運営委員会で選ばれた自己点検・評価委員会委員が、博物館の平成12年度から平成16年度の活動について点検を行い、評価と課題についてまとめたものである。評価は大学評価・学位授与機構の例に倣い、評価項目をたて、項目を更に要素に分けて、それぞれについて、個々の委員が評価し、その結果を総括する方法で行った。

評価項目として次の6項目を取り上げ、項目・要素に応じて理念、実施体制、活動の内容及び方法、活動の実績、達成状況及び効果のいずれかについて検討した。

- I. 博物館活動
- II. 管理・運営
- III. 施設・設備
- IV. 将来構想・将来計画
- V. 中期目標・中期計画
- VI. 点検評価

評価は5段階とし、以下の表現で表した。

- (1) 目標・目的が十分に達成され、向上及び改善のためのシステムが十分に機能している。
- (2) 概ね達成されている、或いは概ね機能している。
- (3) 相応に達成されている、或いは相応に機能している。
- (4) ある程度達成されている、或いはある程度機能している。
- (5) ほとんど達成されていない、あるいはほとんど機能していない。

自己点検・評価の目的は、博物館の問題点を洗い出し、教育研究活動、社会連携活動などの改善と今後のより一層の発展に役立てることである。従って、本報告に博物館の現状を正しく反映させるために、根拠となる具体的資料を可能な限り全て揃えた。今後、博物館は、本報告書に指摘された不十分な点について掘り下げて問題を分析し、改善に取り組むことが重要である。

九州大学総合研究博物館運営委員会  
自己点検・評価委員会委員長 松隈 明彦

## 目 次

### 第1部 自己点検・評価

自己点検評価の要約	1
-----------	---

#### 自己点検・評価本文

##### I. 博物館活動

1. 活動の理念と目標	9
2. 研究	9
3. 教育	11
4. 学術標本	14
5. 展示	16
6. 社会貢献・教育普及活動	18
7. 学内他部局との連携	21
8. 他博物館などとの連携	22
9. 国際連携	24
10. 情報発信	26
11. 出版	27

##### II. 管理運営

1. 管理運営のあり方	30
2. 管理運営体制	30
3. 教員組織と人事	33
4. 財政	33

##### III. 施設・設備

1. 施設の状況	38
2. 設備の状況	39
3. 新キャンパス計画	40

##### IV. 将来構想・将来計画

1. 新しい大学博物館を考える会	43
2. 事業部構想	43

##### V. 中期目標及び中期計画

1. 教育に関する目標	46
2. 研究に関する目標	46
3. その他の目標	46

##### VI. 自己点検・評価

1. 自己点検・評価実施の経緯	48
2. 自己点検・評価体制	48

## 第2部 参考資料

資料 1	九州大学総合研究博物館の概要	49
資料 2	九州大学総合研究博物館規則	51
資料 3	専任教員の活動	54
資料 4	第1回標本アンケート調査（平成12年7月）	78
資料 5	寄贈標本	80
資料 6	公開展示	81
資料 7	特別展示	83
資料 8	サテライト展示	85
資料 9	公開講演会	86
資料10	地域資源再発見塾	88
資料11	卒業論文公開講演会	90
資料12	研究拠点の形成・共同研究	91
資料13	外国人研究者の受入	93
資料14	博物館の出版物	94
資料15	資料部・フィールドミュージアム部・協力研究員	95
資料16	他部局収蔵物・施設	97
資料17	新しい大学博物館を考える会提言	100
資料18	九州大学総合研究博物館の中期目標及び中期計画	104



## 第1部 自己点検・評価



## 自己点検評価の要約

### 1. 博物館活動

#### 1. 活動の理念と目標

博物館は、学術標本や資料を全学的視野のもとに教育・研究に有効活用することを支援し、また自ら研究するという学内へ向けた面と共に、地域の人々の学習や自己啓発を助けると言う社会へ向けた面とを併せ持っている。博物館規則などに掲げられた理念と目標は、概ねこれら2つの面への貢献について言及しているが、研究博物館であると共に社会連携、社会貢献を目指すことをより明確にすべきである。

#### 2. 研究

個人研究の多くは、一次資料の個別研究であり、十分に達成されている。資料・試料の分析や情報開示も実践面では相応に達成されている。系ごとに理論・方法に関する研究を進展させることについては、ある程度達成されているところもあるが、今後、分析機器、情報機器の充実を図り、十分な時間と経費を割くよう検討すべきである。

博物館教員は積極的に学会発表を行い、多数の原著論文などを刊行し、各分野の中核的研究者として活躍し、目標を十分に達成している。

博物館は、ただ単に自然科学と人文科学の研究者が共存するのみならず、両者が有意義な学際的共同研究を行う条件が揃っていることから、博物館が核となって学内外の研究者を組織した学際的共同研究を推進していくことが望ましい。

#### 3. 教育

博物館は、本務との調整を図りながら積極的に学部教育・大学院教育に関わり、概ねその役割を果たしている。今後、データベース論などの講義にも参画し、学術標本に関する基礎的研究分野の後継者養成に努めていくべきである。

博物館が実施する学芸員資格関連授業・実習は、博物館の機能・存在意義や基礎的な自然史学の重要性を伝え、児童生徒の理科離れ対策や一般社会人の生涯学習支援の基礎を身に付けさせるうえで、概ね機能を果たしている。一つの授業を理科系、文科系専任教員が協力して担当し、自然史系、文化史系両方の博物館に言及する努力を更に進めるべきである。福岡市博物館などの学芸員を講師として招き、専任教員の能力を高める研修会を計画する必要がある。

博物館が行う教育支援の目標は概ね達成されている。学内において博物館への理解を増進するため、可能な限り教育支援事業を継続していくことが望ましい。

#### 4. 学術標本

3回のアンケート調査により、学内の標本資料の内容、状況の把握がほぼ達成された。当面は、この情報を元に、移転までの保存スペースの確保、標本庫の環境の改善、データベース化、移転へ向けた標本整理の必要性を大学内外に訴えるべきである。



博物館は標本の収集に関してはある程度機能しているが、不十分である。学術標本の散逸を防ぐため、九州大学の博物館での保管を希望する人が多いが、標本庫の不足からごく一部しか引き受けることができない。学術標本の安全な保管と有効活用のためには、箱崎キャンパス内に暫定的な収蔵庫を確保し、受け入れることが望ましい。

寄贈標本の評価に関する専門委員会や閲覧・貸出しの規則を設ける必要がある。

整理とデータベース化について、博物館は概ね機能しているが、毎年着実に経費を確保し、資料部と協力して作業を進める必要がある。整理とデータベース化は、当面の移転準備を円滑に進めるとともに、学術標本の有効活用、将来の収蔵庫建設に不可欠なデータを完備する上でも重要である。

## 5. 展示

公開展示・特別展示は、十分に目標が達成されている。博物館が独自の展示施設を持たない現状では、学外施設を借りての公開展示を継続する必要がある。学外に九州大学の教育・研究および博物館活動を情宣するもっとも有効な手段であるから、展示担当部局を円滑に決定し、準備に時間をかけることによって、今後も学外の人に判り易い展示を心がけるべきである。

将来的には、博物館独自の建物を持ち、常設展示、収蔵展示を充実させることにより、展示準備に忙殺されて、他の博物館活動に労力を割く余裕が無い状況を改善すべきである。

各種展示の入場者に対して行ったアンケートを次の展示に生かす方策や、個人情報保護に関する規則を検討する必要がある。

サテライト展示は九州大学独特の企画であり、概ね機能を果たしている。現在は福岡市周辺の無料で利用できる場所に限られているが、他の地域への進出、展示予算の確保が重要である。

## 6. 社会貢献・教育普及活動

公開講演会に関しては、概ね機能を果たしている。九州大学の教育・研究を情宣する有効な手段であり、学内他部局、学外他機関との連携を図る上でも重要な活動であるから、今後さらに分野を広げ、来聴者にとって興味深いテーマを探して実施していくべきである。

博物館は、九大・糸島会の代表幹事として、会の事業を計画し、講師を勤めるほか、講師の斡旋や後援会のポスター・パネルの作成を行い、地域貢献事業に積極的に取り組んでいる。

博物館は、シンポジウム・セミナーに関しては相応に機能している。今後は、共催、後援、施設・設備の貸出し・開放に留まらず、他部局教員と共同で企画することも検討すべきである。

博物館は、展示の貸出しに関して相応に機能している。将来的には大学博物館や公私の博物館どうして、展示の共同企画や巡回を検討すべきである。

## 7. 他部局・他博物館との連携

### 学内他部局との連携

公開展示における他部局との連携は、概ね順調に機能している。他部局の理解と協力を如何に円滑に得るか、今後とも検討を重ねる必要がある。

各部局の研究教育の展示、卒業研究公開発表会の支援を通じて、各部局との連携に努めているが、一層各部局への宣伝、働きかけに努力すべきである。

博物館は全学の委員会の委員やワーキング・グループのメンバーとして大学運営に参画し、責任を果たしている。

### 他博物館との連携

国立大学博物館等協議会への出席のほか、他大学博物館の訪問、あるいはP&P研究集会、特別展示などの機会を利用して他博物館職員を招聘することにより、概ね十分に情報交換を行い、博物館が直面する問題の解決を図っている。

福岡市博物館、福岡市立少年科学文化会館とは緊密に連携しているが、今後北九州市立自然史歴史博物館とも情報交換を密にするよう努力する必要がある。他博物館との展示の共同企画、巡回展示などを通じて成果の活用や負担の軽減を検討することが望まれる。

## 8. 国際連携

P&P経費などにより、アジアに研究拠点を作る活動及び若手研究者の育成などを行い、概ねその目的を達成した。P&P研究終了後も事業を継続し、連携を確固たるものにする必要がある。

学術交流協定を締結するという目標が達成され、確固たる研究拠点を東南アジアに持つことから、相互の協力関係がより強固になり、共同研究が行い易くなることが期待される。今後、交流協定が十分機能を果たすよう、兼任教員と協力してアジア研究に取り組む必要がある。

博物館は外国人研究者の受入れ窓口として、概ね機能しているが、外来研究者が研究するスペースの確保が急務である。

## 9. 情報発信

博物館のホームページは質・量とも充実しており、十分に機能を果たしている。今後、英語版の充実を図る必要がある。

これまでの展示の内容を載せたインターネットミュージアムは好評で、入場者数が25万人を越えるものもあり、十分に情報発信の機能を果たしている。

ホームページ上でデータベースを公開しており、概ね機能を果たしている。今後、更にデータベースの充実に努め、学術標本の教育・研究への有効活用を支援する必要がある。

最新の情報を盛り込んだ大学所蔵標本資料に関する冊子は、現在の標本資料の全貌を

概観する上で、十分に機能を果たしている。

## 10. 出版

博物館概要は、常に最新の内容が盛り込まれるよう努め、学内各部署、市内小中高校、近隣博物館、他大学博物館に配布するほか、学内で行われる特別展示入場者や博物館訪問者に配布しており、その機能を十分に果たしている。

博物館ニュースは平成16年度までに4号が発行され、その役割を相応に果たしているが、更に発行の回数を増やして、博物館の活動を社会に宣伝することが望まれる。

研究報告は博物館の研究活動の公開のため、概ね機能している。今後、編集委員会や投稿規約を明文化する必要がある。

年報は博物館の事業の実績を知る上で重要な資料であり、概ね機能している。平成16年度以降も毎年発行するよう努めるべきである。

図録は展示会場で展示内容の理解を助けるほか、展示会後も大学の研究活動を社会に紹介する上で極めて有効である。これまで作成された図録は、これらの機能を十分に果たしている。今後、より多くの展示会で図録を発行するために、図録の有料化についても検討すべきである。

## II. 管理・運営

### 1. 管理運営のあり方

博物館の管理運営の理念は、全学共同教育研究施設としての水準に十分に達している。

博物館の管理運営にあたり、館長の権限や補佐体制及び意志決定システムを明確にし、全学的な運営方針を踏まえ、機動的、戦略的な運営を実現すべきである。特に館長のリーダーシップの下、大学総合研究博物館としての設置理念を踏まえ、中期目標、中期計画を適切に実施し、本学における学術研究の中核として活動していかなければならない。また結果を学内外に情報発信することにより理解と信頼を得られるよう積極的に運営を図る必要がある。

### 2. 管理運営体制

博物館長の選定に関しては、適任者を選出するシステムが十分に機能している。館長は、博物館の管理運営業務に責任を持ち、時代の変化や社会の要請をふまえ、迅速に対応する必要がある。

副館長選出のシステムは十分に機能しているが、副館長の権限、責任などについて明確なものがなく、整備する必要がある。

運営委員会をはじめ各種委員会は、会議の審議を経て意志決定がなされており、意志決定のシステムは、概ね十分に機能している。今後、円滑化および効率化のため、委員会の再編整備および規程の整備を図り、意志決定システムを明確にし、迅速な決定ができるようにすることが重要である。審議事項のうち代行議決機関の設置を検討

し、特に重要な事項を運営委員会で審議することなどを検討する必要がある。なお、結果については、電子メールなどで迅速に運営委員会構成員に報告することが必要である。

事務体制については、概ね十分に機能している。理学部等事務部の各掛が互いに博物館の情報を共有し、教員と連携・協力しながら、迅速、的確に対応する必要がある。

博物館が学内共同教育研究施設であること、また現在検討中の改組などを考えると、将来は博物館独自の事務体制を持つことを検討する必要がある。

### 3. 教員組織と人事

専任教員と兼任教員、協力研究員の連携により、博物館の目標を達成する体制は概ねできているが、兼任教員、協力研究員については更に充実を図ることが望ましい。

教員選考のシステムは、十分に機能している。選考は教員選考内規に従い、完全な公募により候補者を全国から募り、公平に行われている。

### 4. 財政

全学の間接経費の確保については、概ね目標が達成されているが、博物館の将来計画を踏まえ、展示など社会活動のなかで効率的な運営を行うとともに、積極的に実績を積み、大学の学術研究の情報発信拠点として整備していく必要がある。特に、データベース化、地域貢献事業は資料部兼任教員の協力のもとに、博物館が中心となって取り組むべき事業であり、必要資金確保への支援を求めるべきである。

科学研究費補助金の確保については、概ね目標が達成されているが、研究活性化のためには外部資金の確保が必須であり、奨学寄付金の確保に努めるとともに、各種研究助成金に積極的に応募し、獲得する必要がある。

## III. 施設・設備

### 1. 施設の状況

博物館の施設は分散し、面積は極めて狭隘で、その機能は相応にしか発揮されていない。このため、博物館の管理・運営及び博物館での教育・研究に重大な支障を来している。特に、次のような問題点は早急に改善の措置を講ずるべきである。

- 1) 旧応力研の実験室2室は老朽化が著しく、埃の害が懸念される。
- 2) 専任教員、兼任教員、協力研究員の研究、標本作成、整理のためのスペースがほとんど無い。
- 3) 博物館で卒論、修論を書く学生の研究・実験のスペースが無い。
- 4) ゼミを行うスペースが無い。
- 5) 館長室を設ける余裕が無く、会議室がゼミ室、標本整理のスペース、パネルの作成などのスペースを兼ねている。

各部局の標本収蔵室は狭隘で、老朽化が著しく、相応にしか機能していない。特に次の2つの事項については、早急に改善を要する深刻な問題である。

- 1) 標本庫のスペースが不足しているため、学内の学術標本が他博物館へ流出している。
- 2) 各部局で保管されている学術標本も、スペースの不足が著しく、教育などに障害を来している。また、プレハブで保管されている標本は、風雨による破損や盗難の危機に直面している。

当面は箱崎地区に教育、研究、展示、標本収納のスペースを確保し、大学教育、社会教育、標本の収蔵・整理・公開に取り組むべきである。新キャンパスにおいては、740万点を超える全国1の学術標本の保管と有効活用、教育、研究のために十分なスペースを確保するよう学内外に働きかけるべきである。

## 2. 設備の状況

博物館における教育と研究のため、教育用機器、研究用機器、展示用機器の整備に努めているが、まだ相応にしか達成されていない。特に、X線マイクロアナライザー、走査型電子顕微鏡の必要性を学内外に訴え、経費の確保に努めるべきである。

安全管理については、X線取扱主任者、衛生管理者、毒劇物管理責任者、同補助者を置き、研修を受け、安全管理に努めており、概ね十分に機能している。

## 3. 新キャンパス計画

博物館建設が予定されているセンター・ゾーンの学園通り線沿いは、大学と地域の接点として最も理想的な場所であり、十分に機能することが予想される。

博物館の建物については、ある程度議論されたが、更に学外の専門家を交えた検討が必要である。博物館は、新キャンパスでは「大学の顔」として、大学と社会を結ぶ働きが求められているが、博物館の移転は第Ⅲステージ（平成26年以降開館）が予定されている。可能な限り開館の時期を早め、学術標本の散逸を防ぎ、教育研究への活用を図るとともに、生涯学習・学校外教育の場として社会に貢献する活動を始めるべきである。

新キャンパスでは、博物館は施設の狭隘、分散している収蔵物の問題の解決が期待される。今後、次の事項について移転するまでの期間に対応を講ずるべきである。

- 1) 散逸、破損の恐れのある学術標本の収集、整理、保管のための標本庫の確保
- 2) 標本の移転準備のための整理と情報化
- 3) 学術標本の公開・有効活用のための教員研究室、実験室、学生実験室の確保と整備
- 4) 効率的な社会教育・大学教育のための常設展示のスペースの確保

## IV. 将来構想・将来計画

### 1. 新キャンパスにおける新しい大学博物館を考える会

「考える会」は、博物館の現状の問題点を整理し、進むべき方向を提言として示し、設置の目的を十分に達成した。今後とも、博物館は大学内外の意見を広く聞き、常に博物館の理念を議論し、理念実現のための計画を作る努力が必要である。

## 2. 事業部構想

事業部構想は、社会教育、学校外教育を博物館の重要な活動の一つと位置付け、大学教員では十分にカバーできない分野を地方自治体などの専門家との連携によって行おうという意欲的でユニークな構想である。これは九州大学の中期目標・中期計画に沿い、「新キャンパスにおける大学博物館を考える会」の提言の趣旨にも十分合致するものである。

構想実現のためには、学内各部局の理解と支援が不可欠であり、運営委員会における活発な意見交換が必要である。同時に、福岡県、福岡市、周辺の博物館、博物館利用者などとの意見交換も重要である。

## V. 中期目標・中期計画

博物館は、学部教育・大学院教育に参画し、積極的に協力し、概ねその責務を果たしているが、協力講座に所属する場合、博物館の人事の独立性が保たれるよう配慮する必要がある。また、博物館施設・設備、標本の貸出しなどでも積極的に各部局の教育を支援している。

博物館内で専門分野の異なる教員同士の共同研究が始められているが、兼任教員及び他の教員も含めて科研費など研究補助金の確保も視野に入れて、更に積極的に学際的共同研究を推進すべきである。

博物館が中心となって、大学収蔵標本のデータベース化を進め、相当の成果を上げている。今後も、データベース化のための経費確保に一層努めるべきである。

資料部・フィールドミュージアム部兼任教員、協力研究員については、更に陣容を拡大し、学内の資料分野を網羅することが望ましいが、博物館の研究室、標本庫が極端に狭いため、机を置くスペースが無いという現状を改善する必要がある。

アジアの研究者との連携は、P&P研究などによりスタートした。確固とした研究拠点の形成、パートナーの育成のために、更に交流を拡充する必要がある。

## VI. 点検・評価

点検・評価は、博物館の理念・目的、活動、管理・運営体制、予算、施設・設備などを点検し、博物館の事業が理念・目的をより良く達成するように行われるものである。このためには、博物館専任教員と博物館外運営委員両者が緊密に協力し、率直に議論する必要がある。平成16年度自己点検・評価は、概ねその目的を達成している。

点検・評価は博物館の進むべき方向性や活動方針から、より効果的な事業の展開、施設・施設の整備まで、多岐にわたる項目を総合的に評価し、課題を指摘し、改善を促す極めて重要なものである。そのため、点検・評価委員会に関する規定を早急に明文化し、審議事項、任期、定足数、議決などを明確にする必要がある。

外部評価や自己点検・評価を行わない年においても、博物館は毎年年報を作成し、各年度の活動を点検して活動の改善へ生かすべきである。



## 自己点検・評価本文





## 1. 博物館活動

### 1. 活動の理念と目標

(資料1、2)

博物館は、学内共同教育研究施設として学内に長年に亘り蓄積された学術標本の効率的な管理と恒常的な保管を図り、学際的な研究の拠点となるとともに、教育・研究への活用を支援する。このため、博物館は学術標本の収集・整理・保管、分析を行い、学術標本及びそれから抽出された情報を活用した教育・研究を支援するとともに、学術標本に関する調査研究並びに情報の発信を行う。併せて、地域の行政や他の博物館などと密接に連携して学内外の人々の知的営為の活性に資し、自己啓発・生涯学習の場となるとともに、児童生徒のための学校外学習の場となり、社会教育に寄与することを目指す。

**(評価と課題)** 博物館は、大学が所蔵する学術標本や情報を自ら研究するとともに全学的視野のもとに整理・保管・公開して教育・研究への有効活用を支援するという学内へ向けた面を持つ。また同時に、地域の人々の学習や自己啓発を助けると言う社会へ向けた面を併せ持っている。博物館規則などに掲げられた理念と目標は、概ねこれら2つの方面への貢献について言及しているが、研究博物館であるとともに社会連携、社会貢献を目指すことをより明確にすべきである。

## 2. 研究

### 2-1. 系の研究

九州大学では、人文・社会科学や自然科学に関する標本や資料を多数収蔵している。それらの保存管理や情報の抽出、展示・公開などには、標本の特性に応じ、また九州大学の研究内容に合った独自の研究が要求される。そのため博物館では、研究教育支援事業を三つに整理し、それらを円滑に機能させるために三つの研究系を設けている。

#### ◎一次資料研究系 (Laboratory of Material Sciences)

学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育を行う。研究成果とそれに基づいて適切に維持・管理された標本を分析・抽出のための一次資料として分析技術開発系へ提供し、開示研究系へは展示・公開のための学術標本や総合的分類の成果と分類体系を提供する。

#### ◎分析技術開発系 (Laboratory of Analytical Sciences)

学術標本から先端的分析法により新たな学術情報を抽出し、その理論・方法に関する研究と教育を行う。分析結果を新たな分類のため一次資料研究系へ提供し、開示研究系へは臨場感あふれる展示・公開のために必要な抽出情報などを提供する。

#### ◎開示研究系 (Laboratory of Information and Multimedia Sciences)

展示・公開のために学術標本の持つ情報のデータベース化と、効果的な展示・公開のための理論・方法の研究と教育を行う。総合的データベースによる標本整備状況を新たな調査・収集計画の策定のために一次資料研究系へ提供し、標本の分析状

況など新たな技術開発のための情報を分析技術開発系に提供する。

**(評価と課題)** 博物館創設直後の博物館の活動は、九州大学の研究・教育活動を社会へ紹介する各種の展示と標本の情報化、個人の研究が中心となっている。これは多様な分野の大量の学術標本の安全な保管と教育研究への活用、大学の教育研究の社会への公開が博物館の当面の急務であったことに起因する。これまでの個人研究の多くは、各教員が専門とする分野の一次資料の個別研究を深めたものであり、資料・試料の分析や情報開示も実践面では相応に達成されている。系ごとに理論・方法に関する研究を進展させることについては、ある程度達成されているところもあるが、今後、分析機器、情報機器の充実を図り、系の研究にも十分な時間と経費を割くよう検討すべきである。

## 2-2. 専門分野の研究

(資料3)

各博物館専任教員は、九州大学の学術標本・資料などに基づき、各自の専門分野の研究を行っている。研究成果は国内外の学会、研究集会、シンポジウムなどで口頭或いはポスター発表され、また原著論文・調査報告が学術雑誌、報告書、単行本として刊行されている。

平成12年度から平成16年度までの各専任教員の活動を本報告書第2部に参考資料として添付する。

**(評価と課題)** 博物館教員は各自の専門分野で積極的に学会発表し、多数の原著論文、調査報告書、単行本などを刊行し、各分野の中核的研究者として活躍し、目標を十分に達成している。

また同一部局に様々な分野の研究者が共存するという博物館の利点を活かすために、互いの研究対象や理論・方法に対する理解を深めるべく日常的討論も行ってきたが、そうした蓄積をもとに学際的共同研究を実践することが今後の課題である。

## 2-3. 共同研究 (P&P研究)

博物館専任教員、兼任教員が協力して九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト(P&P)研究事業B-1タイプに応募し、平成13～15年度の研究費の配分を受けた。

題目：アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究

研究代表者：松隈明彦(博物館、総括・古生物学)

分担研究者：岩永省三(博物館、考古学)	中牟田義博(博物館、鉱物学)
中西哲也(博物館、鉱床学)	宮崎 克則(博物館、民衆文化論)
小島弘昭(博物館、昆虫学)	三島美佐子(博物館、植物学)
佐野弘好(理学研究院、地質学)	矢原 徹一(理学研究院、植物学)

湯川淳一(農学研究院、昆虫学) 毛利 孝之(比文研究院、考古学)  
中橋孝博(比文研究院、形質人類学)

研究経費：

年度	交付金額(千円)
平成13年度	5,613
平成14年度	5,427
平成15年度	4,500
合計	15,540

目的：(1) アジアの博物館などとの交流、情報の収集

(2) 研究者、施設・設備、標本などに関する情報の発信・相互利用

(3) 職員のリカレント教育、後継者の育成

成果：(1) タイ、マレーシア、インドネシア、韓国へ出かけ、博物館や研究所、大学の研究室の状態の調査を行った。

(2) インドネシア科学院生物学研究センターとの間で学術交流協定を締結。

(3) マレーシア国立大学(昆虫学)、プケット海洋生物学研究所(軟体動物学)、カセツアート大学水産学部(軟体動物学)などと共同研究を開始した。

(4) アジアの研究者一覧、軟体動物分類学関係文献所在目録を作った。九州大学所蔵標本のデータベース化を進め、軟体動物化石、昆虫、植物などでは博物館のホームページを通じて情報の発信を始めた。

(5) プケット海洋生物学研究所、カセツアート大学水産学部の若手研究者を1、2ヶ月ずつ日本に招き、博物館始め九州大学の施設、設備を使って分類学の基礎を教え、文献の収集を支援した。

**(評価と課題)** 本P&P研究は、博物館がアジアの博物館との連携と共同研究の拠点作りを目指して資料部兼任教員に呼びかけて行った最初の共同研究であり、当初の目的を概ね達成した。博物館の研究活動の活発化のため、今後とも、P&Pなどの資金を獲得して、学内外の研究者と協力しながら、広い分野にまたがる共同研究を積極的に計画する必要がある。

博物館は、ただ単に自然科学と人文科学の研究者が共存するのみならず、両者が有意義な学際的共同研究を行う条件が揃っていることから、博物館が核となって学内外の研究者を組織した学際的共同研究を推進していくことが望ましい。

### 3. 教育

大学・大学院では学術標本・資料の情報化過程と資料情報の解析法を習得させ、実践的な高い研究能力を持った人材を養成することが必要である。また人文科学や自然科学の狭い枠内のみに関じこもらない知識と発想をもった人材養成のためには、分野横断的な学問の展開を、講義だけでなく学術標本・資料による実証教育を通して理解

させることが必要である。博物館は、学術標本・資料の提供と実践例の提示によって、このような高等教育に積極的に寄与することも目的の一つとしている。

### 3-1. 大学院教育

7名の教員が、それぞれの専門分野と関連する学府の兼担となって、授業や学生指導を担当している。開講部局・科目は、理学府で「生物圏進化学」・「地球史生物史」・「地球惑星科学特別研究」・「鉱物解析学」・「物質科学演習」、工学府で「鉱物工学実験」・「地球資源システム工学特論第一」、農学府で「昆虫学演習」・「農学特別研究」、比較社会文化学府で「階級社会形成論」・「近世総合演習」である。

平成15年より、専任教員2名が理学府地球惑星科学科の協力講座「地球惑星博物学（古生物学分野・鉱物学分野）」に参加し、大学院生の指導を行っている。

平成16年に比較社会文化学府から協力講座参加依頼があった。運営委員会に諮り、人事などに関して博物館の独自性を保ちながら協力する方向で検討している。

**(評価と課題)** 博物館は、本務との調整を図りながら積極的に大学院教育に関わり、概ねその役割を果たしている。今後も、データベース論などで大学院教育に参画し、自然史科学・歴史科学など学術標本に関する基礎的研究分野の後継者養成に努めていくべきである。

### 3-2. 学部教育

4名の教員が、それぞれの専門分野と関連する学部の兼任教員・学内非常勤講師となって、授業や学生指導を担当している。開講部局・科目は、理学部で「地球惑星生物学」・「地球惑星生物学実験」・「地球惑星科学実習」・「地球惑星科学特別研究」・「結晶物理化学」・「地球惑星化学実験」、農学部で「農学実験」、文学部で「考古学講義」、および全学共通科目「地球の構成と環境」である。

**(評価と課題)** 博物館は、本務との調整を図りながら積極的に学部教育に関わり、概ねその役割を果たしている。今後も、データベース論などで学部教育に参画し、基礎的研究分野の後継者養成に努めていくべきである。

### 3-3. 学芸員資格関連授業・実習

博物館は、博物館・美術館・資料館などの業務に従事できる有能な人材の養成、および博物館に対する理解を広めることを目的として、学芸員資格取得に関連する講義・実習を開講している。九州大学における学芸員資格取得のための教育は、長い間、文学部・教育学部で全学に向けて実施してきた。しかし、文学部で開講する博物館学関係講義は、文科系博物館に関わること（文献史学・美術史学・考古学・民俗学）に偏るのは避けられず、理科系学生には必ずしも向いていなかった。博物

館には理科系教員が多いことから、理学部を開講部局として、平成13年度から博物館教員が中核となって、理科系学生を対象として、学芸員資格取得のための科目「博物館概論」・「博物館経営論」・「博物館資料論」・「博物館情報論」・「視聴覚教育メディア論」を開講した。理学部、農学部、理学府、生物資源環境学府、比較社会文化学府の学生が各科目30名～45名受講している。なお、博物館の文科系教員は、理科系教員と共同で「博物館概論」・「博物館経営論」を担当するほか、文学部で開講する「博物館資料論」・「博物館学実習」にも学内非常勤講師として出講している。

博物館実習は、博物館の創設以前には、農学部学生係が窓口となって、学外の博物館・動物園・水族館・植物園などで実施してきた。平成14年1月16日に博物館相当施設に認定され、平成14年度から、学内で「植物学標本実習」・「地球惑星科学標本実習」・「動物学標本実習」を、理学部・農学部教員の協力のもとに開講した。なお、学内での実習だけでは受講希望者全員には対応できないため、従来どおり農学部を窓口とする学外施設での「博物館実習」も継続している。

**(評価と課題)** 九州大学の学生には、卒業後に博物館学芸員あるいは小学校・中学校・高校の教員となり社会教育・初等中等教育に従事する人が相当数存在する。博物館が実施する学芸員資格関連授業・実習は、彼らに博物館の機能・存在意義や基礎的な自然史学の重要性を伝え、教育現場で児童生徒の理科離れ対策や一般社会人の生涯学習支援の基礎を身に付けさせるうえで、概ね機能を果たしている。

「博物館概論」と「博物館経営論」は、一つの授業を理科系専任教員と文科系専任教員が協力して担当し、自然史系博物館と文化史系博物館の両方について触れるよう工夫しているが、このような努力を更に進めるべきである。

福岡市博物館、福岡市立少年科学文化会館、北九州市立自然史歴史博物館などには、博物館専任教員がカバーしきれない分野の専門家や社会教育、総合学習について経験豊富な学芸員がいる。外部の博物館学芸員を講師として招き、専任教員の教育能力を高める研修会を計画する必要がある。

### 3-4. 教育支援

博物館は、上記3-1～3で述べたような、館員が直接に関与する教育以外にも、他部局による教育や行事の支援事業を行ってきた。すなわち、学内各部局の教育・研究活動を支援するためにシンポジウムや卒業論文発表会、展示会を共催あるいは後援している。また、展示場所や大型カラープリンター・展示用具・展示補助具の貸出しなど他部局が持たない施設・機器の貸出しで協力を行っている。

#### 施設・機器の開放

博物館が記念講堂3階の展示準備室に設置している大型カラープリンターは、専門の印刷業者や展示業者が使用する機種であり、学会発表用のポスター、行事のポス

ター・看板・横断幕などを大型の用紙に美しく印刷することが可能である。博物館専任教員以外の兼任教員・運営委員会委員および、それ以外の教員で専任教員の了解を得た人には、紙代実費負担での開放を行っており、学会や卒論・修論の発表会の前には特に使用希望が多い。

また博物館は、各種展示ケース・展示台・バックパネル・吊り下げパネル（B0・B1）・立看板などの展示用具・展示補助具を多数所有している。これらは学内諸部局の依頼に応じて無償での貸出しを行っており、各種の展覧会・講演会・学会・セミナー・論文発表会などで活用されている。

博物館では、教育支援の一環として博物館が展示場として使用している記念講堂2階ホワイエ及び3階踊り場、通路部分を各部局の活動の紹介のための展示、卒業論文公開講演会、ロボットコンテストなどに開放している。

**(評価と課題)** 博物館が行う各種行事の共催、後援、機器の貸出しにより、教育支援の目的は概ね達成されている。このような地道な支援が、学内において博物館及びその活動への理解を増進するのであり、可能な限り継続していくことが望ましい。

#### 4. 学術標本

##### 4-1. 標本調査

(資料4)

九州大学に収蔵される学術標本・資料の現状を把握することを目的に、これまで3回のアンケート調査を行ってきた。各アンケートの調査項目と目的は以下の通りである。

第1回調査（平成12年7月実施） 標本資料名，収蔵場所，管理部門，標本点数，収蔵面積，管理方法，データベース化の現状など基礎情報の把握。

第2回調査（平成13年11月実施） 標本資料名，標本点数，床面積，保管上の注意事項など，博物館への収蔵が必要な標本ならびにその整理状況の把握。

第3回調査（平成16年9月実施） 収蔵標本・資料の特徴，収集の経緯，学術的価値など，各コレクションの情報把握。

**(評価と課題)** 3回の調査により、学内の標本資料の内容、状況の把握がほぼ達成された。当面は、この情報を元に、移転までの保存スペースの確保、標本庫の環境の改善、データベース化、移転へ向けた標本整理の必要性を大学内外に訴えるべきである。このような標本調査をさらに進めることによって、当面の移転準備を円滑に進めるのみならず、将来の収蔵庫建設に不可欠なデータを早急に完備することが望ましい。

##### 4-2. 収集

(資料5)

学外の標本・資料で、とくに学術上貴重と判断されたものについては、収納場所

について資料部の該当分野の協力を得た上で、博物館への寄贈を受け入れてきた。標本の評価は、関連の専任教員が教員会議で資料の概要（標本の種類、点数、整理の状態、貴重とされる理由、当面の保管場所など）を紹介し、審議の上、判断している。これまでに以下の5つのコレクションが寄贈されている。

- 1) 福岡植物研究会コレクション（福岡県のシダ植物、種子植物、50,000点）  
福岡植物研究会寄贈
- 2) 佐々治コレクション(甲虫類の国内を代表するコレクション60,000点)  
佐々治寛之氏寄贈
- 3) 宮川コレクション(日本およびその周辺地域のゾウムシ上科甲虫類、35,000点)  
宮川百合子氏寄贈
- 4) 木船コレクション(翼手類寄生虫、60,000点) 木船悌嗣氏寄贈
- 5) 大分県城南地質同好会イノセラムス標本(白亜紀イノセラムス化石標本、954点)  
野田雅之氏寄贈

**(評価と課題)** 博物館は標本の収集に関してはある程度機能しているが、不十分である。研究者が退職するに当たり、貴重な学術標本の散逸を防ぐため、九州大学の博物館での保管を希望する場合が多々ある。しかしながら、博物館では標本庫の不足が著しいため、特に貴重なもの、この時期に受取らないと散逸の危険性が高いものなどに限って寄贈を受けざるを得ない。学術標本の安全な保管と有効活用のためには、将来の本格的移転前でも、箱崎キャンパス内に暫定的な収蔵庫を確保し、さらなる受け入れが可能になるようにすることが望ましい。そのため、標本庫スペースの確保に一層努める必要がある。

標本庫が確保されて、より多くの寄贈受入が可能になった場合は、寄贈標本の評価に関する専門委員会を設ける必要がある。

#### 4-3. 貸出し

現在、博物館は標本庫をほとんど持たないため、博物館が所有し、管理する標本は僅かである。博物館所有の標本の閲覧、貸出しについては関係する分野の専任教員が対応している。標本の閲覧・貸出し規則については、全国の大学博物館の資料を取り寄せて検討中である。

**(評価と課題)** 標本の閲覧・貸出しについては、博物館はある程度機能しているが、十分に機能を果たすためには、今後、博物館が管理する標本を充実させると共に規則を整備し、明文化する必要がある。

#### 4-4. 整理とデータベース化

九州大学が所蔵する740万点におよぶ学術標本・資料について、平成15年度より運



営費から標本整理費用を以下の各分野に配分し、標本・資料の整理とデータベース化に取り組んできた。

自然史分野：動物・医動物、植物、昆虫、化石、鉱物

文化史分野：記録資料、考古資料、人類資料

技術史分野：資源・素材

また、データベース化の完了したところから、順次、博物館ホームページ (<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/DB/dbindex.html>) 上で公開を始めている。これまで昆虫（佐々治コレクション、ゾウムシ）、医動物（寄生虫）、岩石・鉱物・化石、記録資料（目録、筑豊石炭鉱業）分野のデータベースを公開した。今後も、データが集まり次第、随時追加・更新を行っていくとともに、未公開分野の情報公開を急ぐ。

**（評価と課題）** 整理とデータベース化について、博物館は概ね機能しているが、資料が膨大であるため、毎年着実に経費を確保し、資料部と密接に連携して作業を進める必要がある。整理とデータベース化は、当面の移転準備を円滑に進めるとともに、学術標本の有効活用、将来の収蔵庫建設に不可欠なデータを完備する上でも重要である。

## 5. 展示

### 5-1. 公開展示

（資料6）

博物館の新設に先立ち、ユニバーシティ・ミュージアム構想の一環として、平成9～11年に3回の先行展示が行われた。第1回「倭人の形成」では、九州大学比較社会文化研究院が中心となり、九州大学が所蔵する縄文・弥生時代の古人骨の形質変化に関する研究を一般に公開した。第2回「雲仙普賢岳の噴火とその背景」では、理学研究院により平成2年に噴火した雲仙普賢岳の火山活動についての研究が紹介された。第3回「九州大学・医学の歩み-寄生虫学の展開と医の文化」では医学部寄生虫学研究室により、九州大学における寄生虫学の研究が医学史上果たしてきた役割が紹介された。

公開展示は、九州大学で行われている教育と研究を社会に紹介し、理解と協力を求めるための展示会である。会場は一般の人が入場し易い福岡市博物館特別展示室、或いは福岡市立少年科学文化会館の学習室（約300㎡）を使用している。展示はパネル、標本、模型で構成され、展示に関連する分野の学生3名が受け付け、展示案内に付き、1ヶ月から1ヶ月半、入場料無料で公開される。期間中の入場者数は5,000人から12,000人程度である。入場者の感想、希望などを次回からの展示に反映させるため、毎回アンケート調査が実施されている。

**(評価と課題)** 公開展示に関しては十分に目標が達成されている。博物館が独自の展示施設を持たない現状では、学外施設を借りての公開展示を継続する必要がある。学外に九州大学の教育・研究および博物館活動を情宣するもっとも有効な手段であるから、展示担当部局を円滑に決定し、準備に時間をかけることによって、今後も判り易い展示を心がけるべきである。

将来的には、博物館独自の建物を持ち、常設展示、収蔵展示を充実させることにより、博物館専任教員が展示準備に忙殺され、他の博物館活動に労力を割く余裕が無い状況を改善すべきである。

公開展示の入場者に対して行ったアンケートの結果を次の展示に生かす体制が整っていない。アンケート記入者のうち、希望者に講演会などの案内を送っているが、個人情報保護の観点から氏名、住所などについては規則を整備し、慎重に管理する必要がある。

## 5-2. 特別展示

(資料7)

特別展示では、九州大学50周年記念講堂の展示スペースを利用してパネル展示を主体とした展示を行い、学内の各分野の研究を学内外に公開してきた。また平成14年度からは、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)専門委員会との共催でP&P研究に採択された課題の研究成果の一般公開を行ってきた。

### 大学博物館西東

平成16年度に実施した特別展示「大学博物館西東」の実施に当たっては、北海道大学総合博物館、東北大学総合学術博物館、東京大学総合研究博物館、名古屋大学博物館、京都大学総合博物館、大阪大学総合学術博物館、鹿児島大学総合研究博物館に協力を要請し、各種情報・資料の提供を受けるとともに、展覧会の来訪者にこれらの館の情報を普及するよう努めた。会期中には名古屋大学・新潟大学・広島大学の博物館関係者の来訪があり、情報の交換に努めた。国立大学博物館の多くは、少ない人員と予算、狭隘な施設、貧弱な設備などの共通した悩みを抱えており、それぞれ改善のための努力を行ってはいるが、今後さらに互いの連携を深めながら改善の方策を追求していく必要がある。

**(評価と課題)** 特別展示に関しては、十分に機能を果たしている。一般向けの公開展示より、内容に専門性がやや高く、実施場所が学内であることもあって、観客数が多いわけではない。しかし、箱崎キャンパスに学外の人々を呼び込む良い機会でもあることから、地道に続けていく必要がある。

## 5-3. サテライト展示・その他の展示

(資料8)

博物館では、福岡空港ビルディング(株)の協力により、平成14年10月1日から福岡

空港で国内地方線が発着する第1ターミナル2階待合室および乗降客通路に、サテライト・ミュージアムを開設した。「福岡空港サテライト展示」では、とくに、地域に密着した話題を中心に取り上げてきた。

また平成15年10月より九州大学付属病院新病棟2階通路に、平成16年1月より前原市伊都文化会館にサテライト展示を開設した。

アジア学長会議の際、パネル（英文）展示に参加し、博物館を中心としたアジアとの連携活動を紹介した。

内容：アジア関連研究の紹介（P&P研究パネル2枚）

日時：平成16年11月27、28日

場所：シーホークホテル&リゾート

（評価と課題） サテライト展示・その他の展示に関しては、概ね機能を果たしている。博物館の存在を学外に知らせる有効な手段の一つである。今のところ福岡市周辺の無料で展示させてもらえる場所に限定されているが、有料になると経費が負担となってくる。展示予算の確保が重要である。

## 6. 社会貢献・教育普及活動

今日の大学には、学内での教育・研究に加えて、学外の一般社会に対する貢献が強く求められている。博物館は、地域の生涯学習の拠点として常時機能し、九州大学の市民への公開を積極的に進めるための「セミナーハウス」として機能することが期待されており、以下に述べる各種教育普及活動を通して生涯教育に寄与している。

### 6-1. 公開講演会

（資料9）

公開講演会は、地球惑星科学・考古科学・生物学など当博物館の研究領域と関係深い分野の最新の成果をわかりやすく一般に紹介する講演会である。一回に3～5人ほどの講師に依頼しており、標本や模型の展示を伴う場合もある。

第1回公開講演会 インターネット博物館「雲仙普賢岳の噴火とその背景」

（平成14年12月20日）

第2回公開講演会 「考古科学の最前線」（平成15年2月22日）

第3回公開講演会 「地球外物質に太陽系の起源を求めて」（平成16年2月14日）

第4回公開講演会 「日本の動植物相はどうやってできたか」（平成17年3月19日）

（評価と課題） 公開講演会に関しては、概ね機能を果たしている。九州大学の教育・研究を情宣する有効な手段であり、学内他部局、学外他機関との連携を図る上でも重要な活動であるから、今後さらに分野を広げ、来聴者にとって興味深いテーマを探して実施していくべきである。

## 6-2. 地域資源再発見塾

(資料10)

地域貢献特別支援事業費による事業として行っている。九州大学の糸島地区への移転を契機に、九州大学と同地域各自治体（前原市・志摩町・二丈町）との連携・交流を推進し、糸島地域のさらなる発展を図ることを目的に、平成14年2月に「九大・糸島会」が設立された。博物館は同会と共催で、糸島地域が持つ自然・歴史・文化・産業などの地域資源について、地域住民とともに学習しながら再発見する「地域資源再発見塾」を開催している。一般市民を対象に、博物館教員が他部局教員・職員や民間研究会の協力を得て、講演会・観察会・標本実習などを行なった。博物館職員など専門家が講師を務めることにより、興味深い話で児童生徒の理科離れ対策の役割を果たすとともに、一般社会人の生涯学習を支援し、ボランティア活動を通じた地域と大学との連携の提案を目指している。

- 1) 地域資源再発見塾 平成15年1月26日 「糸島の自然-絶滅に瀕している貝類たち」
- 2) 地域のための大学博物館講座 平成16年3月27日 「空を学ぼう-オーロラと宇宙天気-」、「陸にすむ貝を探そう」、「糸島のレッドデータ植物」  
植物の不思議発見 平成16年3月28日 「植物観察の基礎」「植物細密画入門」
- 3) 平成16年度第1回地域資源再発見塾 平成16年8月29日  
「南極生活おしえます-南極の自然と観測隊体験講演会」
- 4) 平成16年度第2回地域資源再発見塾 平成16年10月2、3日 「林冠の昆虫をしらべる- 体験！昆虫研究者の仕事」
- 5) 平成16年度第3回地域資源再発見塾 平成17年2月19日 「キノコのおはなし〜キノコを知ろう、キノコと暮らそう〜」

**(評価と課題)** 博物館は、九大・糸島会の行事を通して、地域連携・地域貢献に十分に機能している。平成14年の九大・糸島会の発足時から幹事会に参加し、平成16年からは代表幹事として、会の事業を計画し、講師を勤めるほか、講師の幹旋や後援会のポスターやパネルの作成を支援して地域貢献事業に積極的に取り組んでいる。

## 6-3. シンポジウムなど

当館主体の行事ではないが、学内各部局・学外の研究団体などの教育普及活動を支援するために、シンポジウムや論文発表会、展示会を共催・後援し、展示補助具の貸し出し、ポスター作成などの協力を行なっている。

- 1) International Symposium on Gold and Hydrothermal Systems  
期日：平成13年11月4日(日) 会場：九州大学50周年記念講堂大会議室  
主催：資源地質学会 共催：九州大学工学研究院地球資源システム工学部門  
後援：九州大学総合研究博物館
- 2) 韓国研究センターの5年間の歩み- 韓国国際交流財団による5年間の研究助成

#### 果特別展示

期間：平成15年11月25日(火)～12月12日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

主催：九州大学韓国研究センター

共催：九州大学アジア総合研究センター・総合研究博物館

#### 3) 「熱帯アジアの昆虫インベントリー」に関する国際シンポジウム

日時：平成16年12月11、12日 会場：九州大学国際研究交流プラザ

主催：熱帯アジア昆虫インベントリー作成チーム(代表：矢田脩、比文研究院)

後援：九州大学総合研究博物館

**(評価と課題)** 博物館は、シンポジウムなどの共催・後援に関して相応に機能している。今後は、単なる博物館設備の貸出し・開放に止まらず、更に積極的に博物館教員が他部局教員と共同で企画することも検討すべきである。

#### 6-4. 博物館セミナー

当館を来訪する研究者に、専門分野の研究成果を発表してもらい、各学界の最新知見を把握することを目指している。一般向けを前提とする公開講演会と異なり、専門的な内容であるので、研究者向けではあるが、研究者以外の人にも公開する形で実施しており、より深い知識を求める人のニーズに応えている。

##### 1) 標本歴史学：金平コレクション

日時：平成16年7月27日(火) 10:00～12:00

会場：21世紀交流プラザII

世話人：三島美佐子(総合研究博物館)

##### 2) マメゾウムシの自然史- 系統とマメとの共進化

日時：平成16年10月26日(火) 16:00～18:00

会場：21世紀交流プラザII

世話人：小島弘昭(総合研究博物館)

**(評価と課題)** 博物館は、セミナーに関しては相応に機能している。博物館セミナーは始まったばかりであり、他大学の研究者の訪問などの機会をとらえ、今後一層活発に企画すべきである。

#### 6-5. 展示の貸出し

公開展示で使用した説明パネルなどを、学外団体からの依頼に応じて貸出すことにしている。これまでに、公開展示「植物をもっと知ろう-植物と人-」の展示パネルとDNA模型を宗像植物友の会へ貸出し、植物の展示を支援した。

「植物をもっと知ろう -植物と人-」

期間：平成15年7月25日(金)～27日(日) 会場：宗像ユリックス

主催：宗像植物友の会、九州大学総合研究博物館、宗像市、宗像市教育委員会

**(評価と課題)** 今のところ展示の貸出しは、まだ1件であり、博物館は展示の貸出しに関しては、相応に機能している。貴重な標本・資料や大きな模型の貸出しには様々な制約があり、運搬や展示時の安全が確保されなければならない。従って、貸出しには慎重な検討が必要であるが、可能な場合には今後も実施する。将来的には大学博物館や公私立の博物館どうして、展示の共同企画や巡回が、労力と経費の削減、互いの学術的交流を促進する上で有効と考えられ、十分に検討することが必要である。

## 7. 学内他部局との連携

博物館は、全学の共同教育研究施設として、特定部局の利用に偏することなく、全学の学術標本の管理、整理、保存、情報の抽出、データベース化を助け、学術標本とデータの教育・研究への利用を支援している。

### 7-1. 教育研究における連携

#### 公開展示

平成14年から学内各部局の教員及び博物館専任教員からなる資料部に展示企画ワーキング・グループを設け、博物館専任教員だけではカバーしきれない学内の研究分野・標本資料分野について、全学的見地から展示の企画を行うこととした。ワーキング・グループは資料部兼任教員6名、博物館専任教員2、3名からなり、任期は2年である。1年目は次年度公開展示について大まかなテーマ案を決め、博物館に答申する。博物館は答申に基づき、展示担当部局と交渉し、実行委員会を作り、展示を具体化する。2年目は、展示の実行を見守る。

#### 卒業論文公開講演会

(資料11)

博物館では学内各部局の教育・研究活動を支援するために、卒業論文発表会、展示会を共催し、後援している。

- 1) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会  
期間：平成14年2月23日(土)～24日(日)
- 2) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会  
期間：平成15年2月22日(土)～23日(日)
- 3) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会  
期間：平成16年2月14日(土)～15日(日)
- 4) 工学部エネルギー科学科卒業論文公開発表会  
期間：平成17年2月19日(土)

**(評価と課題)** 公開展示における博物館と他部局との連携は、概ね順調に機能しているが、他部局の理解と協力を如何に円滑に得るか、今後とも検討を重ねる必要がある。

教育・研究における他部局との連携は概ね機能している。各部局の教育・研究の展示、卒業研究公開発表会の支援を通じて、各部局との連携に努めているが、今一層各部局への宣伝、働きかけに努力すべきである。

## 7-2. 全学委員会などへの参画

博物館はセンター群協議会IIの主要メンバーとして、平成13年から平成16年まで新キャンパス計画専門委員会委員及びタウン・オン・キャンパスWG、イースト・センターゾーンWG、文化財WGの委員として委員会並びにワーキング・グループに参加し、大学移転の審議に協力している。

**(評価と課題)** 全学委員会などへの参画に関しては、十分に機能を果たしている。博物館は全学の委員会の委員やワーキング・グループのメンバーとなって大学運営に参画し、責任を果たしている。

## 8. 他博物館などとの連携

### 8-1. 国立大学博物館等協議会

国立大学博物館等協議会に所属している。毎年、館長、専任教員、専門職員など3、4名が総会に参加し、各大学博物館などの活動、直面する諸問題について情報交換を行っている。平成16年度は東京農工大学付属繊維博物館において全国24館が参加して総会が開かれ、法人化後の諸問題、特に社会貢献・地域貢献、当面の課題について議論し、東京芸術大学を幹事校として国立大学が共同で行う展示を企画するワーキング・グループを立ち上げることとなった。

**(評価と課題)** 国立大学博物館などとの連携に関しては、概ね機能を果たしている。協議会に出席して意見を交換するほか、機会ある毎に他大学博物館を訪問し、あるいは他博物館職員を招き、情報を交換することは、九州大学の博物館が直面する問題の解決のため重要である。

### 8-2. 福岡市博物館

九州大学の教育・研究を広く社会に紹介する場として、福岡市博物館と協議して特別展示室Bを借り、公開展示を行っている。歴史・民俗系の博物館である福岡市博物館の性格上、主として文化史系の公開展示が福岡市博物館を借りて行われるが、内容を人の生活と関連づけることにより、「石炭・金・地熱-九州の地下資源」のように工学研究院の公開展示を行うことも可能であった。

**(評価と課題)** 福岡市博物館との連携・協力に関しては、展示については十分に機能している。今後、互いの業務についての理解を深め、共同研究、学芸員教育、資料の収集・評価などについて連携を図ることが重要である。

### 8-3. 福岡市立少年科学文化会館

少年科学文化会館は、児童生徒に科学や文化に関する興味や関心を高め、体験を通じて科学する心、文化を創造する心を育てる学習活動の場である。博物館は少年科学文化会館との意見交換を通じて、講演や実習による支援を行い、自然史系の公開展示の会場として文化会館学習室を利用させてもらっている。

博物館の将来像を議論する専門委員会「新キャンパスにおける大学博物館を考える会」委員として、少年科学文化会館館長に参加してもらった。

**(評価と課題)** 博物館と少年科学文化会館との連携は、文化会館を利用した公開展示、普及講演会などを通じて十分に機能している。今後、公開展示や実習などを共同で企画することを検討すべきである。博物館が学校外教育、生涯学習に一定の役割を果たすことを活動の一つの柱とするとき、専門的知識と経験を持つ文化会館職員の指導や助言は極めて重要である。

### 8-4. 北九州市立自然史歴史博物館

北九州市立博物館の施設見学を行い、学芸員から施設の概要、展示計画などの説明を受けた。北九州市立博物館の一部に、大学博物館の展示を置くことの可能性について議論している。

**(評価と課題)** 博物館と北九州市立博物館との連携は、古生物学、動物学などの研究の面である程度達成されている。北九州市立博物館は福岡県で唯一の自然史系学芸員を多数擁する博物館であり、今後、学芸員教育、展示などの面でも連携を深め、協力関係を構築することが重要である。

### 8-5. 九州国立博物館

平成16年、九州国立博物館から、アジアの博物館との連携、交流の調査のため事務官1名が博物館を訪問し、専任教員から説明を聞き、P&P研究成果報告書を資料として持ち帰った。

博物館では施設、設備などを見学するため、館長始め、専任教員、専門職員が、会館準備中の九州国立博物館を訪問し、学芸員から説明を受け、情報の交換を行った。



(評価と課題) 九州国立博物館との連携は、今のところ個人レベルである程度達成されている。歴史学・考古学・美術史学主体の国立九州博物館と自然史系諸学主体の九州大学博物館とは扱う分野が異なるので、活動上うまく住み分けしながら、協力できる関係の構築に努めるべきである。

## 9. 国際連携

(資料12)

### 9-1. 研究拠点の形成・共同研究

博物館では、アジアの博物館との連携・共同研究の拠点作りを目指してP&P研究経費により、博物館事情、研究者、施設・設備、標本資料の調査を行った。

#### アジアの博物館、研究所の情報収集

- A. タイ、マレーシアでの昆虫学情報収集および調査研究  
小島、平成14年3月3日～4月2日
- B. タイ国軟体動物研究者との研究打合せ、交流協定の準備
  - B-1. プーケット海洋生物学研究所  
松隈、平成14年12月21日～28日；平成15年12月21日～28日
  - B-2. カセツアート大学水産学部博物館、海洋生物学科情報収集  
松隈、平成16年2月3日；平成17年2月12日～17日
- C. インドネシア調査
  - C-1. 古文書（VOC文書ほか）  
宮崎・中西・（吉備国際大学坂本勇教授・学生）、平成15年3月23日～29日
  - C-2. 昆虫調査、交流協定
    - (1) 湯川、平成13年9月30日～10月6日、インドネシア科学院生物学研究センター
    - (2) 湯川、大森（理学部事務長）、上地（昆虫学教室）、樋口（昆虫学教室）、我那覇（昆虫学教室）、平成16年3月15日～3月21日、生物学研究センター、虫えい調査。
- D. 韓国博物館事情調査 岩永・田中、平成15年12月10日～12月12日

#### 共同研究

- A. タイ国産二枚貝綱（軟体動物）の研究（松隈）： 南西日本の海産二枚貝相と密接な関係がある東南アジアの二枚貝相を明らかにするため、タイ国研究者と共同で分類学的な研究を行っている。タイ側共同研究者：Dr. Somchai Bussarawit (Phuket Marine Biological Center), Ms Vararin Vongpanich (Phuket Marine Biological Center), Prof. Wantana Yoosukh (Kasetsart University), Mr. Teerapong Duangdee (Kasetsart University)
- B. タイ・マレーシアの昆虫相の研究（小島）： 農務省昆虫学研究所、カセサート大学、チュラロンコン大学、チェンマイ大学、マレーシア国民大学、マレーシア森林局昆虫学研究所の研究者との間で共同研究を進めている。

(評価と課題) P&P経費、科学研究費、委任経理金などを使って東南アジアに研究拠点を作る活動を行い、概ねその目的を達成している。博物館資料の充実、東南アジア研究の発展のためには海外にしっかりとした共同研究者・研究施設を持つことは極めて重要である。P&P研究による若手研究者の育成は計画終了後も継続して行く必要がある。

## 9-2. 国際交流協定

湯川博物館長は平成15年3月13日～22日及び平成16年3月15日～26日、インドネシア科学院生物学研究センターを訪問し、アリーブディマン所長と研究者の交流、施設・設備の相互利用及び標本資料の相互利用に関する交流協定の案文の検討を行った。平成16年3月16日付けで学術交流協定を締結した。

インドネシア科学院生物学研究センターの概要

名称 インドネシア科学院生物学研究センター

The Research Center for Biology of The Indonesian Institute of Sciences

所在地 Jl. Ir. H. Juanda 18, Bogor 16002, Indonesia

電話 +62-251-321038 ; FAX +62-251-325854

### 交流協定締結による今後の展望

インドネシア科学院生物学研究センターは3研究部門を擁し、東南アジアでは屈指の標本数を誇る博物館を併せ持っている。これらは、いずれも熱帯産の貴重な標本である。

博物館とインドネシア科学院生物学研究センターの交流協定が締結されことにより、今後、調査研究における相互の協力関係がより強固になり、調査ビザの取得や標本の長期貸し借りなど調査研究の遂行がよりスムーズにおこなわれるようになる。また、博物館展示物の相互利用や情報交換が盛んに行われるようになり、相互の博物館活動をより活性化することができる。アジアに開かれた大学を標榜する九州大学にとって、東南アジアの生物学研究の拠点とも言うべきインドネシア科学院生物学研究センターとの交流協定の締結は、本学の将来展望とも合致するものであり、長期的な視野から見て、双方に多大なメリットをもたらすものと考えられる。

(評価と課題) 博物館創設後、外国研究機関との間で交流協定を締結するという目標は達成された。協定の締結により、調査研究における相互の協力関係がより強固になり、確固たる研究拠点を東南アジアに持つことから共同研究が行い易くなることが期待されるが、今後、交流協定が名実共に機能を果たすよう、博物館専任教員及び兼任教員が協力してアジア研究と取組む必要がある。

### 9-3. 外国人研究者の受入

(資料13)

九州大学が収蔵する膨大な標本の閲覧を希望する外国人研究者は多い。博物館は創設以来、外国人研究者との情報交換、共同研究を積極的に行ってきた。これまでにBrazil、Sung Kyun Kwan University (Korea)、National Taiwan University、Phuket Marine Biological Center (Thailand)、Kasetsart University (Thailand)、Muzeum i Instytut Zoologii PAN (Poland)、Malaysia National University、Museum Zoologicum Bogoriense (Indonesia)、Tel-Aviv University (Israel)などの分類学研究者が博物館を訪問し、資料の閲覧や情報交換を行った。

**(評価と課題)** 九州大学の膨大な学術標本を閲覧するため多くの研究者が九州大学を訪れており、博物館は海外の研究者の受入窓口の役割を果たすことに努めている。外国人研究者の受入に関しては、概ね機能しているが、外来研究者が座る机や標本を広げて研究するスペースがほとんどないのが現状である。約17㎡の教員研究室の中のわずかなスペースや会議室兼作業室の共同の机に座り、慌ただしく研究している状態は一刻も早い改善が望まれる。

## 10. 情報発信

### 10-1. ホームページ

総合研究博物館設立後すぐの平成12年7月にホームページを作成・公開した。その後も随時更新して、常に最新情報を提供している。内容は組織・スタッフなどを紹介した「博物館について」・「イベント情報」・「九州大学所蔵標本」・「博物館出版物」・「九州大学データベース」・「インターネットミュージアム」・博物館スタッフの研究活動の成果を紹介した「ディスカバリーズ」などである。

**(評価と課題)** 大学博物館のホームページは日本語のページは質・量とも充実しており、十分に機能を果たしている。今後、海外、特にアジアとの連携のため、英語版の充実を図る必要がある。

### 10-2. インターネット博物館

総合研究博物館設置以前、第1回先行展示として平成9年に催された「倭人の形成」展から平成16年「大学博物館西東」展に至る13回の公開展示・特別展示、サテライト展示の内容を、使用したパネルを主体にWebページを作成し、公開している。

**(評価と課題)** これまで展示の内容がインターネット上で見られることは大変好評で、「雲仙普賢岳の噴火とその背景」は開館以来、入場者数が259,063人を越え、十分に情報発信の機能を果たしている。

### 10-3. データベース

#### データベースの公開

九州大学所蔵標本・資料の整理・データベース化を支援するとともに、博物館専任教員が積極的に整理・データベース化、および検索システムの開発に関わり、博物館ホームページ上で公開している。

- 1) 佐々治コレクション（昆虫）ホロタイプデータベース
- 2) ゾウムシデータベース
- 3) 寄生虫標本データベース
- 4) 鉱物・岩石・化石標本検索データベース
- 5) 記録史料目録検索データベース
- 6) 筑豊石炭鉱業（記録史料）データベース
- 7) 植物・海藻標本データベースなど

#### リンク

現在九州大学で公開されているデータベースなどの情報を集め、博物館ホームページを通じてリンクをはっている。

- 1) Kyushu University Rice DataBase（農学研究院附属遺伝子資源開発研究センター植物遺伝子開発分野）
- 2) 昆虫学データベース(KONCHU)（農学研究院生物資源開発管理学部門昆虫学教室）など。

**(評価と課題)** ホームページ上で九州大学の標本・資料に関するデータベースを公開しており、概ね機能を果たしている。今後ともデータベースの充実に努め、学術標本の教育・研究への有効活用を支援する必要がある。

### 10-4. 九州大学所蔵標本資料冊子

資料部の協力を得て、九州大学が所蔵する学術標本資料の名称（コレクション名）、所蔵部局、数量、容積、特徴などを調べ、写真を付けてパンフレットを作成した。

**(評価と課題)** 今回作成された冊子は、昭和60年に作成された冊子以降大幅に増えた標本・資料の情報を盛込んだものであり、現在の大学所蔵標本の全貌を概観する上で、十分に機能を果たしている。

## 11. 出版

(資料14)

### 11-1. 概要（和文・英文）

「九州大学総合研究博物館概要」は、博物館の沿革、理念、組織活動の概要を和文で分かりやすく説明したもので、平成13、14、15年度に各年度1000部を発行し、学

内各部署、公開展示・特別展示入場者などに配布した。

「The Kyushu University Museum」は「博物館概要」の英語版で、平成14、16年度に各年度500部を発行した。

**(評価と課題)** 博物館概要は、国内外の利用者の便を考え、和文と英文で発行されており、1、2年ごとに内容を更新して、常に最新の情報が盛り込まれるよう努めている。学内各部署、市内小中高校、近隣博物館、他大学博物館に配布されるほか、学内で行われる特別展示入場者や博物館訪問者にも配布されており、博物館を紹介する機能を十分に果たしている。

### 11-2. 博物館ニュース

「博物館ニュース」は各年度の行事、学術標本の紹介などを中心に紹介したパンフレットである。これまでに1～4号が毎回5000～10000部印刷され、博物館活動を広く社会に宣伝している。

**(評価と課題)** 博物館ニュースは平成16年度までに4号が発行され、その役割を相応に果たしているが、更に発行の回数を増やして、博物館の活動を社会に宣伝し、理解と支援を求めることが望まれる。

### 11-3. 研究報告

平成14年度より博物館の教育研究活動を発表する研究報告Bulletin of the Kyushu University Museumの発行を始めた。内容は原著論文のほか、学術標本の目録など資料集も掲載する。現在第3号が準備中である。印刷経費は1号当たり75万円を計上しているが、ページのかさむ第3号の印刷では150万円に達すると見積もられている。

**(評価と課題)** 研究報告は博物館の研究活動の公開のため、概ね機能している。今後、編集委員会や投稿規約を明文化して、積極的に出版を継続し、他の研究機関の研究報告と交換を行い、研究資料の収集に役立てる必要がある。十分な原稿を集めるためには、投稿者の範囲を博物館専任教員、資料部兼任教員、博物館協力研究員のほか、九州大学の学術標本に基づき研究を行う人についても、編集委員会で審議の上、門戸を開くことを検討すべきである。

### 11-4. 年報

平成12～15年の博物館の活動を記録した九州大学総合研究博物館年報（第1号）600部を平成16年3月に発行した。学内各部署、運営委員、近隣の博物館、自治体、他の大学博物館などに配布し、博物館活動への理解と支援を求める助けとする。

**(評価と課題)** 年報は博物館の事業の実績を知る上で重要な資料であり、概ね機能している。平成15年度以降も毎年発行するよう努めるべきである。

#### 11-5. その他の出版物

総合研究博物館公開展示図録「石炭・金・地熱 -九州の地下資源-」を出版（平成13年12月、12000部）。

総合研究博物館公開展示図録「倭人伝の道と北部九州の古代文化-九州大学所蔵考古資料展」を出版（平成16年12月、2000部）。

**(評価と課題)** 図録は限られた展示経費の中で作成され、また展示会実施部局の多大な協力が必要なため、これまで2回しか発行されていない。しかしながら、入場者の展示内容の理解を助けるという直接的な役割のほか、展示会後も大学の研究室や展示室に常備して、学生や訪問者に配布され、教育研究に役立てるとともに、大学の研究活動を社会に紹介するという役割を持つ。これまで作成された図録は、これらの機能を十分に果たしている。今後、できるだけ多くの展示会で図録を作るためには、これまで無料で配布されてきた図録を本当に欲しい人だけが購入するという有料化についても検討すべきである。

## II. 管理運営

### 1. 管理運営のあり方

博物館の管理運営にあたり、館長の権限や補佐体制及び意志決定システムを明確にし、全学的な運営方針を踏まえ、機動的、戦略的な運営を実現する。特に館長のリーダーシップの下、大学総合研究博物館としての設置理念を踏まえ、平成16年度から始まった中期目標・中期計画を適切に実施し、本学における学術研究の中核として活動していかなければならない。また結果を学内外に情報発信することにより理解と信頼を得られるよう積極的に運営を図る必要がある。

(評価と課題) 管理運営の理念は、全学共同教育研究施設として十分に水準に達している。
--

### 2. 管理運営体制

#### 2-1. 運営体制と意志決定

博物館の管理運営は、博物館規則など関係諸規定を遵守して行われている。

##### 館長の選出と役割

館長の選出は、総合研究博物館規則に基づいて、運営委員会の推薦により総長が任命する。任期は2年で再任可、在任期間は最高4年までである。推薦にあたり、館長から全学の部局長に候補者推薦を依頼し、当該候補者について運営委員会構成員の選挙により館長に相応しい候補者を推薦することとなっている。

館長は博物館の業務を掌理するとともに、研究、教育、社会連携、国際連携などの推進および体制の整備、管理運営の効率化などを図る。なお、重要な事項については、運営委員会の審議を経て運営を行う。

##### 副館長の選出と役割

副館長は総合研究博物館規則に基づいて、館長の指名により、運営委員会の承認を経て総長に推薦される。任期は2年とし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を越えることが出来ない。副館長は、博物館専任の教授及び助教授のうちから選定されることになっている。

副館長は、館長を補佐し、博物館の業務を整理するとともに、館長に事故あるときは副館長がその職務を代理する。

##### 意思決定システム

博物館の意志決定は、事項の種類、軽重により次のとおり分けられる。

- 1) 軽易な事項  
館長の裁量の範囲で決定、実施
- 2) 博物館として判断し決定する事項

館長が各種委員会に諮問し、審議を経て決定、実施

3) 博物館として判断し決定するもののうち重要な事項

人事・予算など重要事項は運営委員会の承認を経て決定、実施される。

なお、運営委員会に諮られる議題については後述の教員会議において検討がなされ、提案されている。また、特に重要な事項については、運営委員会に各種専門委員会が設けられ、検討された結果が運営委員会に報告され、審議される。

### 運営委員会

委員会の構成員は29名で、総長指名の副学長、附属図書館長、情報基盤センター長、博物館専任の教授、助教授、各部局から選ばれた者及び理学部等事務長がそれぞれ参加し、審議が行われている。

審議事項は次のとおりである。

- 1) 館長及び副館長の選考
- 2) 教員の人事
- 3) 教員の研究業務に関する重要事項
- 4) 共同利用に関する重要事項
- 5) 研究員、研究生などに関する事項
- 6) 自己点検評価に関する事項
- 7) 規則の制定、改廃

委員会の委員のうち、キャンパスが離れている部局から参加する委員が多いことから委員の時間的負担が多く、このため、書面会議が多い。

### 運営委員会開催回数

年度	会議	書面会議	計
12	5	2	7
13	3	1	4
14	1	3	4
15	2	4	6
16	4	5	9

### 各種委員会

委員会は次のとおり3つ設置されたが、1)については、提言提出後廃止されている。

- 1) 新しい大学博物館を考える会（廃止）
- 2) 自己点検評価専門委員会
- 3) セクシュアル・ハラスメント等防止委員会（規程有）

また、関係する部局と協力した委員会として、次の委員会に参画している。

- 1) 理学部等放射線障害予防規定

博物館などの放射線障害予防などに関し審議する。



## 2) 理学部研究院等衛生部会

博物館などの安全衛生管理などに関し審議する。

### 教員会議

博物館の日常業務を能率的にやりとげるため原則として毎月第1, 3, 5日曜日の午前中開催されている。メンバーは館長（議長）、専任教員、専門職員、研究支援推進員である。展示、公開講演会、学芸員資格関係授業・実習、標本・資料に関することなどを審議している重要な会議であるが、明文化された規定がない。平成16年9月から専任教員が交代で書記となり、記録を残すこととした。

**(課題と評価)** 博物館長の選定に関しては、全学の幅広い分野から適任者を選出するシステムが十分に機能している。館長の役割に関する規程は十分に水準に達している。館長は、今後とも博物館の管理運営業務に責任を持ち、時代の変化や社会の要請をふまえ、迅速に対応する必要がある。

副館長は、館長のリーダーシップを支援するため館長の指名により選出され、館長の補佐として活動している。副館長選出のシステムは十分に機能しているが、副館長の権限、責任などについて明確な規程がなく、整備する必要がある。

運営委員会初め各種委員会は、会議の審議を経て意志決定がなされており、意志決定のシステムは、概ね十分に機能している。今後、管理運営の円滑化および効率化を考慮し、意志決定システムを明確にし、迅速な決定ができるよう委員会の再編・整備および規程の整備を図ることが時代の要請であり、取り組むべき重要な課題である。審議事項のうち、可能なものは代行議決機関の設置を検討し、特に重要な事項を運営委員会で審議することなどを検討する必要がある。なお、結果については、電子メールなどで迅速に運営委員会構成員に報告することが必要である。

## 2-2. 事務体制

博物館に関わる研究、教育の支援事務（人事事務、勤務時間管理、物品購入、予算執行、安全管理など）は、理学部等事務部が行っている。このほか、博物館には固有の事務（運営委員会などの会議事務、博物館に関する情報収集、標本・展示物などの保管管理事務、ポスター、チラシなどの作成及び発送、ホームページの構築・管理の補助など）がある。事務には、理学部等事務部所属の専門職員1名、博物館所属の事務補佐員2名及び研究支援推進員1名が配置されている。他国立大学博物館の全学レベルの博物館事務は、事務局に所属している場合と、学部事務に所属している場合がある。

現在、社会連携充実を含め博物館改組を検討中であり、今後事務量の増加が予想される。業務にあたっては研究部と事務部の連絡調整を密にしながら、事務の効率化、合理化を進めている。

**(評価と課題)** 事務体制については、概ね十分に機能している。今後、博物館の業務量の増加が予想されるが、理学部等事務部の各掛がお互いに博物館の情報を共有し、教員と連携、協力しながら、迅速、的確に対応する必要がある。

現在、全学の事務職員の定員削減計画の中で、理学部等事務職員の削減が実施されている。博物館が学内共同教育研究施設であること、また現在検討中の改組などを考えると、将来は博物館独自の事務体制を持つことを検討する必要がある。

### 3. 教員組織と人事

#### 3-1. 教員の配置

(資料15)

専任教員の配置は次の通りである。

系	教授	助教授	助手	
一次資料研究系	岩永省三	中牟田義博		
分析技術開発系	松隈明彦	中西哲也		
開示研究系		宮崎克則	小島弘昭	三島美佐子

専任教員と協力して各種博物館活動を行う兼任教員と協力研究員の配置、氏名を参考資料15に示す。

#### 3-2. 教員の選考

総合研究博物館の専任教員の選考は、平成12年6月5日の運営委員会において提案・承認された総合研究博物館教官(教員)選考内規に基づき、選考委員会を設けて行われている。博物館創設以来、平成12年度教授1名、助手1名、平成13年度助手1名の選考を行った。教員の選考にあたっては、全国関係機関への公募を行い、選考委員会では選考のうえ、運営委員会において議決する。資格審査は関係部局の教授会に依頼してきたが、博物館規則の改正に伴い、平成16年度からは原則として選考委員会において行い、必要に応じて関係する部局の教授会で行うことができることとなった。

**(評価と課題)** 専任教員選考のシステムは、十分に機能している。選考は教員選考内規に従い、公平に行われている。これまで行われた教授、助手の選考は、何れも完全な公募により候補者を全国から募った。

### 4. 財政

#### 4-1. 予算

##### 運営交付金の配分

博物館の運営交付金の配分の考え方は次のとおりである。

- 1) 教育研究基盤校費

予算額から全館的に必要な諸経費（光熱水料、事務経費など）を控除し、教員会議で決めた職種別比率で配分している。

2) 教員研究旅費

教員会議で決めた職種別比率で配分している。

3) 附属施設等経費

本経費と教育研究基盤校費から移算された共通経費を合算し、事業費並びに事務経費及び光熱水費などに使用する。

開設以後の予算の推移はつぎのとおりである。

運営交付金（教育研究基盤校費）

単位（千円）

区 分	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度
教育研究基盤校費	15,588	15,618	12,465	12,601	11,250
教育研究旅費	974	974	861	861	859
その他	10,992	9,628	16,891	16,962	17,611
計	27,554	26,220	30,217	30,424	29,720

【その他の内訳】

区 分	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度
附属施設経費		6,750	14,111	14,054	15,102
消費税影響額	1,135	878	701	726	509
特別経費等	9,857	2,000	2,079	2,182	2,000

学内予算（全学間接経費など）の配分

博物館の特別事業について年度毎に総長に要望し、事業内容などについて了承を得て、全学の間接経費などにより配分されている。

年度	区 分	課 題	交付額（千円）
平成12	学内共通経費	博物館運営経費	18,101
平成13	P & P（B1タイプ）	アジア・太平洋博物館情報ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究	5,613
		学内共通経費	博物館運営経費
	総長裁量経費	博物館設備充実経費	20,000
	総長裁量経費	博物館展示経費	7,000
平成14	P & P（B1タイプ）	アジア・太平洋博物館情報ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究	5,427
		重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用

	間接経費（全学共通分）	研究部門に係る経費（DNA分析用前処理装置）	3, 945
平成15	P & P（B1タイプ）	アジア・太平洋博物館情報ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究	4, 500
	重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	7, 000
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本・資料のデータベース化	5, 889
	社会連携活動経費	九州大学総合研究博物館の地域貢献支援体制	2, 500
平成16	重点的教育研究基盤整備費	九州大学総合研究博物館の公開展示に伴う費用	7, 000
	間接経費（全学共通分）	学術標本の緊急的収蔵スペースの確保に関わる経費	3, 505
	間接経費（全学共通分）	九州大学所蔵の学術標本・資料のデータベース化	5, 654
	社会貢献事業	コミュニケーションミュージアム事業	900

※ P & P：九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト

**（評価と課題）** 全学の間接経費等の確保については、概ね目的が達成されているが、博物館の将来計画を踏まえ、公開展示など社会活動のなかで効率的な運営を行うとともに、積極的に実績を積み、大学の学術研究の情報発信拠点として整備していく必要がある。特に、データベース化、地域貢献事業は資料部兼任教員の協力のもとに、博物館が中心となって取組むべき事業であることを全学に訴え、必要資金の確保への支援を求めるべきである。

## 4-2. 外部資金

### 科学研究費補助金

科学研究費補助金採択状況は、次のとおりである。

年度	区 分	課 題	金額（千円）
平成12	基盤研究(C) (2)	集落・墓地・祭祀土器から見た弥生時代から古墳時代への移行過程の研究	259
	基盤研究(C) (2)	近世商人資本の生成・発展過程についての研究	1, 300
	基盤研究(C) (2)	祭礼にみる幕末維新期の民衆像	500
平成13	基盤研究(C) (2)	近世商人資本の生成・発展過程についての研究	600
	基盤研究(C) (2)	祭礼にみる幕末維新期の民衆像	500

	基盤研究(C)(2)	集落・墓地・土器・祭祀から見た弥生時代社会の変容過程の研究	900
	若手研究(B)	高等ゾウムシ類の系統進化と被子植物との関係	1, 300
平成14	若手研究(B)	高等ゾウムシ類の系統進化と被子植物との関係	500
	基盤研究(C)(2)	集落・墓地・土器・祭祀から見た弥生時代社会の変容過程の研究	700
	特定領域研究(2)	日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成	6, 200
平成15	基盤研究(C)(2)	集落・墓地・土器・祭祀から見た弥生時代社会の変容過程の研究	700
	特定領域研究(2)	日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成	5, 300
	若手研究(B)	植物における倍数化が虫えいの形成及び形状の多様化に及ぼす影響	2, 700
平成16	基盤研究(C)(2)	集落・墓地・土器・祭祀から見た弥生時代社会の変容過程の研究	700
	特定領域研究(2)	日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成	7, 400
	若手研究(B)	植物における倍数化が虫えいの形成及び形状の多様化に及ぼす影響	900
	基盤研究(C)(2)	カンラン石の格子歪みによるコンドライト隕石の被衝撃圧の定量的評価	1, 800
	若手研究(B)	国内における林冠昆虫相研究の展開：植食性甲虫類の多様性と寄主特異性	2, 000

### 奨学寄付金

奨学寄付金の受入状況は、次のとおりである。

年 度	金額 単位 (千円)	備考
平成12年度	800	海洋生物研究資金、(TTC株)
平成13年度	500	海洋生物研究資金、(TTC株)
平成14年度	500	海洋生物研究資金、(TTC株)
平成15年度	700	海洋生物研究資金、(TTC株) 無機結晶評価のための研究資金、青木義和
平成16年度	1, 440	熱帯生物資源研究基金、(日本学術振興会)

**(評価と課題)** 科学研究費補助金の確保については、平均以上の獲得率で、概ね目的が達成されている。研究活性化のためには外部資金の確保が必須であり、奨学寄付金の確保に努めるとともに、各種研究助成金の募集に積極的に応募し、獲得する必要がある。

### III. 施設・設備

#### 1. 施設の状況

平成12年の博物館設立時、博物館の施設として設けられたのは教員室として印刷所の一部、展示用に記念講堂の一部、倉庫兼実験室として旧応力研の建物に2室だけである。博物館の事務は、理学部等事務部が担当しており、理学部本館に配置されている。旧応力研の2室は平成12年度と平成13年度に一室ずつ改装し、一室は地学系と生物系の前処理実験室として使用し、他の一室は鉱物分析のためのX線室として使用している。その後、“標本収蔵室及び研究室の確保について（緊急的要望）”を提出し、平成16年度に記念講堂4階の50 m<sup>2</sup>の一室が新たに使用を許され、標本収蔵室として利用している。また、移転までの中長期的利用のため“箱崎地区での建物確保についての要望書”をキャンパス計画及び施設管理委員会に出している。このように博物館の施設は九州大学箱崎キャンパス内に分散して存在しており、専有面積の不足とともに、日常の業務に大きな制約となっている。

#### 1-1. 博物館の施設の状況

博物館はその創設以来、教員室、実験室、展示室、作業スペース、事務室がそれぞれ離れたバラバラの建物にある。

使用目的及び施設面積は次のとおりである。

1) 旧印刷所（教員室）	122 m <sup>2</sup>
2) 旧応力研（倉庫兼実験室）	50 m <sup>2</sup>
3) 記念講堂2、3階（展示室、教員室、作業スペース）	200 m <sup>2</sup>
4) 記念講堂4階（標本室）	50 m <sup>2</sup>

**（評価と課題）** 博物館の施設は分散し、面積は極めて狭隘で、その機能は相応にしか発揮されていない。教員一人当たりの通路を除く研究室の専有面積は17 m<sup>2</sup>に過ぎない。このため、特に博物館の管理・運営、及び博物館での教育、研究に重大な支障を来している。そのほか、以下の問題点は早急に改善の措置を講じるべきである。

- 1) 旧応力研の実験室2室は老朽化が著しく、埃の害が懸念される。
- 2) 専任教員、協力研究員の標本作成、整理のためのスペースがほとんど無い。
- 3) 博物館で卒論、修論を書く学生の研究・実験のスペースが無い。
- 4) ゼミを行うスペースが無い。
- 5) 館長室を設ける余裕が無く、会議室がゼミ室、標本整理のスペース、パネルの作成などのスペースを兼ねている。

当面は箱崎地区に教育、研究、展示、標本収納のスペースを確保し、大学教育、社会教育、標本の収蔵・整理・公開に取り組むべきである。新キャンパスにおいては、740万点を超える全国1の学術標本の保管と有効活用、教育、研究のために、十分なスペースを確保するよう学内外に働きかけるべきである。

## 1-2. 部局の標本収蔵室の状況

(資料16)

博物館の施設面積が不足しているため、各部局の収蔵物は当面これまで通り関係各部局で管理せざるを得ず、標本の活用のために必要なデータベース化が滞りがちである。平成16年の各部局の主要な標本資料の保管状況は資料16のとおりである。

**(評価と課題)** 各部局の標本収蔵室は狭隘で、老朽化が著しく、相応にしか機能していない。特に次の2つの事項については、早急に改善を要する深刻な問題である。

- 1) 標本庫のスペースが不足しているため、学内の学術標本が他博物館へ流出している。
- 2) 各部局で保管されている学術標本も、スペースの不足が著しく、教育などに障害を来している。また、プレハブで保管されている標本は風雨による破損や盗難の危機に直面している。

## 2. 設備の状況

設立当初、博物館の設備としては、教員室に机や本棚、コピー機などの事務機器が設けられたのみである。その後、平成12年度から平成13年度にかけて学内経費の配分を受けて展示用設備（大型プリンター、展示ケース、バックパネルなど）を購入し、記念講堂の展示室に設置し、常設展示や特別展示のためのパネルやポスターの作成を行っている。平成13年度には学内経費によりデータベース化のための画像解析システムが導入された。その後、平成13年度から平成16年度にかけて学内経費、科研費などにより研究用設備を整備してきた。

平成17年度概算要求ではX線マイクロアナライザー一式を要求した。

### 博物館の主要な設備

- 1) 大型プリンター
- 2) 画像解析システム
- 3) 岩石・鉱物薄片作成システム
- 4) 遺伝子分析前処理システム
- 5) 微量試料粉末X線回折システム
- 6) 三次元形状計測システム

### 安全管理体制

- 1) X線発生装置を持つ各施設はX線作業主任者を持つことが義務付けられている。博物館のX線回折システムにはX線作業主任者の配置が必要である。現在、博物館は1名の資格取得者を擁し、この規定を満たしている。
- 2) 博物館は、労働安全衛生法により衛生管理者を配置することとされている。博物館では衛生管理者を置き、研修会に参加して衛生管理に注意している。



- 3) 毒劇物の管理は管理責任者、管理補助者を決め、保管庫に収納している。管理者命免簿、管理補助者命免簿、毒物劇物使用簿、毒劇物点検確認書、毒劇物廃棄依頼書兼整理簿を整備し、管理している。

(評価と課題) 博物館における教育と研究のため、教育用機器、研究用機器、展示用機器の整備に努めているが、まだ相応にしか達成されていない。兼任教員を含めて多分野の教員が利用できるX線マイクロアナライザー、走査型電子顕微鏡などの必要性を学内に訴え、経費の確保に努めるべきである。

安全管理については、博物館のX線発生装置、毒劇物管理、その他のため、X線取扱主任者、衛生管理者、毒劇物管理責任者、同補助者を置き、研修を受け、安全管理に努めており、概ね十分に機能している。

### 3. 新キャンパス計画

九州大学は福岡市西区元岡地区への移転を進めている。平成10年5月に「新キャンパス造成基本計画」が決定され、ゾーニングと移転順序の検討が始まった。平成11年7月に県道桜井太郎丸線（学園通り線）に接する部分を本部・交流・全学共通教育ゾーン、その東側ゾーンを文系、西側に広く展開するゾーンを理系とすること、移転を第Ⅰ期（平成17～19年頃）、第Ⅱ期（平成20～23年頃）、Ⅲ期（平成24～26年頃）に分けて行うことが決まった。

平成13年3月に『九州大学 新キャンパス・マスタープラン2001』が提示され、新キャンパスへの統合移転の基本方針が明らかにされた。そこでは、研究・教育施設、共通利用施設が立地するアカデミック・ゾーンが、ウェスト、センター、イーストの3ゾーンに分節され、センター・ゾーンに博物館が配置され、博物館にはインフォメーション・サービス、ビジター・センターやキャンパスの歩行者動線の起点としての役割が付与された。

その後、平成14～15年にセンター地区基本設計が検討され、博物館、産学連携施設、地域連携施設を中心に、社会に開かれた九州大学の顔が作られる方針が再確認されるとともに、博物館の建設予定位置に変更が加えられた（3-1参照）。

当初、博物館の移転時期は第Ⅱステージに当てられていただけであり、標本資料の移転の問題は取り扱われていなかったため、平成14年12月に「九州大学総合研究博物館の早期移転に関する要望書」を施設部整備計画課に提出し、第Ⅱステージでも最初の時期（平成20年）での移転を要望した。しかし、平成15年度後半に入ってから、第Ⅱ・Ⅲステージの移転をめぐる情勢が大きく変化し、センター地区の施設整備に大きな進展はないまま、博物館の移転は第Ⅲステージに変更されて現在に至っている。現在の計画通り移転が進行すると、博物館の開館は平成26年以降である。

### 3-1. 位置

新キャンパスの中央やや東よりに学園通り線が南北に貫通している。大学通線に接する両側がセンター地区であり、博物館の位置は、『マスタープラン2001』では、大学通り線のすぐ西側で、キャンパスの東西の骨格軸である歩行者専用「キャンパス・モール」のすぐ南側に定められ、JR線の駅から新キャンパスへの主要ルートである南側から見た場合、最も手前の目立つ位置にあり、「大学の顔」としての役割が期待されていた。

平成14年8月にセンター地区の基本設計の開始に先立つ設計条件設定のための調査が、施設部整備計画課によって実施され、『マスタープラン 2001』の記載内容について確認および修正の意見・要望を出すことが求められ、博物館では、土地利用計画及び配置計画について様々な要望を行い、特に『マスタープラン 2001』における博物館と大学事務局庁舎の場所の入れ替えを要望した。その結果、平成15年6月に了承されたセンター地区基本設計では、博物館の位置はセンター地区の南端から、アカデミック・プラザをはさんだ反対側で幹線道路のすぐ南に変更された。

**(評価と課題)** 博物館建設が予定されているセンター・ゾーンの学園通り線沿いは、大学と地域の接点として最も理想的な場所であり、十分に機能することが予想される。

### 3-2. 建物

平成14年8月に、総必要面積、必要な部屋の種類・面積・数・利用者数・使用目的・設計上の配慮事項などを記載した「諸室調査票」を提出した。総必要面積は12,000㎡とし、必要各室の選定と面積の割り振りを行った。博物館の回答に対して、展示室の種類・必要性・面積の整理が求められ、施設面積を圧縮するように要望があった。移転後に各部局が自前の標本庫を持たない場合、重要標本の収蔵に必要な面積、および研究・教育・展示・管理運営に必要な面積として、全学面積の内の約4,600㎡の利用を要望し、残り7,400㎡を概算要求と外部資金導入で確保するよう努めることとした。

12月にタウン・オン・キャンパスにおける施設整備方針の発表があり、規模に見合った用地面積を確保し、将来増築が可能な配置を検討していることが明らかになった。

平成15年3月にセンター地区基本設計における建物配置計画案が提示されたが、建物の形状に不都合な点があることを指摘し、研究・研究支援・教育・展示にかかわる部分を最初から機能を満たせるように東の隅に造り、収蔵庫は西方で当初は必要最低限とし、予算が付くたびに増設していくのが現実的であることを主張した。

6月に了承されたセンター地区基本設計では、博物館の要望を容れて設計が変更されたが、その後、センター地区の施設整備に大きな進展はないまま現在に至っている。

(評価と課題) 博物館の建物については、ある程度議論し計画を作ったが、内外の意見を聞きながら更に十分に議論し、検討する必要がある。

博物館は、新キャンパスでは「大学の顔」として、大学と社会を結ぶ働きが求められている。しかしながら、現在の所、博物館の移転は第IIIステージ（平成26年以降開館）が予定されている。可能な限り開館の時期を早め、学術標本の散逸を防ぎ、教育・研究への活用を図るとともに、生涯学習・学校外教育の場として社会に貢献する活動を始めるべきである。

新キャンパスでは、博物館は施設の狭隘、分散している収蔵物の問題の解決が期待される。しかしながら、移転が完了するまでの間、教育研究施設、設備の充実が何ら進まないとすれば、その間、博物館の教育・研究の進展は大きく阻まれてしまう。博物館の教育・研究および社会連携をさらに進展、充実していくには、施設・設備の狭隘、老朽化、分散する資料の管理など課題が多い。

今後、以下の事項について移転するまでの期間に十分な対応を講ずるべきである。

- 1) 散逸、破損の恐れのある学術標本の収集、整理、保管のための標本庫の確保
- 2) 標本の移転準備のための整理と情報化
- 3) 学術標本の公開・有効活用のための教員研究室、実験室、学生実験室の確保と整備
- 4) 効率的な社会教育・大学教育のための常設展示のスペースの確保

#### IV. 将来構想・将来計画

##### 1. 新しい大学博物館を考える会

(資料17)

現代に即した博物館のあり方を検討するため、平成14年に運営委員会の下に専門委員会「新しい大学博物館を考える会」を設け、半年間に亘る検討の結果、以下の内容を骨子とする提言を得た。

- (1) 大学博物館が十分なスペースを確保すべきである。
- (2) 大学博物館の特色を生かした魅力ある博物館作りを目指すべきである。
- (3) 既存の博物館、大学研究室などと機能分担や協力を検討すべきである。
- (4) 地方公共団体の施策との連携を通じて、社会教育・学校外教育で地域に貢献すべきである。
- (5) 大学博物館専任職員で担当しきれない社会教育、初等・中等教育に関わる体制の充実方策、職員の相互交流などについて地方公共団体と連携を図るべきである。
- (6) 大学博物館作りにあたっては、今後とも地域社会、行政、産業界、他博物館などの支援と助言を得る体制を作ることが重要である。

**(評価と課題)** 「考える会」は、博物館の現状の問題点を整理し、進むべき方向を提言として示したことで、設置の目的を十分に達成した。

今後とも、博物館は大学内外の意見を広く聞き、常に博物館の理念を議論し、理念実現のための計画を作る努力をする必要がある。

##### 2. 事業部構想

###### 構想の経緯

国立大学の法人化に伴い、九州大学は、大学を取り巻く一般社会からの強い要請を受けて、その中期目標の中に、地域の発展基盤を支える教育、研究、文化の拠点として、①大学に於ける教育・研究成果の生涯教育へのフィードバック、②教育面での社会との連携、③青少年の勉学意欲の増進、④大学の保有する教育資源の社会への解放、⑤地域社会との連携強化の項目を掲げた。大学博物館は、これらの各項目を実現する組織として、非常に強力な潜在的能力を持っている。大学博物館が、これらの潜在的能力を具現化することは、中央教育審議会生涯学習審議会から出された“今後の生涯学習の振興方策”に合致するとともに、文部科学省より新たに告示された「公立博物館の設置および運営上の望ましい基準」の“時代の変化に伴って生じた新たな役割への対応”を高いレベルで実現し、地方公共団体の教育委員会や様々な施設で生涯学習振興を担う職員の全体的連携を図るコーディネーターとしての組織も実現することになる。

博物館では、国立大学法人化が具体化する以前に、博物館活動と関係のある学外者を加えた将来計画の専門委員会を立ち上げ種々検討した。その結果として、社会貢献を将来、大学博物館が果たすべき重要な役割の一つとした。しかしながら、博物館の設立時においては、大学を取り巻く状況が現在のように激変することは予期されてお

らず、上記の社会貢献に対する役割は重視されていなかった。そのため、上記の社会貢献に関する事項の具現化には、現在の博物館の組織では対応しきれない面が多々存在する。そこで、博物館は、その中期目標に掲げている「組織の見直し」を急ぎ、上記の具現化に向けて大幅な改組・拡充を計画するに至った。

この改組拡充計画では、博物館に研究部、事業部、事務部の三つの部を設ける。従来の大学博物館組織と大幅に異なる点は、事業部を設けることである。事業部の主な役割は、先に掲げた大学博物館が果たすことができる社会貢献（生涯教育支援、少年教育支援、研究成果展示公開など）を学外組織と連携しながら幅広くかつ強力に実践することである。そのため、事業部には、大学博物館の行う社会貢献事業に関係する公共団体や民間組織などに所属する学外の人材を配置する。事業部の活動では、従来から博物館の教員が行ってきた展示活動や地域貢献事業を引き継ぐとともに、今後研究部で行われる研究成果の実践的な検証を行う。そのため、研究部の全教員を事業部に兼任で配置する。また、事業部の活動では、通常の学内事務とは異なった内容の業務の大幅な増加が伴うと予測される。そのため、現在理学部等事務部に委託している事務作業を、博物館独自の事務部で処理し、かつ事務部の大半の職員が事業部の職務を兼務する。

事業部の活動には、学外の類似施設の活動と重複する面が多々存在するので、外部施設との連携をスムーズに行うとともに、学内の諸行事との関連を機動的に調整するため、九州大学総合研究博物館事業部経営専門委員会（仮称、運営委員会未審議事項）を学外委員を含めたかたちで常設委員会として設ける。

## 改組の概要

現在の博物館は、九州大学の定めた「九州大学総合研究博物館規則」（以下「規則」と略称）第2条でその設立の目的を示し、規則第3条でその目的を達成するために内部組織として、一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系を設けることを定め、規則第12条において博物館の事務は、当分の間、理学部等事務部において行うと定めている。この規則の策定時においては、博物館が学外、特に地域社会に対し、種々の社会貢献をはたすことには重点が置かれていない。そこで、大学博物館に従来から求められてきた研究機能に加えて、地域社会に対する貢献にも十分対応できるよう、研究を専らとするを研究部と、社会貢献を専らとする事業部を設け、博物館独自の事務部を設ける。

## 研究部の役割と組織

研究部においては、大学博物館設立当初からの任務である、学術標本の収蔵、分析、情報開示・公開などおよび学術標本に関する研究教育の支援並びにこれらに関する調査研究を継続的に行うとともに、小・中学校教育支援、生涯学習支援の高度化・有効化に関する研究、並びに高度な学術内容を市民社会に感覚的に伝える研究を行う。そのために、専任教員は全て研究部に属し、研究部に博物館学研究部門、資料研究部門、

学習支援研究部門、情報表現研究部門を設ける。

### 事業部の役割と組織

事業部では、地域連携と社会貢献を具体的に推進する。そのため、地方公共団体や民間企業などの学外の関連分野からも人的参加をはかり、学外からの要望など大学内外の情報の流通を円滑にする。得られた情報を研究部における研究テーマに反映させ、その成果を実践的に検証する。そのため、研究部の教員は、全員事業部の職務を兼務する。また、現在理学部等事務部に委託している事務処理を独立させ、事務職員の大半に事業部を兼務させるとともに、地方公共団体や民間の関連業者など学外者の就任を積極的に進める。ボランティアや関連NPOの参画も可能なものとする。そのため、事業部に学習支援部門、企画・展示部門、管理・情報部門、営業・サービス部門を設ける。

**(評価と課題)** 全国の大学博物館に先駆けて模索されている事業部構想は、社会教育、学校外教育を博物館の重要な活動の一つと位置付け、大学教員では十分にカバーできない分野を、地方自治体などの専門家との連携によって行おうという意欲的でユニークな構想である。これは九州大学の中期目標・中期計画に沿い、「新しい大学博物館を考える会」の提言の趣旨にも十分合致するものである。

構想実現のためには、学内各部局の理解と支援が不可欠であり、運営委員会における活発な意見交換が必要である。同時に、福岡県、福岡市、周辺の国公立博物館、博物館利用者などとの意見交換も重要である。

## V. 中期目標及び中期計画

(資料18)

教員会議で中期目標・中期計画案を作成し、運営委員会で承認を得た。主な内容は以下の通りである。

### 1. 教育に関する目標

- (1) 博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部・学府の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で講義・実習に積極的に関与する。
- (2) 博物館施設・設備の開放、標本の貸出し、展示の公開などにより博物館資料を使った教育を支援する。
- (3) 博物館資料の情報を提供し、学生の勉学を支援する。

### 2. 研究に関する目標

- (1) 異分野間で情報交換、共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。
- (2) 博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。
- (3) 紀要、資料集を発行し、博物館の研究成果を社会へ還元する。
- (4) データベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。
- (5) 資料部、フィールドミュージアム部、協力研究員を充実させる。
- (6) 研究室、実験室、標本庫の確保に努め、設備を充実させる。

### 3. その他の目標

- (1) 青少年の理科離れ対策や総合学習を積極的に支援するため、地方自治体などと検討を行う。
- (2) ボランティア制度を取り入れる。
- (3) 国外の博物館職員、研究者の研修、訓練を行う。
- (4) 東南アジアを中心とした海外の研究者と共同研究を実施する。

**(評価と課題)** 学部教育・大学院教育に参画し、積極的に協力し、概ねその役割を果たしているが、協力講座に所属する場合、博物館の人事の独立性が保たれるよう配慮する必要がある。博物館施設・設備、標本の貸出しなどで積極的に各部局の教育を支援している。

博物館内で専門分野の異なる教員同士の共同研究が始められているが、兼任教員及び他の教員も含めて科研費研究補助金などの確保も視野に入れて、更に積極的に学際的共同研究を推進すべきである。

博物館の提唱で、化石標本始め幾つかの分野でデータベース化が進行している。更にデータベース化のための経費確保に努め、資料部兼任教員と連携して、学術標本の情報化に努めるべきである。

資料部、協力研究員については標本資料の情報化、展示、標本室の公開などで相応に協力を得ている。更に陣容を拡大し、学内の資料分野を網羅することが望ましいが、博物館の研究室、標本庫が極端に狭いため、机を置くスペースが無いという現状を改善する必要がある。

アジアの研究者との連携は、P&P研究などによりスタートした。確固とした研究拠点、パートナーを持つため、更に交流を拡充する必要がある。



## VI. 自己点検・評価

### 1. 自己点検・評価実施の経緯

博物館は平成16年度で創設満5年となる。学内共同教育研究施設においても自己点検・評価を行い、常に目的達成に向かって努力するという大学の方針に従い、平成16年12月14日の運営委員会において自己点検・評価を行うことを決定した。そこで、自己点検・評価委員を選出し、今年度中に点検評価を終えることとした。

自己点検・評価委員会では評価項目（要素）を選定し、評価方法、スケジュールを検討して、点検評価を行い、運営委員会へ点検・評価報告書を提出する。

また、委員会では博物館自己点検・評価委員会内規（案）を作成し、運営委員会へ提案する。今後、外部評価の方法についても審議する予定である。

### 2. 自己点検・評価体制

現在、博物館の自己点検・評価委員会に関する規程を検討中である。今回は年度末までの時間が短いため、例外的に規程整備されないまま、運営委員会で点検評価委員5名（博物館専任教員2名、館外の運営委員3名）を選んだ。委員は文科系、理科系、事務部、博物館（文科系、理科系）の各分野の運営委員がバランス良く選ばれている。

#### 評価委員

松隈 明彦（博物館、委員長）

岩永 省三（博物館）

藤井 美男（経済学研究院）

毛利 孝之（農学研究院）

大森禮次郎（理学部等事務長）

**（評価と課題）** 点検・評価は、博物館の理念・目的、活動、管理・運営体制、予算、施設・設備などを点検し、博物館の体制や活動が理念・目的をより良く達成するために、問題点を洗い出し、改善の施策に生かされるように行われるものである。このためには、博物館専任教員と博物館外運営委員両者が緊密に協力し、率直に議論する必要がある。

このように、点検評価は博物館の進むべき方向性や活動方針から、より効果的な事業の展開、施設・設備の整備まで、多岐にわたる項目を総合的に評価し、課題を指摘する極めて重要なものである。そのため、点検・評価委員会に関する規定を早急に明文化し、審議事項、任期、定足数、議決などを明確にする必要がある。

外部評価や自己点検・評価を行わない年においても、博物館は毎年年報を作成し、各年度の活動を点検して活動の改善へ生かすべきである。

## 第2部 参考資料

- 資料 1 九州大学総合研究博物館の概要
- 資料 2 九州大学総合研究博物館規則
- 資料 3 専任教員の活動
- 資料 4 第1回標本アンケート調査（平成12年7月）
- 資料 5 寄贈標本
- 資料 6 公開展示
- 資料 7 特別展示
- 資料 8 サテライト展示
- 資料 9 公開講演会
- 資料10 地域資源再発見塾
- 資料11 卒業論文公開講演会
- 資料12 研究拠点の形成・共同研究
- 資料13 外国人研究者の受入
- 資料14 博物館の出版物
- 資料15 資料部・フィールドミュージアム部・協力研究員
- 資料16 他部局収蔵物・施設
- 資料17 新しい大学博物館を考える会提言
- 資料18 九州大学総合研究博物館の中期目標及び中期計画

# THE 1950s

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

1950-1959

## 資料1 九州大学総合研究博物館の概要

### 1. 沿革及び設置構想の経緯

九州大学には、1911（明治44）年の創設以来、研究と教育を通じて大量の学術標本・資料が蓄積されてきた。しかしながら、整理・保管のための十分なスペースがなく、標本・資料を効率良く利用し、新しい研究を効果的に再生産するという理想には程遠いものであった。そのため、1971（昭和46）年に九州大学総合研究資料館設置準備委員会が設けられ、蓄積された学術標本・資料を有効に活用するため、保管・研究・展示の3部門からなる研究資料館新設構想の検討が開始された。1985（昭和60）年には、学内に500万点を超える自然史系及び文化史系の貴重な学術標本・資料があることを学内外に広く知ってもらい、その活用のためには研究資料館が必要であることを訴えるため、「九州大学所蔵標本・資料」が刊行された。

1995（平成7）年に学術審議会情報資料分科会の学術資料部会から出された報告「ユニバーシティ・ミュージアム設置について」を受けて、大学が所蔵する学術標本を教育・研究に活用するため、主要な国立大学に総合研究博物館が設置されるようになった。

1996（平成8）年、杉岡総長を委員長とする九州大学ユニバーシティ・ミュージアム設置準備委員会が設置された。そこで1998（平成10）年度の概算要求へ向けてのユニバーシティ・ミュージアム構想作りが開始され、専門委員会が設けられた。大学博物館の必要性を大学内外に訴えるため、1997（平成9）年「倭人の形成」、1998（平成10）年「雲仙普賢岳の噴火とその背景」、1999（平成11）年「九州大学／医学の歩み－寄生虫学の展開と医の文化－」という3回の先行展示が行われた。

2000（平成12）年度概算要求書において、教授2、助教授3、助手2で1次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の3系からなる総合研究博物館の新設を要求し、認められた。

2000（平成12）年4月1日、館長、1次資料研究系（助教授1、助手1）、分析技術開発系（教授1、助教授1）、開示研究系（助教授1）、専門職員、事務補佐員の陣容で、工学部保存図書館印刷所跡を研究室、五十周年記念講堂ホワイエを展示場とし、事務を当面理学部等事務部が担当することとして九州大学総合研究博物館が発足した。

### 2. 博物館の理念と設置の目的

**理念：**九州大学には、開学以来の研究と海外調査等により集められた700万点を超える学術標本があり、各学部、大学院研究科、及び各研究施設において保存されている。近年、分析技術の向上に伴い実証的研究を行う上で学術標本の利用要請が高まっており、分野横断的な研究に学術標本の重要性が認識されてきている。また、「理科離れ」や「モノ離れ」対策として、学術標本を用いて学生に知的刺激を与える実物教育が必要となってきた。博物館は統一したシステムのもとで標本及びデータの提供を行い、学部教育・大学院教育・研究への学術標本の多角的・効率的有効活用を図る大学組織としての機能を持つ。

博物館はまた、大学と社会の接点となる施設であり、大学で行われている教育・研究を社会へ紹介し、社会の大学への要望を受け取る窓口としての機能を持つ。高齢化社会の中で、

学術標本や情報の一般公開を通じて、地域の行政や他の博物館と密接に連携しながら地域住民の生涯学習を支援し、社会に貢献する博物館であることも理念とする。

目的：総合研究博物館設置の目的は以下の通りである。

- (1) 学術標本の一元化と体系的な収集・分類・整理により、異分野の研究者等の利用を効果的に支援する。
- (2) 学術標本の適正な保存・管理により破壊・変質を防止し、恒久的保存を図る。
- (3) 学術標本情報の抽出と提供により学際的研究を推進する。
- (4) 学術標本に関する情報交流の窓口となり、学内外の教育・研究を支援する。

### 3. 組織・機構

博物館には、館長、副館長、専任教員および関係部局の協力により兼任教員を配置している。また、博物館規則により、研究・教育等の組織として一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系を配置するとともに、博物館の運営審議機関として総合研究博物館運営委員会を設置した。なお、博物館事務については、当分の間、理学部等事務部が担当することとしている。

また、2000（平成12）年、第1回運営委員会で博物館に資料部、フィールドミュージアム部を新設することが提案され、承認された。



### 4. 規則

博物館の理念を実現するため、博物館の目的、組織等を博物館規則として定める。そのほか、博物館の業務、活動、運営のため以下の諸規則を定めている。

総合研究博物館規則

総合研究博物館資料部内規

総合研究博物館フィールドミュージアム部内規

総合研究博物館教員選考内規

総合研究博物館外国人学者受入に関する内規

総合研究博物館協力研究員の委嘱に関する内規

総合研究博物館セクシャル・ハラスメント等防止委員会内規

## 資料2 九州大学総合研究博物館規則

### (趣旨)

第1条 この規則は、九州大学学則（平成16年度九大規則第1号。以下「学則」という。）第13条第2項の規定に基づき、総合研究博物館（以下「博物館」という。）の内部組織その他必要な事項を定めるものとする。

### (目的)

第2条 博物館は、学術標本の収集、分析、展示・公開等及び学術標本に関する研究教育の支援並びにこれらに関する調査研究を行うとともに、学内外の研究教育活動に寄与することを目的とする。

### (系)

第3条 博物館に、前条の目的を達成するため、次の表の左欄に掲げる系を置き、当該系の任務は、同表の右欄に定めるとおりとする。

系	任 務
一次資料研究系	学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育
分析技術開発系	学術標本の先端的分析法による新たな学術情報の抽出及びその理論・方法に関する研究と教育
開示研究系	学術標本の展示・公開のための情報のデータベース化及びその効果的な展示・公開のための理論・方法の研究と教育

### (館長)

第4条 学則第26条の規定により、博物館に、館長を置く。

- 2 館長は、九州大学の教授のうちから第6条に規定する運営委員会の推薦により、総長が任命する。
- 3 館長の任期は、2年とする。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 館長は再任されることができる。ただし、引き続き再任される場合は、1回を限度とする。

### (副館長)

第5条 学則第26条の規定により、博物館に、副館長を置く。

- 2 副館長は、博物館の専任の教授及び助教授のうちから館長の推薦により、総長が任命する。
- 3 副館長の任期は、2年とする。ただし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を超えることはできない。

4 副館長は、再任されることができる。

**(運営委員会)**

第6条 学則第39条の規定により、博物館に、博物館の重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 館長及び副館長の選考に関する事。
- (2) 博物館の教員人事に関する事。
- (3) 教員の研究業務に係る重要事項に関する事。
- (4) 共同利用に係る業務の重要事項に関する事。
- (5) 研究員等に関する事。
- (6) 研究生等に関する事。
- (7) 博物館内の諸規則等の制定改廃に関する事。
- (8) 博物館の自己点検・評価に関する事。
- (9) その他博物館の管理運営に関する事。

3 前項第2号に掲げる事項のうち、教員の選考のための資格審査については、原則として、博物館に設置する教員選考委員会において行うものとする。ただし、必要に応じて、博物館の教育研究に係る部局の教授会において行うことができる。

第7条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 総長が指名する副学長
- (2) 館長及び副館長
- (3) 博物館の専任の教授及び助教授（副館長の職にある者を除く。）
- (4) 附属図書館長
- (5) 情報基盤センター長
- (6) 各研究院の教授及び助教授のうちから選ばれた者 各1人
- (7) 各附属研究所の教授及び助教授のうちから選ばれた者 各1人
- (8) 理学部等事務長
- (9) その他運営委員会が必要と認めた者 若干人

2 前項第6号、第7号及び第9号の委員の任期は、2年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 前項の委員は、再任されることができる。

第8条 運営委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を主宰する。

3 運営委員会に、副委員長を置き、副館長をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第9条 運営委員会は、委員の2分の1以上が出席しなければ議事を開き、議決することができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

#### (専門委員会)

第10条 運営委員会に、専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

#### (兼任の教員)

第11条 博物館に、兼任の教員を置くことができる。

- 2 兼任の教員は、九州大学の教員のうちから運営委員会の推薦により、総長が任命する。
- 3 兼任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

#### (事務)

第12条 博物館に関する事務は、当分の間、理学部等事務部において処理する。

#### (雑則)

第13条 この規則に定めるもののほか、博物館の組織及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、館長が定める。

#### 附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規則の施行後、最初に任命される館長及び運営委員会の委員は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなす。
- 3 この規則の施行の際現に九州大学総合研究博物館規則（平成12年4月1日施行。以下「旧規則」という。）の規定に基づき、兼任の教員に任命されている者は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなし、その任期は旧規則による兼任の教員として在任した期間を控除した期間とする。



### 資料3 専任教員の活動

岩永 省三 (いわなが しょうぞう)

Shozo IWANAGA

#### <研究の紹介>

日本の弥生時代と7・8世紀の社会を主要な研究対象としている。弥生文化の特性とその成因を、青銅器とくに武器形品を中心素材として解明した。青銅器が社会の中で果たした機能とその変化、とくに青銅武器が武器形祭器に変化した原因について、社会の変化と関連付けながら考察し、青銅武器が儀器化の兆しを見せながら結局祭器に変質はしなかった南部朝鮮との比較検討を行なった。青銅器の機能変化と土器・装身具類など他の文化要素の時間的変化との連動関係を検討する事によって、青銅器の変化の背後にある習俗・祭祀の変質、ひいては社会組織・政治組織の変容の解明をも試みた。青銅器の主要分布圏たる西日本の内部で、社会の発展の不均等がどの程度あったのかについて、青銅器生産開始時期の地域差の有無の検討を通して考察した。弥生時代の土器の様式構造について変化とその原因の一端を明らかにした。弥生時代以降の国家形成過程の解明も研究課題としており、基礎作業として国家形成の理論的検討、具体的には史的唯物論的古典学説の有効性、専制国家概念、国家に先行する社会の段階設定、前国家段階から国家への転化の条件、過渡期の理論的取り扱い、などについて検討した。さらに古代国家形成に決定的影響を及ぼした7世紀後半から8世紀初頭の対外関係の様相について、都市構造の変化や仏教美術様式の時間的変化を素材とする検討も行なった。

#### <所属学会>

日本考古学協会、日本文化財科学会、考古学研究会、九州考古学会

#### <研究資金>

- (1) 基盤研究(C)(1997-2000年度：代表) 集落・墓地・祭祀・土器から見た弥生時代から古墳時代への移行過程の研究
- (2) 基盤研究(C)(2001-2004年度：代表) 集落・墓地・祭祀・土器から見た弥生時代社会の変容過程の研究
- (3) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト(2001-2003年度：分担) アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究

#### <学外委員等>

春日市文化財専門委員

島根県古代文化センター客員研究員

## ＜海外渡航＞

2000. 1. 15 科学研究費基盤研究A(2)「日韓古代における埋葬法の比較研究」による研究成果発表会(韓国国立光州博物館)、口頭発表「青銅器儀器化の比較研究-韓国と日本-」
2000. 7. 19 嶺南考古学会・九州考古学会合同学会(韓国東亜大学校石堂ホール)、口頭発表「青銅器儀器化の比較研究-韓と倭-」
2003. 8. 20-8. 23 韓国で百濟関係遺跡・遺物の調査
2003. 9. 16-9. 22 イギリスで新石器時代～初期鉄器時代の遺跡・遺物の調査
2003. 12. 10-12. 12 韓国で国立博物館の施設・所蔵資料等の調査
2003. 12. 23-12. 28 フランスで新石器時代～初期鉄器時代の遺物の調査
2004. 1. 9-1. 12 韓国で青銅器儀器化過程の調査

## ＜研究業績＞

### 原著論文

- (1) 岩永省三 2004. 考古学から見た青銅器の科学分析. 科学が解き明かす古代の歴史. クバプロ, 東京, pp. 110～119
- (2) 岩永省三 2003. 武器形青銅器の型式学. 考古資料大観, 第6巻, 小学館, 東京, pp. 242-252.
- (3) 岩永省三 2003. 頭塔の系譜と造立事情. 論集 東大寺の歴史と教学, 東大寺, 奈良, pp. 78-99.
- (4) 岩永省三 2003. 古墳時代親族構造論と古代国家形成過程. 九大博研報, (1), 福岡, pp. 1-39.
- (5) 岩永省三 2002. 奈良時代庭園の造形意匠. 古代庭園の思想—神仙世界への憧憬. 角川書店, 東京, pp. 93-131.
- (6) 岩永省三 2002. 行基と頭塔に接点はあるか. 行基の考古学, 塙書房, 東京, pp. 21-34.
- (7) 岩永省三 2002. 青銅武器儀器化の比較研究-韓と倭-. 韓半島考古学論叢, すずさわ書店, 東京, pp. 203-234.
- (8) 岩永省三 2002. 階級社会への道への路. 古代を考える 稲・金属・戦争, 吉川弘文館, 東京, pp. 261-282.
- (9) 岩永省三 2001. 考古学から見た青銅器の科学分析. 考古学ジャーナル, 470: 18-21.
- (10) 岩永省三 2000. 青銅武器儀器化の比較研究-韓と倭-. 考古学から見た弁・辰韓と倭, 九州考古学会・嶺南考古学会, pp. 109-127.
- (11) 岩永省三 2000. 青銅武器儀器化の比較研究-韓国と日本-. 日韓古代における埋葬法の比較研究, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 4-21.

### 調査報告等

- (1) 岩永省三 2004. 調査に至る経緯. 大分県・坊主山遺跡出土銅矛. 福岡県・住吉神社所蔵銅矛. 銅戈の同範関係. 青銅器の同範関係調査報告書(武器形青銅器). 島根県古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター, 松江, pp. 1-2, 13-14, 44-49,

55-59.

- (2) 岩永省三 2002. 木製品. 山田寺発掘調査報告, 奈良文化財研究所, 奈良, pp. 358-369.
- (3) 岩永省三 2001. 第IV章 遺構1・2・3. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 28-65.
- (4) 岩永省三 2001. 六角屋蓋石塔. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 93.
- (5) 岩永省三 2001. 瓦磚類. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 68-75.

## その他

- (1) 岩永省三 2004. 周辺における国家形成, 親族と儀礼. シンポジウム東アジア社会の基層予稿集, pp. 32-34.
- (2) 岩永省三 2003. 考古学者から見た弥生青銅器の科学分析. 第18回大学と科学公開シンポジウム予稿集 科学が解き明かす古代の歴史- 新世紀の考古科学-, pp. 38-39.
- (3) 岩永省三 2002. 再考考古学 中 弥生に都市はあったか. 2002年11月22日付け『毎日新聞』文化欄.
- (4) 岩永省三ほか 2002. 座談会 都市の起源(月)東・東南・南アジア地域 都市の王権と宇宙論. 建築雑誌, 117(1488): 19-25.
- (5) 岩永省三 2002. 鑄掛け、石鍋、印、戈、階級・階層、蓋弓帽、開通元宝・開元通宝、貝輪、貨泉、家族、貨布、金印、国・国家、交換・交易、神籠石論争、氏族・部族・種族・民族、珥瑱、車輿具、小銅鐸、生産、石人石馬、舌、石戈、石劍、塞杆、鐸、多鈕細文鏡、鈕、朝鮮式山城、把頭飾、角形銅器、鉄戈、鉄鐸、鉄矛、伝世、銅戈、銅劍、銅鐸、銅鐸形土製品、銅矛、巴形銅器、武器形祭器、分業・専業、矛、無文土器、明刀錢. 三省堂考古学事典, 三省堂, 東京.
- (6) 岩永省三 2001. 考察 凝灰岩製六角屋蓋石塔の復原. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 174-181.
- (7) 岩永省三 2001. 考察 仏塔としての頭塔の系譜. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 164-173.
- (8) 岩永省三 2001. 考察 頭塔造立の構想と事情. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 155-163.
- (9) 岩永省三 2001. 考察 屋瓦. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 126-140.
- (10) 岩永省三 2001. 考察 頭塔の構造と復原. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 111-121.
- (11) 岩永省三 2001. 遺構変遷と年代. 史跡頭塔発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 107-110.
- (12) 岩永省三 2000. 青銅器祭祀の終わり. 古墳発生期前後の社会像, 九州古文化研究

会, 北九州, pp. 123-134.

(13) 岩永省三 2000. 武器形祭器の諸問題. 信仰遺跡調査課程, 奈良国立文化財研究所, 奈良, pp. 20-43.

(14) 岩永省三 2000. 弥生時代の型-銅製品. 型からひもとく歴史像-弥生・古墳・歴史, 泉南市教育委員会, 泉南, pp. 2-25.

#### <講演等>

(1) 岩永省三

2004年1月

九州大学21世紀COEプログラム 東アジアと日本：交流と変容シンポジウム『東アジア社会の基層』

講演題目「周辺における国家形成, 親族と儀礼」

(2) 岩永省三

2004年7月

國學院大學 21COE考古学・神道ミニ・シンポジウム 日本列島における青銅器祭祀

講演題目「武器形青銅器祭祀の展開と終焉」

(3) 岩永省三

2004年10月

明治大学による文部科学省・学術フロンティア推進事業『日本古代における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究』

講演題目「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」

(4) 岩永省三

2004年11月

第19回国民文化祭・ふくおか2004春日市主催事業『シンポジウム邪馬台国時代の「奴国！」』

講演題目「青銅器の生産と流通」

(5) 岩永省三

2004年12月

平成16年度大野城市教育委員会文化財講演会

講演題目「青銅器の謎を探る」

中牟田 義博 (なかむた よしひろ)

Yoshihiro NAKAMUTA

### <研究の紹介>

研究業績に示すように、これまで、粘土鉱物と沸石の結晶化学的研究、X線粉末法による鉱物組成の定量法の開発、湖底堆積物の鉱物組成から見た古環境の研究、X線粉末法による極微小結晶の精密解析法の開発などを行ってきた。この中、粉末X線回折法による極微小結晶の精密解析法の開発は世界に先駆けて行ったもので、10~100  $\mu\text{m}$ 大 (十数 $\mu\text{g}$ )の試料から粉末X線回折計 (ディフラクトメータ) に匹敵する精度の粉末X線回折データを得ることができる。本手法の応用範囲は広く、現在、本手法を用いた以下のような研究を行っている。

- (1) 隕石中に含まれる長石の結晶構造から隕石の生成温度を推定し、それを基に太陽系形成初期における惑星の進化過程を明らかにする。
- (2) 隕石中に含まれる炭素鉱物の構造を明らかにすることにより、隕石中に生成したダイヤモンドの生成メカニズムや生成条件を解明する。
- (3) 惑星形成期に盛んに起こったと考えられる惑星同士の衝突の強さを、隕石中のかんらん石の格子歪みから定量的に評価する手法を確立し、惑星の衝突が惑星進化に及ぼした役割を解明する。
- (4) 装飾古墳などの考古遺跡に使用されている鉱物顔料の性質を明らかにし、各遺跡間の比較を行うことにより古代における顔料の交易ルートなどを解明する。本研究は考古の専門家との共同研究として行っているものである。

### <所属学会>

日本鉱物学会 (1992-2003年度：編集委員、2002-2004年度：評議員)、日本結晶学会  
アメリカ鉱物学会、国際隕石学会、日本粘土学会

### <研究資金>

- (1) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト (2001-2003年度：分担) アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究
- (2) 基盤研究(C) (2004年度：代表)

### <学外委員等>

1995年6月~2001年3月 長崎県客員研究員 (長崎県窯業技術センター)  
日本鉱物学会評議員

### <研究業績>

口頭およびポスター発表

- (1) Nakamuta, Y. and Aoki, Y. 2000. Formation mechanism of diamond in ureilites. The 25<sup>th</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- (2) Murae, T. and Nakamuta, Y. 2000. Investigation of distribution pattern of carbonaceous matter in Kenna meteorite using laser Raman microscope. The 25<sup>th</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- (3) 中牟田義博・青木義和 2000. ユレイライト隕石中のダイヤモンドの生成メカニズム. 日本鉱物学会2000年度年会, 徳島.
- (4) Nakamuta, Y and Aoki, Y. 2001. Catalytic high-pressure formation of diamond in ureilites. The 64<sup>th</sup> Annual Meeting of the Meteoritical Society, Vatican City.
- (5) Takeda, H., Ishii, T., Otsuki, M., Nakamuta, Y. and Nakamura, T. 2001. Mineralogy of a new weakly shocked ureilites. The 64<sup>th</sup> Annual Meeting of the Meteoritical Society, Vatican City.
- (6) Nakamuta, Y., Nakamura, T. and Nakamura, N. 2001. Metamorphic temperature of Kobe meteorite estimated by the plagioclase thermometer. The 26<sup>th</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- (7) 中牟田義博・三木孝・朽津信明2001. 極微量試料を用いたX線回折の考古学への応用 - 装飾古墳中の緑色顔料の鉱物組成 - . 日本鉱物学会2001年度年会, 秋田.
- (8) Nakamuta, Y., Aoki, Y. and Kojima, H. 2002. Classification of ureilites based on characteristics of carbon minerals. The 27<sup>th</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- (9) 中牟田義博・青木義和・小島秀康 2002. ユレイライト隕石中のダイヤモンドの生成メカニズムと生成条件. 日本鉱物学会2001年度年会, 大阪.
- (10) 原口真由・中牟田義博・青木義和 2002. Zagami隕石中のmaskelyniteの化学組成. 日本岩石鉱物鉱床学会2002年度学術講演会, 大阪.
- (11) Nakamuta, Y. and Motomura, Y. 2003. Plagioclase thermometry of chondrites based on a precise X-ray powder diffraction analysis by using a Gandolfi camera. 18<sup>th</sup> General Meeting of the International Mineralogical Association, Scotland.
- (12) Yoshida, K. and Nakamuta, Y., Nakamura, T. and Sekine, T. 2003. The lattice strain of olivine in experimentally shocked chondrites. The 64<sup>th</sup> Annual Meeting of the Meteoritical Society, Munster.
- (13) 中牟田義博・山田真也・吉田憲悟 2003. Estimation of shock pressure experienced by ordinary chondrites with an X-ray diffraction. 地球惑星科学関連学会2003年合同大会, 千葉.
- (14) 中牟田義博 2003. ガンドルフィカメラを用いたコンドライト隕石中かんらん石の格子歪みの測定. 日本鉱物学会2003年度年会, 仙台.
- (15) 間嶋寛紀・赤井純治・茅原一也・中牟田義博・松原聡 2003. 新潟県青海町橋立より産出した蓮華石の斜方晶系多形. 日本鉱物学会2003年度年会, 仙台.
- (16) Nakamuta, Y. 2004. Morphologies of graphite in ureilites: Implications for the

- petrogenesis of ureilites. The 28<sup>th</sup> Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo.
- (17) 原口真由・中牟田義博・山口亮・関根利守 2004. Zagami火星隕石中のmaskelynite : 衝撃斜長石との比較. 地球惑星科学関連学会2004年合同大会, 千葉.
- (18) 中牟田義博 2004. ユレイライト隕石中のグラファイトの形態解析. 日本鉱物学会 2004年度年会, 岡山.
- (19) 赤井純治・中牟田義博 2004. ユレイライト中のダイヤモンド, グラファイト, コンプレストグラファイトの相互関係のHRTEM観察. 日本鉱物学会2004年度年会, 岡山.
- (20) 青木大空・川辺和幸・中牟田義博 2004. コンドライトの破碎部と非破碎部での衝撃圧の比較. 日本鉱物学会2004年度年会, 岡山.
- (21) 別府優篤・中牟田義博・中村智樹・関根利守 2004. カンラン石結晶の衝撃実験による格子歪みの検討: とくに衝撃継続時間の効果について. 日本鉱物学会2004年度年会, 岡山.

#### 原著論文

- (1) 朽津信明・中牟田義博・三木孝 2004. 日本における緑色顔料「緑土」の使用について. 考古学と自然科学, (46): 55-66.
- (2) Y. Takechi, I. Kusachi, Y. Nakamuta and K. Kase 2003. Talnakhite associated with andradite skarn at Fuka, Okayama Prefecture, Japan. Resource Geology, **53**: 227-232.
- (3) Y. Nakamuta, T. Nakamura and T. Sekine 2003. The lattice strain of olivine in experimentally shocked chondrites. Meteoritics & Planet. Sci., **38**: A29.
- (4) 中牟田義博・三木孝・朽津信明 2002. ガンドルフィカメラによる装飾古墳緑色顔料の検討. 岩石鉱物科学, **31**: 330-333.
- (5) Y. Nakamuta and Y. Aoki 2001. Catalytic high pressure formation of diamond in ureilites. Meteoritics & Planet. Sci., **36**, A146.
- (6) Nakamura T., Noguchi T., Yada T., Nakamuta Y. and Takaoka N. 2001. Bulk mineralogy of individual micrometeorites determined by X-ray diffraction analysis and transmission electron microscopy. Geochim. Cosmochim. Acta, **65**: 4385-4397.
- (7) Nakamuta Y. and Aoki Y. 2000. Mineralogical evidence for the origin of diamond in ureilites. Meteoritics & Planet. Sci., **35**: 487-493.

#### 著書

- (1) 中牟田義博 2002. ガンドルフィカメラはこんなに便利. *In* 粉末X線解析の実際 (中井泉・泉富士夫編著), 朝倉書店.

松隈 明彦 (まつくま あきひこ)

Akihiko MATSUKUMA

### <研究の紹介>

近年、古生物学においては化石生物の種を個体変異を伴う多様性のある個体で構成される交配集団と捉え、形態や、習性、生活様式の多様性の表われるメカニズムと進化上の意義を議論する研究が急速に勢力をましてきた。これまで一貫して化石を地質時代に生きた生物として取り扱う生物学的古生物学(Paleobiology)、特に化石および現生生物の形態、構造、習性の多様性と進化パターンの研究に携わり、個体群中の量的変異の客観的表現方法に関する研究、軟体動物門二枚貝綱の多様性、種分化の様式と要因、生物地理に関する研究、インド-太平洋の新生代軟体動物相の起源に関する研究、生痕化石に関する研究、化石を用いた遺伝的多型現象の研究等を行って来た。これらの研究とともに、化石化に伴う軟体動物の硬質部の色素の変化と古生物学への応用、靱帯の組成・構造に基づく二枚貝綱の系統の推定等の研究を推進している。

### <所属学会>

日本貝類学会, 日本古生物学会, 日本地質学会

日本ベントス学会

Western Society of Malacologists (アメリカ)

### <学外委員等>

日本貝類学会 (評議員1992. 1. 1-、編集委員1992. 1. 1-2002. 12. 31、副会長2001. 1. 1-2002. 12. 31, 2003. 1. 1-2004. 12. 31, 2005. 1. 1-2006. 12. 31)

福岡県糸島郡二丈町町誌編集委員会 (2003-2005: 副委員長)

The Yuriyagai (編集委員1998-)

Zoosystema (フランス: 評議員1998-、編集委員1998-)

The Bulletin of the Russian Far East Malacological Society (編集委員2003-)

### <海外渡航>

2001. 1. 11. -1. 31 タイ (二枚貝分類学講座、日本学術振興会)

2001. 7. 1-8. 31 Museum National d'Histoire Naturelle, Paris (インド-西太平洋産二枚貝の分類学的研究、フランス政府招聘教授)

2002. 7. 1-8. 31 Museum National d'Histoire Naturelle, Paris (インド-西太平洋産二枚貝の分類学的研究、フランス政府招聘教授)

2002. 12. 21-12. 28 タイ (海洋生物学研究センター標本調査, 京都大学)

2003. 12. 21-12. 28 タイ (海洋生物学研究センター標本調査, 委任経理金)

2005. 2. 12-2. 17 タイ カセツアート大学水産学部 (分類学研究者、施設、設備、標本調査、京都大学委託研究)



## ＜研究資金＞

- (1) 委任経理金「海洋生物研究資金」株式会社ティーティーシー（東京）2000-2003年度 各年度50-80万円
- (2) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト（2001-2003年度：代表）「アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究」
- (3) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト（2004年度-：分担） 生物多様性の保全と進化に関する研究拠点形成。

## ＜研究業績＞

### 口頭およびポスター発表

- (1) 松隈明彦（2002.1.27）. 二枚貝に見られる多型、特にニッコウガイ科殻後端の屈曲の左右性. 日本古生物学会第151回例会, 鹿児島大学.
- (2) 亀山宗彦・下山正一・松隈明彦（2002.1.27）. 鹿児島県新島（燃島）の燃島貝層の貝化石群集について1-新島の層序と燃島貝層の群集古生態. 日本古生物学会第151回例会, 鹿児島大学.
- (3) 松隈明彦（2002.2.9）. インド洋-西太平洋産チヂミヒメザラガイ属（ニッコウガイ科）の再検討. 日本貝類学会2002年度年会, 西宮市貝類館.
- (4) 渡辺紀子・松隈明彦（2002.2.9）. 紫外線による軟体動物化石の色模様の可視化. 日本貝類学会2002年度年会, 西宮市貝類館.
- (5) 松隈明彦（2003.2.1）. インド-西太平洋産トゲウネガイ属（ニッコウガイ科）. 日本貝類学会2003年度年会, 豊橋市立自然史博物館.
- (6) 吉田恭子・松隈明彦（2003.2.1）. *Noetia ponderosa*（二枚貝綱：翼形亜綱）の“多韧带”について. 日本貝類学会2003年度年会, 豊橋市立自然史博物館.
- (7) 盛実美佳・松隈明彦（2003.2.1）. 軟体動物の殻における蛍光色の物理的性質. 日本貝類学会2003年度年会, 豊橋市立自然史博物館.
- (8) 松隈明彦（2003.8.2）. 二枚貝貝殻における逆転について. 日本進化学会, 九州大学, 福岡.
- (9) Matsukuma, A. (2003.9.15). Inversion of bivalves. Bivalve Meeting in Honour of Prof. Brian Morton. Cambridge University, Cambridge, UK.

### 原著論文

- (1) 小菅丈治・木曾克裕・松隈明彦 2004. 八重山諸島近海で漁獲されたフエフキダイ科魚類の消化管内より見いだされたハブタエアシガイ. 沖縄生物学会誌, (42): 1-5.
- (2) Vongpanich, V. & Matsukuma, A. 2004. Family Noetiidae in Thailand. Res. Bull. Phuket Mar. Biol. Cent., 65: 31-44.
- (3) Matsukuma, A., 2004. 77 Additional marine bivalve species from Wakayama Prefecture - a Supplement to A Catalogue of Molluscs of Wakayama Prefecture, the

- Province of Kii by T. Habe. Publ. Seto Mar. Biol. Lab. Spec. Publ. Ser., 7: 9-51, pls. 2-8.
- (4) 松隈明彦 2003. インド-西大平洋産トゲウネガイ属(ニッコウガイ科). ひたちおび, (91): 6-10.
- (5) Matsukuma, A., Paulay, G. & Hamada, N. 2003. *Chama cerion* n. sp., a new chamid bivalve (Mollusca) from the Indo-Pacific Ocean. *Venus*, 62(2): 19-27.
- (6) Tuaycharoen, S. & Matsukuma, A. 2001. Razor clams (Bivalvia: Solenidae) from the east and west coasts of Thailand. Proceedings of the 11th International Tropical Marine Molluscs Program 28 Sept.-08 Oct. 2000, Tamilnadu, India; Bull. Phuket Mar. Biol. Center, 25(2): 377-386.
- (7) Yoosukh, W. & Matsukuma, A. 2001. Taxonomic study on *Meretrix* (Mollusca: Bivalvia) from Thailand. Proceedings of the 11th International Tropical Marine Molluscs Program 28 Sept.-08 Oct. 2000, Tamilnadu, India; Bull. Phuket Mar. Biol. Center, Spec. Publ., 25(2): 451-460, pls. 1-5.
- (8) 松隈明彦 2001. 日本産バカガイ科数種の命名者について. ちりぼたん, 32(1-2): 5-9.

## 総 説

- (1) 松隈明彦 2002. 脅かされるパラダイス. *ダジアン*, (41): 29.

## 要旨・報告書

- (1) 松隈明彦・浜田直人・Gustav Paulay 2001. 太平洋産キクザルガイ科二枚貝の2新種. *Venus*, 60(1-2): 109.
- (2) 松隈明彦・澄川精吾・本多庚午 2000. 福岡県希少野性生物調査(陸淡水貝類). *Venus*, 59(1): 61.

## 著 書

- (1) 松隈明彦・木下尚子・濱田直人 2003. 第13節 アバクチ洞穴の貝珠. In 百々幸雄・瀧川渉・澤田純明(編): 北上山地に日本更新世人類化石を探る - 岩手県大迫町アバクチ・風穴洞穴遺跡の発掘 -, pp. 252-264, 東北大学出版会.
- (2) 松隈明彦 2001. 福岡県の自然 (1) 地形と地質、陸・淡水産貝類. In 福岡県環境部 自然環境課: 福岡県の希少野性生物 - 福岡県レッドデータブック2001, 口絵 xiii-xiv, pp. 12-14, 396-419.
- (3) 松隈明彦 2000. 二枚貝綱翼形亜綱(シラスナガイモドキ科, イガイ科, ウグイスガイ目, ミノガイ目、カキ目を除く), 異歯亜綱(ケシハマグリ科、オオノガイ目を除く), In 奥谷喬司(編): 日本近海産貝類図鑑, pp. 844-861, 928-997, 1000-1019, 東海大学出版会, 東京.

<講演>

(1) 松隈明彦

2004年3月27日

九大・糸島会「地域資源再発見塾・地域のための大学博物館講座」、前原市中央公民館

講演題目：陸に住む貝を探そう

(2) 松隈明彦

2003年1月26日

九大・糸島会「地域資源再発見塾」講演会、前原市伊都文化会館

講演題目：糸島の自然-絶滅に瀕している貝類たち

## 中西 哲也 (なかにし てつや)

Tetsuya NAKANISHI

### <研究の紹介>

微量元素を分析する技術は、地球化学的試料を取り扱う際に必要不可欠な技術である。私の研究では特に誘導プラズマ質量分析装置 (ICP-MS) を用いて、岩石中のppbレベルの微量金の分析法を確立してきた。現在はこの手法を用いて、温泉型金鉱床 (浅熱水性金鉱床) の地表に形成される珪質沈殿物 (シリカシンター) 中の微量金を分析し、地下における金鉱化作用との関わりを調べている。国内に産する主なシリカシンターや米国イエローストーンの他、オーストラリア、フィリピン、カムチャッカなどで試料の採取を行ってきた。

この他に最近では文部省特定領域研究「江戸のモノづくり」の計画研究班として「日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成」の研究を進めている。具体的には、日本各地に点在する鉱山技術関連の古文書や道具の所在調査を行うと共に、古文書に記述されている技術と実際に使われた技術の対比や、鉱床学的な立場から江戸時代の鉱山の技術レベルの検証を行っていく。特に当時採掘の対象であった鉱石と様々な金属 (金・銀・銅・鉛・鉄) を取り出すための製錬の技術を、記録に頼るだけでなく、実際の鉱石や鉱滓・廃滓の分析を行うことで、科学的に検証を行っている。

### <所属学会>

資源地質学会 (2002-2004年度: 評議員)、日本鉱業史研究会

### <研究資金>

- (1) 特定領域研究(A) (2002-2005年度: 代表) 日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成
- (2) NEDO産業技術研究助成事業費助成金 (2001-2002年度: 分担) 新しい減容成形機を用いた廃自動車シュレッダーダストの固形燃料製造システムの開発
- (3) 基盤研究(A)(2) (1998-2001年度: 分担) シリカと微生物を用いた地球表層水中のアルミニウムの制御に関する研究
- (4) 基盤研究(A)(2) (1998-2001年度: 分担) マグマ熱水系の鉱化ポテンシャル評価に関する研究

### <研究業績>

#### 口頭およびポスター発表

- (1) T. Nakanishi, Y. Yamashita, K. Watanabe, and E. Izawa 2001. Is sinter an indicator of gold mineralization? International Symposium on Gold and Hydrothermal Systems.
- (2) 中西哲也、渡辺公一郎、井澤英二 2002. 星野シンターに見られるバクテリア構造の特徴とその分布. 資源地質学会第52回年会講演会 (ポスターセッション).
- (3) T. Nakanishi, E. Izawa and K. Watanabe 2003. Mineralogical and Geochemical

characteristics of Siliceous Sinter in Japan. The 25th New Zealand Geothermal Workshop.

- (4) 中西哲也・井澤英二・吉川竜太 2003. 蛍光X線分析法による銅鉱石と製錬滓の分析-長登銅山と都茂丸山銅山の例-. 江戸のモノ作り第3回国際シンポジウム.
- (5) 井澤英二、中西哲也、吉川竜太 2003. 山口県長登銅山地域の地質と鉱床：特に硫化銅鉱と炭酸銅鉱の関係について. 資源・素材学会2003秋季大会（鉱業史）.
- (6) 中西哲也、井澤英二、宮崎克則 2003. 日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成. 江戸のモノづくり研究者集会.
- (7) 中西哲也、ベルハディ・アハマド、渡辺公一郎、井澤英二 2003. シリカシンター中の金の含有率について-金鉱化作用との関係-. 資源地質学会第53回年会講演会.
- (8) 中西哲也、吉川竜太、井澤英二、河合潤、鈴木眞夫、瀬川孝夫 2004. ポータブル蛍光X線分析装置による鉱業史関連試料の現場分析. 資源・素材学会2004秋季大会（鉱業史）.
- (9) 吉川竜太、本村慶信、中西哲也、井澤英二 2004. 長登銅山の古代スラグに含まれるマトの構成相と起源. 資源・素材学会2004秋季大会（鉱業史）.
- (10) 吉川竜太、本村慶信、中西哲也、井澤英二 2004. 奈良時代の長登銅山製錬スラグに産するCu-Fe-S系相について. 資源地質学会第54回年会講演会.

#### 原著論文

- (1) T. Yokoyama, S. Taguchi, Y. Motomura, K. Watanabe, T. Nakanishi, Y. Aramaki and E. Izawa 2004. The effect of aluminum on the biodeposition of silica in hot spring water: Chemical state of aluminum in Siliceous deposits collected along the hot spring water stream of Steep Cone hot spring in Yellowstone National Park, USA. *Chemical Geology*, **212**, 329-337.
- (2) 中西哲也、吉川竜太、井澤英二 2004. 蛍光X線分析法の製錬滓試料への適用. 九州大学総合研究博物館研究報告, (2): 149-156.
- (3) 中西哲也、吉川竜太、井澤英二、河合潤、鈴木眞夫、瀬川孝夫 2004. ポータブル蛍光X線分析装置による鉱業史関連試料の現場分析. 資源・素材学会2004秋季大会予稿集（鉱業史）：5-8.
- (4) 吉川竜太、本村慶信、中西哲也、井澤英二 2004. 長登銅山の古代スラグに含まれるマトの構成相と起源. 資源・素材学会2004秋季大会予稿集（鉱業史）：1-4.
- (5) Nakanishi, T., Izawa, E. & Watanabe, K. 2003. Mineralogical and Geochemical characteristics of Siliceous Sinter in Japan. *Proceedings of The 25th New Zealand Geothermal Workshop*: 155-160.
- (6) 中西哲也・井澤英二・吉川竜太 2003. 蛍光X線分析法による銅鉱石と製錬滓の分析-長登銅山と都茂丸山銅山の例-, 江戸のモノ作り第3回国際シンポジウム(長浜)予稿集, pp. 121-124.
- (7) 井澤英二・中西哲也・吉川竜太, 2003. 山口県長登銅山地域の地質と鉱床：特に硫化銅鉱と炭酸銅鉱の関係について. 資源・素材2003(宇部)予稿集(鉱業史): 7-10.

- (8) Belhadi, A., Nakanishi, T., Watanabe, K. & Izawa, E. 2002. Gold mineralization and occurrence of sinter in the Hoshino area, Fukuoka Prefecture, Japan. *Resource Geology*, **52**(4): 371-380.
- (9) Nakanishi, T., Taguchi, S., Watanabe, K. & Izawa, E. 2001. Occurrence and Structure of the Ikiryu Sinter, Kuju Volcanic Region, North-Central Kyushu, Japan. *Society of Economic Geologists Guidebook Series*, **34**: 181-186.
- (10) T. Nakanishi, Y. Yamashita, K. Watanabe, and E. Izawa 2001. Is sinter an indicator of gold mieralization ? *Proceedings of International Symposium on Gold and Hydrothermal Systems*: 159-164.

## 宮崎 克則 (みやざき かつのり)

Katsunori MIYAZAKI

### <研究の紹介>

江戸時代の日本史を専門とする。文献史料・口頭伝承・記念碑などを利用し、近世日本における民衆社会（祭礼・生活・運動）を研究する。最近は日本のみならず、イギリス・フランスとも比較し、前近代における民衆世界を再検討する。また、研究の基礎となる記録史料をはじめ、植物・昆虫・岩石などの標本目録データの検索システムを開発している。

### <所属学会>

日本歴史学会、日本史研究会、明治維新史学会、九州史学研究会

### <研究資金>

- (1) 特定領域研究(A) (2002-2005年度：分担)「日本の鉱山技術資料の総合的調査と総合目録の作成」
- (2) 基盤研究(C)(2) (1999-2001年度：分担)「近世、西国における在郷商人に関する総合研究」
- (3) 基盤研究(C)(2) (1997-2001年度：代表)「祭礼にみる幕末維新期の民衆像」
- (4) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト (2001-2003年度：分担)「アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究」

### <学外委員等>

- (1) 国文学研究資料館史料館 客員助教授  
2003年4月1日～2004年3月31日
- (2) 白杵市近世古地図調査指導委員  
2002年7月1日～2006年6月30日

### <研究業績>

#### 口頭およびポスター発表

- (1) 宮崎克則 2002. The Conscript Farmer Organization in Bakumatsu Period Japan. 第54回 Association for Asian Studies(全米アジア学会), 米国 ワシントンDC.
- (2) 宮崎克則 2002. 記録史料のデジタル化について. 第36回福岡県地方史研究協議会, 福岡県立図書館.

#### 原著論文

- (1) 宮崎克則 2004. シーボルト' NIPPON' の書誌学研究. 九大博研報, (2): 1-32.
- (2) 宮崎克則 2002. 会議を開く庄屋たち. 九州史学, (130): 1-15.

- (3) 宮崎克則 2001. 豪商石本家と人吉藩の取引関係. 九州文化史研究所紀要, (45): 1-52.

## 著 書

- (1) 宮崎克則 2002. 逃げる百姓、追う大名. 中央公論新社, pp. 1-212.

## 自治体史

- (1) 宮崎克則 2001. 新版 鎮西町史, 上巻 佐賀県東松浦郡鎮西町発行. pp. 583-793.  
(2) 宮崎克則 2001. 川崎町史, 上巻. 福岡県田川郡川崎町, pp. 261-304, 408-434.

## 報 告 (史料目録・史料集)

- (1) 宮崎克則 2002. 九大が所蔵する記録史料の状態と活用1-竹田文庫. 図書館情報, (38-1): 3-4.  
(2) 宮崎克則 2002. 九大が所蔵する記録史料の状態と活用2-シーボルト『日本』その1. 図書館情報, (38-2): 3-4.  
(3) 宮崎克則 2002. 玄海町文化財調査報告書9集 松隈家文書目録. 佐賀県東松浦郡玄海町教育委員会, pp. 1-151.  
(4) 宮崎克則 2000. 寛政5年～文政4年 久留米藩大庄屋会議録. 九州文化史研究所史料集刊行会, pp. 1-248.  
(5) 宮崎克則 2001. 玄海町文化財調査報告書8集 山村家文書目録. 佐賀県東松浦郡玄海町教育委員会, pp. 1-20.  
(6) 宮崎克則 2000. 福岡藩糟屋郡 大庄屋留書. 九州文化史研究所史料集刊行会, pp. 1-251.

## <講演>

- (1) 宮崎克則

2002年11月2日

特別記念講演: 走り者とは何者かー 逃げる百姓と追う大名ー

会場・主催 大分県立図書館

- (2) 宮崎克則

2002年11月9日

九州大学公開講座「古地図の世界 -日本・アジア・世界-

講演題目: 古地図のなかの日本・九州 そしてアジア

会場・主催 文系研究棟2階会議室・文学部

- (3) 宮崎克則

2002年11月30日

九州大学公開シンポジウム「人類の遺産ー文書・記録の保存と活用ー」

講演題目: 九州大学デジタル・アーカイブス

会場・主催 天神ビル5F・石炭研究資料センター



(4) 宮崎克則

2003年3月20日

記念講演会

講演題目：江戸初期の小倉藩

会場・主催 福岡県行橋市公民館・美夜古郷土史会

(5) 宮崎克則

2004年5月15日

第45回附属図書館貴重文物展示 記念公開講演

講演題目「再発見 シーボルト『NIPPON』」

会場・主催 九州大学附属図書

(6) 宮崎克則

2004年6月5日

文学部公開講座

講演題目「福岡・博多の古地図を読む」

会場・主催 文系研究棟2階会議室・文学部

## 小島 弘昭 (こじま ひろあき)

Hiroaki KOJIMA

### <研究の紹介>

生物界で最大の分類単位と言われるゾウムシ科を含むゾウムシ上科を材料に、分類をベースとした総合的自然史研究を行っている。現在知られているだけでも6万種、推定種数は少なく見積もって20万種以上とも言われる膨大な種数を含むゾウムシ類についてイギリス、ドイツ、カナダ、アメリカ、オーストラリアなど世界各地の研究者と連携し、世界のゾウムシ相を解明しようという21世紀の多様性生物学、あるいは分類学最大のチャレンジテーマに取り組んでいる。私の担当は、主にアジア-太平洋地域であるが、高次レベルでの関係を調べる際などは世界的視野に立った材料の検討も行っている。また、ゾウムシ類は植食性の甲虫で、植物と密接に関係しながら進化してきたグループで、ゾウムシ-植物の相互関係にも深い関心を持ちつつ研究を進めている。

アジア地域の材料を主に研究していることと、大きな分類群を扱っていることから日華系生物群の起源や林冠昆虫相の多様性にも興味を持っており、とくに林冠研究については昆虫相解明に向けたプロジェクトを近年スタートさせた。

大学博物館では情報関連の研究系に所属しており、研究のサブワークとしてデータベース化などにも取り組んでいる。また、これまでの分類学の成果は特定の研究者以外には使いつらいという話も聞かれるの、近年の情報関係の技術を導入し、誰にでも使い易い分類学的業績の出版形態なども模索中である。

### <所属学会>

日本昆虫学会 (編集委員2002-)、日本鞘翅学会 (非常任幹事2002-)

日本ゾウムシ情報ネットワーク (幹事2002-)、The Coleopterists Society (USA)

### <研究資金> (代表研究のみ)

- (1) 科学研究費若手研究B (2001-2002年度: 代表) 高等ゾウムシの系統進化と被子植物との関係
- (2) (財)九州大学後援会研究助成 (2003年度: 代表) 日本における樹冠部昆虫相研究の開拓と多様性保全生物学への活用
- (3) 日本学術振興会熱帯生物資源研究基金 (2004年度: 代表) ヤシ類の害虫や益虫となるゾウムシの分類と生態
- (4) 科学研究費若手研究B (2004-2006年度: 代表) 国内における林冠昆虫相研究の展開: 植食性甲虫類の多様性と寄主特異性

### <学外委員等>

日本昆虫学会編集委員

日本鞘翅学会非常任幹事

昆虫分類学若手懇談会幹事

日本ゾウムシ情報ネットワーク幹事

World Information Network on Weevils, アジアー太平洋地区委員

「ESAKIA」(九大農学研究院昆虫学教室発行英文雑誌) 編集委員

## <研究業績>

### 口頭発表

- (1) Kojima, H. 2000. Phylogeny and evolution of Dryophthoridae (Coleoptera: Curculionoidea). 21th International Congress of Entomology, Iguassu-Brazil.
- (2) Kojima, H. & C.H.C.Lyal 2000. On the genera of the Oriental and Australian Conoderinae (Coleoptera: Curculionidae). 21th International Congress of Entomology, Iguassu-Brazil.
- (3) 小島 弘昭 2000. 海外の昆虫学関連の研究機関を訪問して-オーストラリアCSIRO研究所を中心に-. 日本昆虫学会九州支部大会特別講演, 長崎大学.
- (4) 小島 弘昭 2001. ヤシ・バナナなどの害虫を含むオサゾウムシ科甲虫の系統と高次分類. 日本応用動物昆虫学会第45回大会, 島根大学.
- (5) 小島 弘昭 2001. オサゾウムシの系統進化. 日本昆虫学会第61回大会, 東北大学.
- (6) 小島 弘昭 2001. 大学博物館と分類学. 昆虫分類学若手懇談会, 東北大学.
- (7) 小島 弘昭 2001. 黒潮型分布について. 日本鞘翅学会第14回大会, 東京農業大学.
- (8) 小島 弘昭 2002. 南ゴンドワナ系分類群Eugnominaeの東洋区からの発見 (甲虫目: ゾウムシ科). 日本昆虫学会第62回大会, 富山大学.
- (9) 小島 弘昭 2002. *Pinacopus*属について (甲虫目: ゾウムシ科). '02 Japan Coleopterists' Meeting, 大阪自然史博物館.
- (10) 小島 弘昭 2002. ゾウムシ類の多様性: 植物との出会いと口吻の進化. 第6回北海道大学総合博物館公開シンポジウム.
- (11) Kojima, H. 2003. Present and future of insect systematics in Asia. Korea-Japan joint conference on applied entomology and zoology, 2003, Busan, Korea.
- (12) 小島弘昭, 2003. ゾウムシ上科の高次分類に関する近年の動向. 日本鞘翅学会第16回大会公開シンポジウム, 九州大学.
- (13) Kojima, H. 2004. Weevil fauna of the tropical Asia - Many species, few ancient families. TAIIV symposium, Kyushu University, Fukuoka.
- (14) 小島弘昭, Idris, A. G. 2004. アジア産ヤシ類の訪化性ゾウムシ類について. 日本鞘翅学会第17回大会, 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- (15) 小島弘昭2004. アジアの昆虫地理概説. 昆虫分類学若手懇談会シンポジウム, 北海道大学.
- (16) 小島弘昭・吉原一美 2004. 日本産ヒメゾウムシ亜科の分類. 日本昆虫学会第64回大会, 北海道大学.

## 原著論文

- (1) Kojima, H. & Idris, A. B. 2005. *Cotasteromorphus*, a new genus of Cotasteromimina (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae, Pissodini) from the Malaysian Moss Forests. *Elytra*, **33**. (in press)
- (2) Morimoto, K. & H. Kojima 2005. Three additional species of Brentidae to the fauna of Japan (Coleoptera, Curculionoidea). *Elytra*, **33**. (in press)
- (3) Kojima, H. & K. Morimoto 2005. Weevils of the tribe Acalyptini: redefinition and a taxonomic treatment of Japanese, Korean and Taiwanese species. *Esakia*, (35) (in press)
- (4) Kojima, H. & Idris, A. B. 2004. The Anthonomini from Malaysia, with notes on the Oriental taxa (Coleoptera: Curculionidae). *Serangga*, **9**: 103-129.
- (5) Kojima, H. 2004. Weevil fauna of the tropical Asia-Many species, few ancient families. Abstracts of International Symposium 'TAIIV' in Kyushu University: 64-65.
- (6) 小島弘昭 2004. 林冠昆虫相調査へのフォギング法の導入. 昆虫分類学若手懇談会ニュース, (81): 4-9.
- (7) 小島弘昭 2004. 半島マレーシアのゾウムシ調査. 象鼻虫, (4): 5-16.
- (8) Kojima, H. & K. Morimoto 2004. An online checklist and database of the Japanese weevils (Insecta: Coleoptera: Curculionoidea) (excepting Scolytidae and Platypodidae). *Bull. Kyushu Univ. Mus.*, **2**: 33-147.
- (9) Morimoto, K. & H. Kojima 2004. Systematic position of the tribe Phylloplatypodini, with remarks on the definitions of the families Scolytidae, Platypodidae, Dryophthoridae and Curculionidae (Coleoptera: Curculionoidea). *Esakia*, **44**: 153-168.
- (10) Kojima, H., K. Morimoto & K. Yoshihara 2004. Systematic position of the genus *Keibaris* Chujo, with notes on the definitions of the related taxa having the ascended mesepimera (Coleoptera: Curculionidae). *Esakia*, **44**: 169-182.
- (11) 小島弘昭 2004. ゾウムシ上科の系統分類学概説. 昆虫と自然, **39**(4): 22-26.
- (12) Morimoto, K. & H. Kojima 2003. Morphologic characters of the weevil head and phylogenetic implications (Coleoptera, Curculionoidea). *Esakia*, **43**: 133-169.
- (13) Morimoto, K. & H. Kojima 2003. *Satozo*, a new genus of the Celeuthetini (Coleoptera, Curculionidae) from Minami-Iwojima Is., Japan. *Spec. Bull. Japan. Soc. Coleop.*, **6**, 397-403.
- (14) Kojima, H. & K. Morimoto 2003. Notes on the apterous weevil genus *Pinacopus* Marshall (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae). *Spec. Bull. Japan. Soc. Coleop.*, **6**: 405-413.
- (15) Morimoto, K. & H. Kojima 2003. Synonymic and faunistic notes on some weevils in Japan (Coleoptera, Curculionoidea). *Entomol. Rev. Japan*, **58**: 53-66.
- (16) Kojima, H. 2003. Present and future of insect systematics in Asia. *Korea-Japan*

- joint conference on applied entomology and zoology, 2003, pp. 44-45.
- (17) 小島 弘昭 2003. 大学博物館の現状と将来-九大総合研究博物館と分類学とのかかわり-, **14**: 3-10.
- (18) 小島 弘昭 2003. 半島マレーシアの昆虫インベントリー. 昆虫と自然, **38**(12): 23-28.
- (19) Kojima, H. & K. Morimoto, 2003. A new *Lignyodes* Dejean, a new representative of the genus and the tribe Lignyodini Bedel from the eastern Palaearctic region (Coleoptera: Curculionidae). *Coleopt. Bull.*, **57**: 383-389.
- (20) Kojima, H. & A. B. Idris 2003. A peculiar new species of the genus *Antinia* Pascoe (Coleoptera: Curculionidae: Entiminae) from Malaysian moss forests, with notes on the sympatric weevils and beetle of similar appearance. *Serangga*, **8**(1-2): 73-82.
- (21) Kojima, H. & A. B. Idris 2003. A peculiar sexual dimorphism of the antenna in *Katsurazo* Kojima (Coleoptera: Curculionidae). *Serangga*, **8**(1-2): 83-87.
- (22) Kojima, H. & K. Morimoto 2002. Study on the Malaysian *Pinacopus* (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae). *Spec. Bull. Japan. Soc. Coleopt.*, **5**: 425-445.
- (23) Kojima, H. & I. Matoba 2002. Taxonomic notes on the genus *Morimotozo* (Coleoptera: Curculionidae). *Elytra*, **30**: 263-272.
- (24) Kojima, H. & C. H. C. Lyal 2002. New Oriental and Australian Conoderinae, with taxonomic notes on the tribe Othippiini (Coleoptera: Curculionidae). *Esakia*, **42**: 161-174.
- (25) Kojima, H. & K. Morimoto 2002. A new *Thamnobius*: an African weevil genus new to the Oriental Region (Coleoptera: Curculionidae; Curculioninae). *Entomol. Sci.*, **5**: 335-339.
- (26) 小島 弘昭, 森本 桂 2002. ツブゾウムシ属 (コウチュウ目: ゾウムシ科) の分類解説. *Japan. Jour. Entomol.*, (n. s.), **5**: 81-87.
- (27) 小島 弘昭 2001. 東南アジアにおけるゾウムシ類の分布と生物地理. 昆虫と自然, **36**(4): 12-15.
- (28) Yoshitake, H. & H. Kojima 2001. A new species of the genus *Coeliodes* (Coleoptera, Curculionidae, Ceutorhynchinae) from Mt. Tamdao, North Vietnam. *Elytra*, **29**: 1-6.
- (29) Morimoto, K. & H. Kojima 2001. Isopterina, a new subtribe of the tribe Celeuthetini, with notes on the related taxa (Coleoptera, Curculionidae). *Elytra*, **29**: 265-283.
- (30) 吉武 啓, 政岡 適, 佐藤 信輔, 中島 淳, 紙谷 聡志, 湯川 淳一, 小島 弘昭 2001. 福岡県におけるヤシオオオサゾウムシの発生とさらなる北進の可能性について. 九州病害虫研究会報, **47**: 145-150.
- (31) Yoshitake, H. & H. Kojima 2001. Ceutorhynchine weevils of the genus *Coeliodes* Schoenherr (Coleoptera: Curculionidae) from Taiwan. *Entomol. Sci.*, **4**: 439-457.
- (32) 小島 弘昭 2000. フォギング法による熱帯樹冠の昆虫相調査. 昆虫と自然, **35**(10): 8-11.

- (33) Tokuda, M., H. Kojima & J. Yukawa 2000. Occurrence of *Parendaesus abietinus* (Coleoptera: Curculionidae: Ochyromerini) in Kyushu, Japan and its host range. *Esakia*, (40): 37-39.
- (34) Kojima, H. & K. Morimoto, 2000. Systematics of the genus *Sphinxis* Roelofs (Coleoptera: Curculionidae). *Entomol. Sci.*, **3**: 529-556.
- (35) Kojima, H. & C. H. C. Lyal 2000. Phylogeny and evolution of Dryophthoridae (Coleoptera: Curculionoidea). Abstract book I. XXI-International Congress of Entomology, Brazil: 916.
- (36) Kojima, H. & C. H. C. Lyal 2000. On the genera of the Oriental and Australian Conoderinae (Zygopinae auctt) (Coleoptera: Curculionidae). Abstract book I. XXI-International Congress of Entomology, Brazil: 957.

<講演等>

1) 小島弘昭

林冠の昆虫を調べる-体験！昆虫研究者の仕事. 九大・糸島会第2回地域再発見塾.

## 三島 美佐子 (みしま みさこ)

Misako MISHIMA

### <研究の紹介>

- 1) 植物の倍数性進化とその意義：植物の倍数性と種分化に興味を持ち、近年は、植物の倍数性進化の過程におけるゲノム動態の変化に注目した研究を進めてきた。これまでは、ワレモコウ属(バラ科)、*Stevia* 属(キク科)、シロイヌナズナ(アブラナ科)を主な材料として、細胞生物学的・分子生物学的手法を用いた解析を行ってきた。2002年着任後は、倍数化がもたらす形態変化に着目し、ホスト植物の倍数化と虫えい形状多様化との関係や、倍数化植物が虫えい形成昆虫に与える影響を調査している。
- 2) 虫えい形状多様化の機構解明：虫えいの形状は非常に多様化しており、そのような形状がどのように決定・形成され、また進化してきたのかについての確固とした定説はまだない。同一種の昆虫が同一種の植物に虫えいを形成するがその虫えい形状に多型が見られる系を用い、解剖学的観察と分子生物学的解析の両方から、虫えいの形成機構と、形状が多様化する機構を探っている。

### <所属学会>

日本進化学会、日本植物学会、日本植物分類学会、染色体学会、種生物学会、植物地理分類学会

### <研究資金>

- (1) 科学研究費若手研究B (2003-2004年度：代表) 植物の倍数化が虫えいの形成と形態の多様化に及ぼす影響
- (2) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト (2001-2003年度：分担) アジア・太平洋博物館ネットワークの構築と自然史系博物館、文化史系博物館職員のリカレント教育に関する研究
- (3) 九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト (2004年度-：分担) 生物多様性の保全と進化に関する研究拠点形成。

### <学外委員等>

種生物学会和文誌編集委員

日本植物分類学会ニュースレター幹事 (平成17年1月-)

### <研究業績>

#### 口頭およびポスター発表

- (1) 三島美佐子, 久保稔, 出村拓, 福田裕穂, 塚谷裕一, 長谷部光泰 (2002.9). 倍数化に伴う遺伝子発現量の変化とゲノム安定性. 日本植物学会第66回大会, 京都.
- (2) 三島美佐子 (2002.8). シロイヌナズナ人工倍数体を用いた植物倍数体進化のゲノムレ

ベルでのアプローチ. 日本進化学会, 東京.

- (3) 三島美佐子 (2004. 3). 虫えいの形状解析-倍数化が虫えいの形成と形状多様性に及ぼす影響を調べるための予備的調査-. 日本植物分類学会第3回大会, 東広島市.
- (4) Mishima, M. and J. Yukawa (2004. 7). Dimorphism of gall type induced by *Pseudasphondylia neolitsea* on *Neolitsea sericea*, representing geographic variations in Kyushu. International Symposium on Asian Plant Diversity and Systematics, Sakura City.
- (5) 三島美佐子 (2004. 9). 虫えいの組織学的研究. 日本植物学会第68回大会, 藤沢市.
- (6) 三島美佐子 (2005. 3). 植物の倍数化が虫えい形状に及ぼす影響. 日本植物分類学会第4回大会, 高知市.
- (7) 吉田クリスチアネゆり・中澤幸・三島美佐子・矢原徹一 (2005. 3). シロダモの遺伝的分化は虫えい形状の地理的二型と対応するか. 日本植物分類学会第4回大会, 高知市.

#### 原著論文

- (1) MISHIMA, M. 2002. Cytogeography of *Sanguisorba parviflora* s. l. (Rosaceae) in Asia. In Fukui and Xin(eds.): Advances in chromosome sciences. Vol.1. China Agricultural Science and Technology Press., pp. 98-100.
- (2) MISHIMA, M., OHMIDO, N., FUKUI, K. & YAHARA, T. 2002. Trends in site-number change of rDNA loci during polyploidy evolution in *Sanguisorba* (Rosaceae). *Chromosoma*, 110: 550-558.
- (3) MISHIMA, M. 2001. Hybridity in Primorye-is the real source of morphological variation in Japanese *Sanguisorba*-. In Berkutenko et al. (eds.): Flora and climatic conditions of the North pacific (a collection of scientific papers). Magadan, Russia., pp. 132-134.

#### 書評

- (1) 三島美佐子 2004. 薄葉重著「虫こぶハンドブック」. 生物科学ニュース, (7月号).

#### その他

- (1) 三島美佐子. 2003. 沿海州、こんなに多様でええんかい? 日本植物分類学会ニュースレター, (10): 16.
- (2) 三島美佐子 2004. 花畑はつづくよどこまでも. 日本植物分類学会ニュースレター, (14): 13.



資料4 第1回 標本アンケート調査 (平成12年7月)

標本・資料等の名称	点数	データベース化等	兼任教員
<b>人文科学研究院</b>			
考古学資料	2,870		
(小計)	2,870		
<b>比較社会文化研究院</b>			
地質学標本	9,381		山縣 毅、酒井 浩孝、石田 清隆、西 弘嗣、桑原 義博
古人骨資料、考古資料	26,967	資料集を刊行	田中 良之、中橋 孝博、溝口 孝司
昆虫標本及び植物標本	994,500		高 洪、矢田 脩
中世・近世・近代資料	400,000	「九州文化史研究所所蔵古文書目録」として19号まで刊行	有馬 學、吉田 昌彦、服部 英雄、高野 信治、中野 等、安藤 保(文)、西村 重雄(法)、植田 信廣(法)、東定 宣昌(石炭研)、熊野 直樹(法)、田北 廣道(経済)、佐伯 弘次(文)、荻野 喜弘(経済)
(小計)	1,430,848		
<b>人間環境学研究院</b>			
近代建築遺物、近世建築遺物、近世・近代民具	261		福田 晴彦
(小計)	261		
<b>法学研究院</b>			
近世捕物用具類等	36		植田 信廣、熊野 直樹
近世・明治初期古文書類等	10,000		植田 信廣、熊野 直樹
(小計)	10,036		
<b>理学研究院</b>			
植物標本	14,500		矢原 徹一
火山岩標本	250		
九州地域及び雲仙火山の地震データ(震源・波形)	32,000	地震波形については最近4～5ヶ月分、震源データについては1995年6月以降、インターネットで公開中。1995年以降の地震波形データについてはCD-ROM化(オフライン公開)	
雲仙普賢岳噴火関連VHSビデオテープ、8mmビデオテープ、フォトCD	650	VHSビデオテープについてはリスト作成済み、8mmビデオテープについてはラベル添付済み、35mmネガ・ポジフィルムはデジタル化してCD-Rに書き込み中	
アフリカ及びチベット海外学術調査資料	2,500		柳 暁
環太平洋地磁気ネットワークデータ	54(観測点)	1998年までのデータはデータベース化し公開中、1999年以降はデータベース作成中	湯元 清文
昭和30年頃から世界で初めて単離あるいは合成された芳香族カロチノイド	3		
海洋生物標本(魚類、底生生物、海藻類、他)	5,680		森 敬介
地質標本	27,300		佐野 弘好、坂井 卓
岩石標本	23,100		池田 剛、宮本 知治
鉱物標本(高標本、吉村標本を含む)	41,100	高標本について印刷公表済み	青木 義和、上原 誠一郎、中村 智樹
化石標本	85,100	模式標本、海外からの寄贈標本の一部について印刷公表済み	佐野 弘好、高橋 孝三、石橋 毅、下山 正一、鹿島 薫
海底熱水系試料	30		石橋 純一郎
夾炭層標本	22,520		村江 達士、三木 孝、山内 敬明、北島 富美雄
鉱石標本	41,700		島田 允堯、本村 慶信
(小計)	296,541		

標本・資料等の名称	点数	データベース化等	兼任教員
<b>医学研究院</b>			
人体病理標本(主に脳神経)	100,200		
人体臓器標本	多数		
膀胱・腎結石	6		
法医学・犯罪学・人類遺伝学関係標本	数十点		
寄生虫体及び臓器標本	380		
人体及び動物の解剖模型標本	139		
切除臓器の凍結標本、抽出したDNA、RNA、培養細胞	500	データベース化完了	
(小計)	101,225		
<b>歯学研究院</b>			
日本人及び台湾人一般集団歯列模型	1,450	目録作成済み	鈴木 陽
(小計)	1,450		
<b>工学研究院</b>			
資源工学及び材料工学関連標本	5,433	一部、目録とカードを作成済み	井澤 英二、渡邊 公一郎、福島 久哲
日本刀に関する資料及び史料	150		
(小計)	5,583		
<b>システム情報科学研究院</b>			
機械翻訳実験機KT-1	1		
電気器具標本一式	57		
(小計)	58		
<b>農学研究院</b>			
昆虫標本	4,030,000	模式標本については、カードではデータベース化が完了。現在、デジタル情報として入力中、今年末を目標に公開予定。	多田内 修、紙谷 聡志、緒方 一夫(熱帯農学研究センター)
タンガニカ湖産シクリッド科魚類標本	200	目録作成中	
動物標本	1,373	一般標本について目録作成中	毛利 孝之、飯田 弘
魚類標本	500		
南洋植物さく葉標本(金平コレクション)	17,048	データベース化を進めており、85%が入力済み。さらに200点のタイプ標本に関して、外観写真を入力予定。	
作標植物標本(中島コレクション)	8,300		
平嶋義宏コレクション(1989年寄贈) :ボルネオ・バプアニューギニア等の民芸品	31	目録作成済み	
昆虫標本(アリ類)	11,215		緒方 一夫
魚類標本(内田コレクション)	1,450,000		望岡 典隆
海藻類さく葉標本(瀬川標本)	10,000		川口 崇男
イネの遺伝子資源(実験系統種子)	5,000	イネの遺伝実験系統データベースのためのデータ整理、リスト作成、画像データ作成が進行中。	安井 秀
植物標本	13,000		
天敵昆虫標本	25,000		高木 正見、上野 高敏、津田 みどり
在来農具	100		
演習林 植物さく葉標本・材鑑標本	3,232	データベース化進行中	井上 晋
宮崎演習林植物さく葉標本・材鑑標本	719	データベース化進行中	井上 晋
北海道植物さく葉標本・昆虫標本	736	データベース化進行中	
魚類標本	1,020		松井 誠一
(小計)	5,577,474		
<b>全学合計</b>	<b>7,426,346</b>		

## 資料5 寄贈標本

### 寄贈標本の受入

創設以来博物館へ寄贈された標本類は以下の通りである。

- 1) 福岡植物研究会コレクション(福岡県に自生する全てのシダ植物、種子植物を網羅した植物標本)

寄贈者：福岡植物研究会(代表 筒井貞雄) 標本点数：50,000

受け入れ資料分野：植物(寄贈番号1：2001年6月7日)

- 2) 佐々治コレクション(甲虫類の国内を代表するコレクションで、特にテントウムシ類は国内最大)

寄贈者：佐々治寛之 標本点数：60,000

受け入れ資料分野：昆虫(寄贈番号2：2001年8月27日)

- 3) 宮川コレクション(日本およびその周辺地域から採集されたゾウムシ上科甲虫類の昆虫標本)

寄贈者：宮川百合子 標本点数：35,000

受け入れ資料分野：昆虫(寄贈番号3：2002年9月19日)

- 4) 木船コレクション(翼手類寄生虫の国内最大コレクション)

寄贈者：木船悌嗣 標本点数：60,000

受け入れ資料分野：動物・医動物(寄贈番号4：2003年3月20日)

- 5) 大分県城南地質同好会イノセラムス標本(白亜紀イノセラムスの化石標本)

寄贈者：野田雅之 標本点数：954

受け入れ資料分野：地史古生物(寄贈番号5：2003年5月23日)2)

## 資料6 公開展示

### 第1回公開展示 「森・水・人」-「学術の森」による森林生態圏科学の展開-

期間：2000年5月16日(水)～6月4日(日)

会場：福岡市博物館特別展示室B

主催：九州大学・福岡市博物館

後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

協力部局：農学部附属演習林

入場者数：12,007名

### 第2回公開展示 「石炭・金・地熱」-九州の地下資源-

期間：2001年12月18日(火)～2002年1月27日(日)

会場：福岡市博物館特別展示室B

主催：九州大学・福岡市博物館

後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

協力部局：工学研究院地球資源システム工学部門

入場者数：4,793名

### 第3回公開展示 「植物をもっと知ろう」-植物と人-

期間：2002年8月16日(金)～9月8日(日)

会場：福岡市立少年科学文化会館

主催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年科学文化会館

後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

協力部局：理学研究院・薬学研究院・農学研究院・熱帯農学研究センター・生物環境調節センター・遺伝子資源研究センター・総合研究博物館植物研究グループ

同時開催「植物標本作製入門講座／植物・昆虫同定会」

入場者数：5,163名

### 第4回公開展示 「川と海の生命展」-川と海のめぐみと私たち-

期間：2003年8月16日(土)～9月7日(日)

会場：福岡市立少年科学文化会館1階学習室

主催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年科学文化会館

後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

協力部局：九州大学農学部動物生産科学コース水産学分野

入場者数：10,771名

### 第5回公開展示 「倭人伝の道と北部九州の古代文化-九州大学所蔵考古資料展」

期間：2004年12月17日～2005年1月30日

会場：福岡市博物館特別展示室B

主催：九州大学総合研究博物館・福岡市博物館

後援：福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

協力部局：人文科学研究院歴史学部門考古学分野・比較社会文化研究院環境変動部門基層構造分野

入場者数：5,899名

九州大学の研究 過去・現在・未来

# 森・水・人

九州大学総合研究博物館 公開展示  
「学術の森」による森林生態園科学の展開

期間 / 5月16日(金)～6月4日(日)  
場所 / 福岡市博物館 特別展示室B

入場無料

主催 / 九州大学 福岡市博物館 連絡 福岡県教育委員会 福岡市教育委員会  
協力 / 福岡市立青少年科学文化会館 九州大学総合研究博物館

九州大学総合研究博物館 公開展示  
九州大学の研究 過去・現在・未来

# 石炭・金・地熱

九州の地下資源

平成13年  
12月18日(火)  
平成14年  
1月27日(日)

福岡市博物館【特別展示室B】 入場無料

開館時間 / 午前9時30分～午後5時30分(入館は午後5時まで)  
休館日 / 毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)、毎来年初(12月29日から1月4日まで)

主催 / 九州大学・福岡市博物館  
後援 / 福岡県教育委員会・福岡市教育委員会

九州大学総合研究博物館公開展示

# 植物をもっと知ろう

-植物と人-

展示内容  
A 植物は どのように育つのか  
B 植物は どのように育つのか  
C 植物と 共に生きる

主要展示物  
植物のDNA、植物の成長、植物の生態、植物の歴史、植物の文化、植物の芸術、植物の科学、植物の未来

入場無料

8月16日(金) 会場 福岡市立青少年科学文化会館 1階 学習室  
～9月8日(日) 福岡市中央区藤崎2丁目5-27  
TEL. 092-771-8861

主催 / 九州大学総合研究博物館 福岡市立青少年科学文化会館  
後援 / 福岡県教育委員会 福岡市教育委員会

川の海の生命展

川と海のめぐみと私たち

共に生活を営む  
君は川を  
僕は海を  
上る

8/16(土) 9/7(日)

9:00～17:00 (9月1日・2日は休館日)  
福岡市立青少年科学文化会館 1階 学習室  
福岡市中央区藤崎2丁目5-27 TEL. 092-771-8861

主催 / 九州大学総合研究博物館 福岡市立青少年科学文化会館  
後援 / 福岡県教育委員会 福岡市教育委員会

(問い合わせ先) 九州大学総合研究博物館事務局 TEL. 092-642-4232

平成16年度九州大学総合研究博物館公開展示

# 倭人在帶方東南大海之中

九州大学総合研究博物館 九州大学総合研究博物館

2004年12月17日(金)～2005年1月30日(日)

福岡市博物館【特別展示室B】にて

講演会のご案内 12月18日(土) 14:00～16:30 1期講演  
「九州大学考古学研究室と東アジア考古学」  
九州大学大学院 文学部 教授 栗本 一夫  
「先史の遺跡調査に見る九州考古学の展開」  
福岡大学 名誉教授 小田 憲士 講

入場無料

九州大学総合研究博物館

## 資料7 特別展示

### 第1回特別展示

「進化の舞台の主役と脇役 地球上で繁栄する多様な昆虫たち、人とのかかわり」

期間：2001年3月19日(月)～5月18日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

協力部局：農学研究院（昆虫学、天敵昆虫学、生物保護管理学分野、遺伝子資源開発研究センター）、熱帯農学研究センター、比較社会文化研究院、理学研究院（生態科学講座）、九州大学医学研究院（寄生虫学講座）

展示内容：地球上での多様性/温暖化による北上/クワガタの系統進化/社会性昆虫/害虫と天敵の個体群動態/衛生害虫/生物的防除/ミツバチ/カイコ ほか

同時開催「九州大学所蔵学術標本展示」

展示内容：化石・地質学標本/熱帯植物標本/福岡県植物標本/古人骨資料/古文書史料/工学部列品室/考古学資料/高壮吉鉱物標本/松本標本（化石）ほか

入場者数：1,450名

### 第2回特別展示 「地球惑星科学への招待 -地球の過去・現在・未来を見つめて-

期間：2001年 7月16日(月)～9月14日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

協力部局：理学研究院地球惑星科学部門、比較社会文化研究院環境変動部門地球変動分野、工学研究院地球資源システム工学部門応用地質学分野、応用力学研究所基礎力学部門地球流体力学分野

展示内容：地球の起源/地殻変動/ヒマラヤの成り立ちと気候、成層圏への影響/地球流体、オゾンホール、エルニーニョ、気候変動/宇宙天気、太陽と地球の相互作用/地球史とテクトニクス/生命の起源と進化・絶滅/鉱床・鉱脈の形成ほか

入場者数：2,142名

### 第3回特別展示 「九州大学教育・研究の最前線」

期間：2002年5月8日(水)～6月7日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

共催：九州大学総合研究博物館・九州大学P&P専門委員会

展示内容：/細胞は小さな独立国/星での核融合/がんが増大するときの「血管新生」/キノコが化学兵器を分解した!?!/電子顕微鏡とは?/生体を守るシステム/ほか

同時開催「九州大学所蔵標本・資料展」

展示内容：考古学資料、炭坑関係資料、貝類標本、昆虫標本、植物標本、学外寄贈標本等

入場者数：684名

### 第4回特別展示 「九州大学教育・研究の最前線」

期間：2003年5月8日(木)～6月6日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

共催：九州大学総合研究博物館・九州大学P&P専門委員会

展示内容：「何となく大学へ」から「よく知って大学へ」/全学教育理系コア教養科目及び基礎科学科目の教育改善をめざした研究/自律型サッカーロボットシステムの開発/学術研究都市の空間情報基盤づくりをめざす各種GIS関連プロジェクトの連携と高度利用体制の構築/韓国の産業と経営に関する総合的研究/崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究/末梢抵抗血管における新型電位依存生Ca<sup>2+</sup>チャンネルの分子薬理学的研究/遺伝子操作マウスを作って疾患に取り組む/アジアの石炭問題と日本の石炭産業に関する総合的検討

同時開催「九州大学所蔵標本・資料展」

展示内容：考古学資料、炭坑関係資料、貝類標本、昆虫標本、植物標本、学外寄贈標本等

入場者数：776名

第5回特別展示 九州大学・九州芸術工科大学統合記念展示「あれも、これも、芸術工学!？」展 2003

期間：2003年10月1日(水)～10月31日(金)

会場：九州大学50周年記念講堂

共催：九州大学総合研究博物館・大学院芸術工学研究院

展示内容：35年のあゆみと現在/100人の芸術工学屋さん/あれも、これも、芸術工学/百花繚乱の芸術工学」など

入場者数：828名

第6回特別展示 九州大学教育・研究の最前線—第3回P&P研究成果一般公開

共催：九州大学総合研究博物館・九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト専門委員会

期間：2004年5月10日(月)～6月11日(金)

場所：50周年記念講堂

同時開催「九州大学所蔵標本・資料展」

入場者数：776名

第7回特別展示 大学博物館西東

期間：2004年10月15日(金)～11月14日(日)

会場：記念講堂2、3階

主催：九州大学総合研究博物館

展示内容：1.各博物館の活動全般、具体的には展示公開、収蔵保管、標本・資料の収集、情報化、調査研究、教育(高等教育・社会教育・生涯教育)などの方針と現状、将来の構想。2.各博物館の保有施設とその施設を有するに至った経過。並びにこれからの施設計画。3.各博物館の施設のうち、特に展示公開・収蔵保管に関わる部分の特長。

入場者数：497名

## 資料8 サテライト展示

### (1) 福岡空港サテライト展示

福岡空港第一ターミナル2階出発ロビー待合室

- 2001年10月～11月 福岡県の希少野生生物 (1) 昆虫類 (福岡県レッドデータブック2001)  
2002年12月～2003年1月 福岡県の希少野生生物 (2) 貝類 (福岡県レッドデータブック2001)  
2003年2月～3月 福岡県の希少野生生物 (3) 植物類 (福岡県レッドデータブック2001)  
2003年4月～5月 福岡県の希少野生生物 (4) 昆虫類その2 (蝶類) (福岡県レッドデータブック2001)  
2003年6月～7月 福岡県の希少野生生物 (5) 魚類 (福岡県レッドデータブック2001)  
2003年8月～11月 九州の地下資源 (1) 金  
2003年12月～2005年1月 九州の地下資源 (2) 地熱  
2005年2月～3月 「川と海の生命 (いのち)」展 (1) 川の命を守ろう



### (2) 九州大学付属病院サテライト展示

東区堅粕地区大学病院待合室

- 2003年10月～2004年2月 植物をもっと知ろう-植物と人-

### (3) 前原市伊都文化会館サテライト展示

玄関ロビー

- 2004年1月～2005年2月 「絶滅の危機に瀕する野生生物たち」(陸・淡水産貝類、植物)  
2005年2月～ 九州の地下資源 (1) 金



## 資料9 公開講演会

第1回公開講演会 インターネット博物館「雲仙普賢岳の噴火とその背景」

入館者10万人突破記念講演会

日時：2002年12月20日(金) 午後3時～5時

場所：九州大学理学部大会議室

主催：九州大学大学院理学研究院・九州大学総合研究博物館

演題、講演者：

「講演会の開催に当たって」小田垣孝(九州大学理学研究院長)

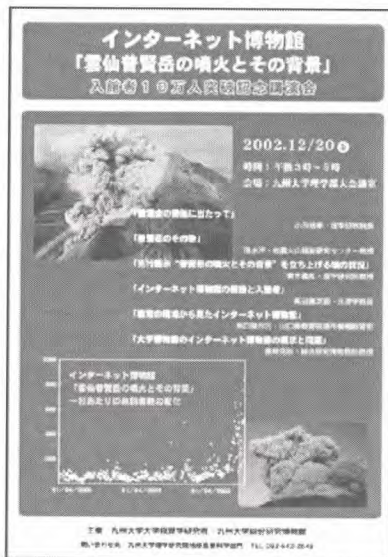
「普賢岳のその後」清水 洋(九州大学地震火山観測研究センター)

「先行展示“普賢岳の噴火とその背景”を立ち上げる頃の状況」 青木義和(九州大学理学研究院)

「インターネット博物館の開設と入館者」高田健次郎(元九州大学理学部長)

「教育の現場から見たインターネット博物館」岸田隆政(山口県教育研修所情報教育部)

「大学博物館のインターネット博物館の現状と問題」宮崎克則(総合研究博物館)



第2回公開講演会 「考古科学の最前線」

日時：2003年2月22日(土) 午後2時～5時

会場：九州大学50周年記念講堂4階大会議室

演題、講演者：

「古代ガラスの考古科学-平原遺跡出土品を中心に-」肥塚隆保(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室)

「金ピカの技術-金めっきと小判の色揚げ-」斎藤 努(国立歴史民俗博物館情報資料研究部)

「木材・漆・布の保存科学」高妻洋成(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

参加者：約80名

第3回公開講演会 「地球外物質に太陽系の起源を求めて」

日時：2004年2月14日(土) 午後2時～5時30分

会場：九州大学50周年記念講堂

主催：九州大学総合研究博物館

協力：「地球外物質と生命の起源を含めた太陽系形成に関する研究」

P&P研究グループ (代表 村江達士)

演題、講演者：

「地球外物質からわかる太陽系の歴史」 中村智樹(九州大学理学研究院)

「南極に隕石を求めて」 今栄直也(国立極地研究所)

「はやぶさ」探査機による小惑星サンプルリターン計画

藤原 顯(宇宙科学研究本部)

「太陽系の歴史を刻む時計」 寺田健太郎(広島大学大学院理学研究科)

「地球外物質に見る生命の起源」 村江達士(九州大学理学研究院)

同時展示：「はやぶさ」探査機の模型、南極で採取された火星隕石

参加者：約200名

第4回公開講演会 日本の動植物相はどのようにしてできたか

日時：2005年3月19日午後1時30分～4時30分

会場：50周年記念講堂4階大会議室

主催：九州大学総合研究博物館

演題、講演者：

「昆虫相のおいたちと特徴」

森本 桂(九州大学名誉教授)

「化石からみた海生貝類相のおいたち」 天野和孝(上越教育大学)

「木材化石から見る日本の被子植物相の一億年の歴史」

鈴木三男(東北大学総合学術博物館)

参加者：94名

九州大学総合研究博物館 公開講演会  
地球外物質に太陽系の起源を求めて

講演内容  
地球外物質からわかる太陽系の歴史  
九州大学 伊藤健太郎先生  
南極に隕石を求めて  
国立極地研究所 今栄直也先生  
「はやぶさ」探査機による小惑星  
サンプルリターン計画  
宇宙科学研究本部 藤原 顯先生  
太陽系の歴史を刻む時計  
広島大学 寺田健太郎先生  
地球外物質に見る生命の起源  
九州大学 村江達士先生

「はやぶさ」探査機の模型と  
南極で採取された火星隕石も  
やっています

日時：2004年2月14日(土曜日) 14:00～17:30  
会場：九州大学五十周年記念講堂(福岡キャンパス)  
主催：九州大学総合研究博物館 協力：「地球外物質と生命の起源を含めた太陽系形成に関する研究」P&P研究グループ (代表 村江達士) **入場無料**  
問合せ先：九州大学総合研究博物館事務局  
TEL 092-642-4252 http://www.museum.kyushu-u.ac.jp

九州大学総合研究博物館 公開講演会  
日本の動植物相は  
どのようにしてできたか

「昆虫相のおいたちと特徴」 九州大学名誉教授 森本桂先生  
「化石からみた海生貝類相のおいたち」 上越教育大学助教授 天野和孝先生  
「木材化石から見る日本の被子植物相の一億年の歴史」 東北大学総合学術博物館館長 鈴木三男先生

日時：2005年3月19日(土) 13:30～16:30  
会場：九州大学(福岡キャンパス)五十周年記念講堂4階大会議室  
812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
申込不要・入場無料

主催：九州大学総合研究博物館  
お問い合わせ：九州大学総合研究博物館事務局 TEL 092-642-4252  
http://www.museum.kyushu-u.ac.jp

## 資料10 地域資源再発見塾

「地域資源再発見塾」は九州大学と同地域各自治体（前原市・志摩町・二丈町）との連携・交流を推進し、糸島地域のさらなる発展を図ることを目的に、2002（平成14）年2月に設立された「九大・糸島会」事業である。

### 1) 地域資源再発見塾

日時：2003年1月26日（日）  
会場：前原市伊都文化会館  
主催：九大・糸島会  
演題、講演者：「糸島の自然-絶滅に瀕している貝類たち」  
松隈明彦（九州大学総合研究博物館）

### 2) 地域のための大学博物館講座

日時：2004年3月27日（土）  
会場：前原市伊都文化会館  
主催：九大糸島会・九州大学総合研究博物館  
演題、講演者：「空を学ぼう-オーロラと宇宙天気-」  
湯本清文（九州大学宙空環境研究センター）  
「陸にすむ貝を探そう」 松隈明彦（九州大学総合研究博物館）  
「糸島のレッドデータ植物」 平野照美（糸島植物研究会）

### 植物の不思議発見

日時：3月28日（日）  
会場：前原中央公民館  
演題、講演者：「植物観察の基礎」 三島美佐子（九州大学総合研究博物館）  
「植物細密画入門」 佐藤真由美（前原市在住植物画家）

### 3) 2004（平成16）年度第1回地域資源再発見塾

日時：2004年8月29日（日）  
会場：前原市役所 501会議室  
主催：九大糸島会・九州大学総合研究博物館  
演題、講師：「南極生活おしえます-南極の自然と観測隊体験講演会-」  
川添昭典（九州大学教務課）

### 4) 2004（平成16）年度第2回地域資源再発見塾

日時：2004年10月2、3日（日）  
会場：九州大学元岡新キャンパス、志摩町役場  
主催：九大糸島会・九州大学総合研究博物館

演題、講師：「林冠の昆虫をしらべるー 体験！昆虫研究者の仕事」

小島弘昭（九州大学総合研究博物館）

5) 2004（平成16）年度第3回地域資源再発見塾

日時： 2005年2月19日（土）

会場： 前原市伊都文化会館

主催：九大糸島会・九州大学総合研究博物館

演題、講師：「キノコのおはなし～キノコを知らう、キノコと暮らそう～」

大賀祥治（九州大学農学研究院）

九大・糸島会 平成16年度第3回地域資源再発見

### キノコのおはなし ～キノコを知らう、キノコと暮らそう～

2月19日（土）開催

九州大学のキノコ博士がやってくる！  
シイタケの菌打ち体験もあるよ。

キノコ類は美味としても豪華  
しく、調味料にはあはれみですが、  
最近では健康食品としても注目  
されています。  
九大のキノコ博士を聞いて美味  
しくて栄養のあるキノコのおは  
なしをしていただきます。  
当日はシイタケの菌打ち体験  
もあり、子供から大人まで楽し  
めますので、どなたにも参

演題：キノコのおはなし ～キノコを知らう、キノコと暮らそう～  
講師：九州大学大学院農学研究院 助教授 大賀 祥治先生  
日時：平成16年2月19日（土）  
13:30開場、14:00開演（特別授業を予定）  
場 所：前原市 伊都文化会館 視聴覚室  
入場料：無料（申し込み不要）  
定 額：1,000円（税別と異なります）  
主 催：九大・糸島会、九州大学総合研究博物館、前原市、二丈町、志摩町  
問い合わせ：前原市 行政改革・九州大学推進課（づくり室） 電話：092-323-1111  
二丈町 企画課 電話：092-325-1111  
志摩町 企画課 電話：092-327-1111  
※当日は、シイタケの菌打ち体験をしていただきますので、手ぶらを持参してく  
ださい。  
（顔を打った後の顔水は持ち帰りが可能です。）

九大・糸島会 平成16年度第3回地域資源再発見（第3回）

### 南極生活おしえます

～南極の自然と観測隊体験講演会～

川添隊長は第43次南極観測隊のたったひとりの座長担当

講師 川添昭典氏（九州大学教務課）  
日時 平成16年8月29日（日）  
開場 13:30 開演 14:00  
会場 前原市役所（JR駅前南側駅すく）  
501会議室 定員：約150人

写真パネルの  
展示もありです。

お問い合わせ  
前原市企画課 電話：092-323-1111  
志摩町企画課 電話：092-327-1111  
二丈町企画課 電話：092-325-1111

申込不要・入場無料

（九大・糸島会・九州大学総合研究博物館）

## 資料11 卒業論文公開講演会

### 1) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会

期間：2002年2月23日(土)～24日(日)

会場：九州大学50周年記念講堂

発表形式：ポスター発表

説明者：卒業論文発表者

発表担当：植物育種学研究室/作物学研究室/園芸学研究室/植物生産生理学研究室/  
植物病理学研究室/昆虫学研究室/蚕学研究室

### 2) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会

期間：2003年2月22日(土)～23日(日)

会場：九州大学50周年記念講堂

発表形式：ポスター発表

説明者：卒業論文発表者

発表担当：植物育種学研究室/作物学研究室/園芸学研究室/植物生産生理学研究室/  
植物病理学研究室/昆虫学研究室/蚕学研究室

### 3) 九州大学農学部農学分野公開卒業論文発表会

期間：2004年2月14日(土)～15日(日)

会場：九州大学50周年記念講堂

発表形式：ポスター発表

説明者：卒業論文発表者

発表担当：植物育種学研究室/作物学研究室/園芸学研究室/植物生産生理学研究室/  
植物病理学研究室/昆虫学研究室/蚕学研究室

### 4) 工学部エネルギー科学科の卒業論文公开发表会

期間：2005年2月19日(土)

会場：アクロス福岡

発表形式：ポスター発表

説明者：卒業論文発表者

発表担当：エネルギー科学科

## 資料12 研究拠点の形成・共同研究

### 1. アジアの博物館、研究所の情報収集

- A. タイ、マレーシアでの昆虫学情報収集および調査研究  
小島、2002年3月3日～4月2日  
農務省昆虫学研究所、カセツアート大学、チュラロンコン大学、チェンマイ大学、マレーシア国民大学、マレーシア森林局昆虫研究所
- B. タイ国軟体動物研究者との研究打合せ、交流協定の準備  
B-1. プーケット海洋生物学研究所 松隈、2002年12月21日～28日；2003年12月21日～28日  
B-2. カセツアート大学水産学部博物館、海洋生物学科情報収集 松隈、2004年2月3日；2005年2月12日～17日
- C. インドネシア調査  
C-1. 古文書（VOC文書ほか）宮崎・中西・（吉備国際大学坂本勇教授・学生）、2003年3月23日～29日  
インドネシア国立公文書館・インドネシア国立博物館・インドネシア銀行博物館（ジャカルタ）、インドネシア王宮・インドネシア王宮図書館（ジョグジャカルタ）  
C-2. 昆虫調査、交流協定  
(1) 湯川、2001年9月30日～10月6日、インドネシア科学院生物学研究センター（動物学博物館、植物学博物館、菌類博物館）を訪問、標本資料および施設・設備の相互利用、研究者の交流について意見を交換、交流協定準備、昆虫調査  
(2) 湯川、大森（理学部事務長）、上地（昆虫学教室）、樋口（昆虫学教室）、我那覇（昆虫学教室）、2004年3月15日～3月21日、生物学研究センター訪問、国際交流協定書の調印式、ダイズとトウガラシのタマバエ調査、植物標本館訪問、植物園で虫えい調査、デンパサール虫えい調査。インドネシア・カウンターパート：アリーブディマン（生物学研究所所長）、シンボロン ヘルウイント（植物標本館）、ンガカン プツオカ（ハサヌディン大学）
- D. 韓国博物館事情調査 岩永・田中、2003年12月10日～12月12日  
東亜大学校・人文科学大学・考古美術史学科ほか

### 2. 共同研究

- A. タイ国産二枚貝綱（軟体動物）の研究（松隈）：  
南西日本の海産二枚貝相と密接な関係がある東南アジアの二枚貝相を明らかにするため、タイ国研究者と共同で分類学的な研究を行っている。タイ側共同研究者：Dr. Somchai Bussarawit (Phuket Marine Biological Center), Ms Vararin Vongpanich (Phuket Marine Biological Center), Prof. Wantana Yoosukh (Kasetsart University), Mr. Teerapong Duangdee (Kasetsart University)

B. タイ・マレーシアの昆虫相の研究（小島）：

農務省昆虫学研究所、カセサート大学、チュラロンコン大学、チェンマイ大学、マレーシア国民大学、マレーシア森林局昆虫研究所の研究者との間で共同研究を進めている。

### 資料13 外国人研究者の受入

- 2001（平成13）年2月13日～2月14日 韓国Sung Kyun Kwan大学Byung-Lae Choe教授及び大学院生が文献資料調査及び情報交換のため博物館を訪問。
- 2001（平成13）年10月12日～12月12日 Ms Vararin Vongpanich (Phuket Marine Biological Center)をP&P研究による若手研究者の育成事業の一環として博物館に招聘し、分類学研究の指導と文献資料の収集を支援。
- 2003（平成15）年1月7日～2月3日 前年に引き続き、Ms Vararin Vongpanich (Phuket Marine Biological Center)をP&P研究による若手研究者の育成事業の一環として博物館に招聘し、分類学研究を指導し、文献資料の収集を支援。
- 2004（平成16）年2月29日～3月2日 Dr. Ching-Feng Lee (National Taiwan University)が佐々治コレクションの調査のため博物館を訪問。
- 2004（平成16）年3月16日～4月16日 Mr. Teerapong Duangdee (Kasetsart University)をP&P研究による若手研究者の育成事業の一環として博物館に招聘し、分類学研究を指導し、文献資料の収集を支援。
- 2004（平成16）年4月1日～2005年3月31日 福岡県移住者子弟留学生制度（財団法人福岡県国際交流センター）により来日した吉田クリスティアネゆり（ブラジル、高校教員）の分子生物学的手法の習得を支援するため、理学研究院の矢原教授に協力して、博物館の三島が「シロダモのゲノム多型解析とシロダモタマバエの遺伝子配列多型解析」というテーマと材料を与え、技術的な指導を理学研究院の中澤研究員が実施。
- 2004（平成16）年7月2日～7月6日 Mr. Piotr Wegrzynowicz (Muzeum i Instytut Zoologii PAN, Poland)が佐々治コレクションの調査のため博物館を訪問。
- 2004年12月9日～12月13日 Dr. Idris Abd. Ghani (Malaysia National University, Malaysia)が昆虫文献調査と講演のため、博物館を訪問。
- 2004年12月12日～12月13日 Mr. Rosichon Ubaidillah (Museum Zoologicum Bogoriense, Indonesia)が昆虫標本調査と講演のため、博物館を訪問。
- 2005（平成17）年1月27日～1月29日 Dr. Saggie Cohen (Tel-Aviv University)がタマキガイ科二枚貝の分類学に関する情報交換のため博物館を訪問。
- 2005（平成17）年3月25日～4月26日 前年に引き続き、Mr. Teerapong Duangdee (Kasetsart University)をP&P研究による若手研究者の育成事業の一環として博物館に招聘。分類学的研究の指導を行い、文献の収集と研究者ネットワークの構築を支援。



## 資料14 博物館の出版物

### 1. 博物館ニュース

- 九州大学総合研究博物館ニュース (NO. 1) (2000年12月、5000部)
- 九州大学総合研究博物館ニュース (NO. 2) (2002年6月、5000部)
- 九州大学総合研究博物館ニュース (NO. 3) (2004年2月、10000部)
- 九州大学総合研究博物館ニュース (NO. 4) (2005年3月、5000部)

### 2. 研究報告

- 九州大学総合研究博物館研究報告 (第1号) (2003年3月、600部)
- 九州大学総合研究博物館研究報告 (第2号) (2004年3月、600部)
- 九州大学総合研究博物館研究報告 (第3号) (2005年3月、600部)

### 3. 年報

- 九州大学総合研究博物館年報 (第1号) (2004年3月、600部)

### 4. その他の出版物

- 総合研究博物館公開展示図録「石炭・金・地熱 -九州の地下資源-」(2001年12月、12000部)
- 総合研究博物館公開展示図録「倭人伝の道と北部九州の古代文化-九州大学所蔵考古資料展」(2004年12月、2000部)
- 九州大学所蔵標本・資料 (2005年2月、2000部)

## 資料15 資料部・フィールドミュージアム部・協力研究員

### 資料部

#### 自然史部門

##### 動物・医動物分野

姫野國祐（医）、毛利孝之（農）、飯田弘（農）、金子たかね（農）

##### 植物分野

矢原徹一（理）、井上 晋（農）、安井 秀（農）、川口栄男（農）、三島美佐子（博）

##### 昆虫分野

瀧 洪（比文）、高木正見（農）、矢田 脩（比文）、荒谷邦雄（比文）、  
多田内 修（農）、上野高敏（農）、緒方一夫（熱農）、紙谷聡志（農）、  
津田みどり（農）、小島弘昭（博）

##### 水生生物分野

松井誠一（農）、川口栄男（農）、野島 哲（理）、森 敬介（理）、望岡典隆（農）

##### 地史古生物分野

酒井治孝（比文）、佐野弘好（理）、高橋孝三（理）、松隈明彦（博）、鹿島 薫（理）、  
下山正一（理）、酒井 卓（理）、清川昌一（理）

##### 岩石分野

寅丸敦志（理）、石田清隆（比文）、池田 剛（理）、中牟田義博（博）、  
宮本知治（理）

##### 鉱物分野

島田充堯（理）、石田清隆（比文）、石橋純一郎（理）、中村智樹（理）、  
中牟田義博（博）桑原義博（比文）、上原誠一郎（理）、本村慶信（理）、  
加藤 工（理）、久保友明（理）

##### 人類先史分野

田中良之（比文）、中橋孝博（比文）

##### 有機化石分野

村江達士（博）、山内敬明（理）、北島登美雄（理）

##### 地球電磁気分野

湯元清文（理）

##### 生薬分野

田中宏幸（薬）

#### 文化史部門

##### 考古分野

岩永省三（理）、溝口孝司（比文）宮本一夫（人文）

##### 記録史料分野

安藤 保（人文）、服部英雄（比文）、有馬 学（比文）、吉田昌彦（比文）、

植田信廣（法）、西村重雄（法）、田北廣道（経）、荻野喜弘（経）、  
佐伯弘次（人文）、中野 等（比文）、高野信治（比文）、熊野直樹（法）、  
宮崎克則（博）、楠本美智子（博）

#### 建築史分野

#### 技術史部門

#### 資源・素材・機械分野

福島久哲（工）、渡邊公一郎（工）、中西哲也（博）今井 亮（工）、鬼鞍宏猷（工）

名簿中太字は分野主任を、かっこ内は所属を表します。所属の省略は以下の通りです。

法：法学研究院、経：経済学研究院、理：理学研究院、医：医学研究院、  
歯：歯学研究院、薬：薬学研究院、工：工学研究院、農：農学研究院、  
熱農：熱帯農学研究センター、石炭：石炭研究資料センター、  
博：総合研究博物館

#### フィールドミュージアム部

#### 陸生生物

大賀祥治（農・演習林）、薛 孝夫（農・演習林）、大槻恭一（農・演習林）

#### 水生生物

野島 哲（理学部）、森 敬介（理学部）

#### 協力研究員

相原安津夫（九州大学名誉教授）、	平嶋義宏（九州大学名誉教授）
森本 桂（九州大学名誉教授）、	三枝豊平（九州大学名誉教授）
木船悌嗣（福岡大学教授）、	伊澤英二（九州大学名誉教授）
青木義和（九州大学名誉教授）、	柳 哮（九州大学名誉教授）
湯川淳一（前九州大学総合研究博物館長）、	井川敏恵（独立行政法人産総研研究員）

## 資料16 他部局収蔵物・施設

### 人文科学研究院

1. 考古学研究室所蔵考古資料（文化財指定貴重資料を含む九州ほか各地・各時代の出土品5630点）  
歴史学部門考古学教室陳列室1、2、中庭プレハブで保管。占有面積305㎡。

### 比較社会文化研究院

1. 旧玉泉館収蔵考古資料（玉泉大梁氏により蒐集された考古遺物、6000点）  
六本松地区付属図書館で保管。占有面積165㎡
2. 中世・近世・近代資料
3. 地質学標本（鉱物、岩石、化石標本14500点）  
六本松4号館地学標本室(84㎡)で保管。
4. 動物骨格標本（組み立てられた骨格標本が多く、希少動物の骨格標本を含む）  
現在は医学部基礎研究A棟で保管。占有面積400㎡。建物の改修が計画されており、保管場所の確保が急務。
5. 人骨標本（整理済3200点、未整理200点）  
現在は医学部基礎研究A棟で保管。占有面積400㎡。建物の改修が計画されており、保管場所の確保が急務。
6. 昆虫標本（整理済乾燥標本228000点、未整理乾燥標本762000点、未整理液浸標本3000点）  
六本松4号館303、307、308室、職員集会所、図書館分館で保管。

### 人間環境学研究院

1. 近代建築遺物、近世・近代民具（261点）  
工学部建築学科306室（20㎡）で保管。
2. 中世・近世・近代史料（400000点）  
文学部書庫、保存図書館で保管。占有面積300㎡。

### 法学研究院

1. 近世・明治初期古文書類（10000点）

### 理学研究院関係

1. 化石標本（古生代～新生代化石85100）  
理学部1号館廊下、1301室、4号館廊下、タイプ標本室、エレコンパック室、旧応力研118、129室で保管。
2. 地質学標本（岩石、鉱物、堆積岩133000点）  
理学部1号館廊下、エレコンパック室、旧応力研118、129室で保管。
3. 石炭標本（20000点）  
理学部1号館廊下、旧応力研118、129室で保管。
4. 海産生物標本（乾燥標本2640点、液浸標本3040点）  
天草臨海実験所(39㎡)で保管。

5. 植物標本（乾燥標本14500点）

理学部1号館1327室、廊下、圃場プレハブ標本庫で保管。

#### 農学研究院関係

1. 農学研究院動物昆虫学講座動物分野所蔵標本（両生・爬虫類、鳥類、ほ乳類の剥製および液浸標本1373点）

農学部1号館412、468、469室および廊下、旧生物物理の建物、防音教室の標本戸棚で保管。

2. 英彦山動物標本（英彦山実験所周辺の動物・昆虫の乾燥、液浸及び剥製標本180000点）  
英彦山生物学実験所で保管。

3. 魚類標本（液浸標本730000点）

農学部3号館407、522、613室及び廊下、付属水産実験所。

4. 昆虫標本（整理済乾燥標本3000000点、未整理乾燥1000000点、未整理液浸20000点）  
農学部1号館350室、2号館108、110室、6号館233室、熱帯農学研究センター研究室、英彦山生物学実験所、図書館標本室で保管。

5. 植物及び海藻標本（中島コレクション、金平コレクションなど約55000点）

農学部1号館103、105、106、152室、3号館418室、図書館標本室、付属粕屋演習林、宮崎演習林、北海道演習林で保管。

6. 在来農具（100点）

付属農場旧本館、旧講義室、旧図書室（100㎡）で保管。

#### 医学部関係

1. 解剖模型（人体及び動物の解剖模型139点）

解剖学教室290号室及び廊下で保管。

2. 法医学、人類遺伝学関係標本

法医学分野標本室1～3（300㎡）使用。

3. 寄生虫標本（肺吸虫などの吸虫類、線虫、糸虫よりなる寄生虫及び臓器の標本380点）  
寄生虫学研究室、標本室（16㎡）にて保管。

4. 九大病院カルテ（九大の前身である県立福岡病院時代から今日までのカルテ）

#### 薬学研究院

1. 生薬標本（生薬および薬用植物のさく葉標本）

#### 工学研究院

1. 資源工学及び材料工学関連標本（鉱物・鉱石・岩石標本、古式鉱山用具、精錬装置模型、2433点）

本館3階列品室1、2（453㎡）で保管。

2. 実験工場所蔵歴史的な工作機械（前身の工科大学創設時から1920年代までに購入した工作機械）

3. 機械翻訳実験機 KT-1（九州大学で試作した、我が国最初の自動翻訳機）

### 諸施設等

1. 石炭研究資料センター所蔵資料（石炭産業にかかわる文書資料、写真などの視聴覚資料、用具などの造形資料）
2. 九州文化史研究所所蔵文書（西日本では質・量ともに最も優れる、江戸時代における地域史料）
3. 大学資料（九州大学が機関として生産した大学事務文書）

## 資料17 新しい大学博物館を考える会提言

九州大学総合研究博物館館長

湯川 淳 一 殿

九州大学は、平成16年度の国立大学法人の設立、平成17年度からの元岡地区への移転を控え、社会との連携と大学の活性化を真剣に検討することが望まれています。このような状況の下、大学博物館が如何に有るべきか、学内外の有識者の忌憚のない助言を得るため、平成14年11月、専門委員会「新しい大学博物館を考える会」が発足しました。

本委員会は約半年間に渡り、大学博物館のあり方に付いて熱心に議論を行いました。平成15年4月1日をもちまして、全員一致で提言を作ることができました。そこで、ここに最終的にまとまりました委員会の提言並びに添付資料を提出致します。

大学博物館は、今後、提言の精神を生かして、地域社会、行政、産業界、他博物館等との密接な連携を進め、研究・教育を通じて社会に貢献していかれることを願います。また、提言の具体化へ向けた取組みに対しては、地域社会、行政、産業界、他博物館等からの更なる支援と助言を求め、参考とされることを願います。

平成15年4月1日

専門委員会委員長

島田 允 堯

## 九州大学総合研究博物館への提言

平成15年4月1日

九州大学総合研究博物館館長

湯川 淳 一 殿

専門委員会「新しい大学博物館を考える会」委員長

島田 允 堯

本専門委員会は、九州大学の国立大学法人化、元岡地区への移転後の九州大学総合研究博物館（以下大学博物館という）のあり方について以下の提言を行う。

### 1. 九州大学の進むべき方向と大学博物館のあり方について

九州大学は、新キャンパスにおいて、「国際的・先端的研究・教育拠点の形成」と「自立的に変革し、活力を維持し続ける社会に開かれた大学の構築」を目指している。これら理念の遂行のために、九州大学は、地域に開かれた大学の窓の役割を果たす、十分な規模と機能を持った大学博物館を新キャンパスに作り、学術研究の成果を地域に還元し、地域の教育環境の向上に貢献することが望まれる。

### 2. 大学博物館の現状と進むべき方向について

- (1) 大学博物館は、7名の専任教官及び70名を超える兼任の研究・教育の専門家に支えられ、8大学博物館中最大の専門性の高い学術標本を所蔵している。大学博物館は、学術標本の収蔵・保存・展示・公開を通じた社会教育の支援に止まらず、様々な形で地域社会への貢献を果たしうる資源を有する。しかしながら、運営面では、運営経費や専任職員の確保が課題とされており、施設面でも、現在大学内の各所に保存されている大量の学術標本等を収蔵するためのスペースの確保などの課題を抱えている。
- (2) 従って、大学博物館は、その強みである研究・教育と標本資料の公開展示、研究成果等の学内外への情報発信に重点を置きながら、大学博物館の特色を生かした、魅力ある博物館作りを目指すべきである。
- (3) 大学博物館には、日本最大の昆虫標本やアンモナイト標本など自然史標本を中心とした極めて大量の学術標本が収蔵されている。一方、福岡市及びその周辺には、九州国立博物館、福岡市博物館を初めとして多くの歴史・民俗系の博物館があるが、自然史系の博物館は極めて少ない。大学博物館は、既存の博物館、大学研究室等とのネットワークの形成を図り、機能分担や事業実施における協力等について検討して、地域社会との密接な連携を進める中で、将来のあり方を検討すべきである。



### 3. 地域貢献について

大学博物館は、地域に開かれた博物館として、児童・生徒の理科離れ対策、「総合的な学習の時間」への協力、生涯学習の場の提供など地方公共団体の施策との連携を通じて、社会教育・学校外教育等で地域に貢献すべきである。

### 4. 社会連携について

- (1) 大学博物館は社会教育、学校教育との連携を強化するため、専任職員では担当しきれない社会教育、初等・中等教育に関わる体制の充実方策、職員の相互交流などについて地方公共団体と連携を図りながら検討すべきである。
- (2) 新キャンパスでの大学博物館作りに当たっては、今後とも地域社会、行政、産業界、他博物館等の支援と助言を得る体制を作ることが必要である。

## 専門委員会「新しい大学博物館を考える会」委員一覧

### 委員氏名

#### (1) 行政

松石 美栄	福岡県企画振興部企画調整課長
松井 愛人	福岡市総務局企画調整部長
福島 信寛	前原市総務部長

#### (2) 財界・業界

長友 泰明	九州国立博物館設置促進財団募金活動推進本部副本部長
-------	---------------------------

#### (3) 博物館関係

○中津留憲二	福岡市立少年科学文化会館館長
--------	----------------

#### (4) 九州大学総合研究博物館

湯川 淳一	館長
松隈 明彦	分析技術開発系教授
岩永 省三	一次資料研究系教授

#### (5) 九州大学総合研究博物館運営委員

有川 節夫	九州大学副学長
◎島田 允堯	理学研究院教授
田中 良之	比較社会文化研究院教授

(◎委員長 ○副委員長)

資料18 九州大学総合研究博物館の中期目標及び中期計画

中 期 目 標	中 期 計 画
<p>1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標</p> <p>1 教育に関する目標</p> <p>(1) 教育の成果に関する目標</p> <p>1) 学士課程</p> <p>○ 博物館専任教員は関連部局の学部教育に積極的に参加する。</p> <p>○ 学芸員資格関連科目を担当し、研究の素養を有する学芸員の養成を目指す。</p> <p>2) 大学院課程</p> <p>○ 高度な専門的知識を持ち、自立できる研究者の養成を目指す。</p>	<p>1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>1 教育に関する目標を達成するための措置</p> <p>(1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置</p> <p>1) 学士課程</p> <p>○ 博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で、講義、実習に積極的に関与する。</p> <p>2) 大学院課程</p> <p>○ 博物館専任教員は、専門に沿った学府の兼任教員、或いは協力講座担当教員として、本務に差し支えない範囲で、大学院教育に積極的に関与する。</p> <p>○ 標本資料を分析するための適切な方法論を持ち、実験・分析などの手段を通して、情報を的確に抽出できるよう教育する。</p> <p>○ 理論・学史・先行研究を総括して研究動向と問題を適切に抽出し、その中に自分の研究を適切に位置付け、オリジナルな見解を提示し、その集積を体系化できるよう教育する。</p>
<p>(2) 教育内容等に関する目標</p> <p>1) 教育方法に関する基本方針</p> <p>○ 博物館の施設を使った標本資料を用いた実験、実習、講義により、学生の興味を引き出し、できるだけ効果的な教育を行うよう支援する。</p>	<p>(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置</p> <p>1) 教育方法に関する具体的方策</p> <p>○ 博物館施設、設備の開放、標本資料の貸出し、展示の公開等により博物館資料を使った教育を支援する。</p> <p>○ 論文発表会の開催を支援する。</p> <p>○ 博物館の施設、設備を充実させる。</p>
<p>(3) 学生への支援に関する目標</p> <p>1) 学生の学習支援に関する基本方針</p> <p>○ 学生が自発的に学習し、多角的な視野で問題を考察する能力を養うよう、博物館施設や標本資料の活用を通じて幅広い支援を行う。</p>	<p>(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置</p> <p>1) 学生の学習支援に関する具体的方策</p> <p>○ 博物館資料の情報を提供し学生の勉学を支援する。</p> <p>○ 博物館の建物の建設に際しては、学部学生、大学院生のために研究の便宜を図るスペースを確保するよう考慮して設計に当たる。</p>
<p>2 研究に関する目標</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標</p> <p>1) 目指すべき研究の水準に関する基本方針</p> <p>○ 博物館を核として、学術標本に基づいた国際的・学際的・先駆的研究を行うことで、先端・応用研究を支援すると共に、長期的視野に立った研究成果を上げていく強固な基礎研究組織を確立する。</p>	<p>2 研究に関する目標を達成するための措置</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置</p> <p>1) 目指すべき研究の方向性</p> <p>○ 他大学との研究情報交換システムを確立する。</p> <p>○ 博物館に複数の学問分野の教員が共存する利点を生かし、異なった分野間で情報交換、および共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。</p> <p>○ 博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。</p>

2) 成果の社会への還元等に関する基本方針

- 博物館での教育研究活動を社会へ還元し、標本資料に基づく研究の発展に寄与するとともに、生涯学習に貢献する。

(2) 研究実施体制等の整備に関する目標

1) 研究者等の配置方針

- 博物館の使命である研究、教育、標本資料の整理と情報の発信を円滑に行うため、大学全体の研究者の協力体制の確立を図る。

2) 研究環境の整備に関する基本方針

- 国際的・中核的の大学博物館として、標本資料に基づく研究拠点となることを目指す。
- 外部資金の拡充を図るとともに、自己収入の増加に努める。
- 博物館活動を行うにあたり、経費の抑制に努める。
- 安全で快適な教育研究環境の確保のため、災害等の防止に努める。

3) 教育研究組織の見直しに関する目標

- 多岐に亘る研究資料を新たな研究や教育に活用できるようにするため、博物館専門職員の充実を図り、整理、情報化を推進する。

4) 研究の質の向上システムに関する基本方針

- 博物館から質の高い情報の発信を行い、内外の研究者の研究の発展に寄与する。
- 自己点検・評価、外部評価により、博物館の設置目的をより効率的に達成するための改革を行う。

2) 成果の社会への還元等に関する具体的方策

- 研究紀要、資料集を発行し、博物館の研究活動を社会へ還元する。
- 博物館が所蔵する標本資料のデータベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。
- 年報、ホームページ、博物館ニュース、紀要等を通じて博物館活動の状況を社会に公開する。

(2) 研究実施体制等の整備に関する目標を達成するための措置

1) 研究者等の配置に関する具体的方策

- 資料部、及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図る。
- 学外の研究者、名誉教授等を対象とした協力研究員制度の充実を図る。

2) 研究環境の整備に関する具体的方策

- 教員研究室・実験室を整備する。
- 競争的資金の獲得を積極的に行う。
- 寄付の意識を高める運動を行う。
- 標本の同定・分析依頼に対しては内規を定め、料金の徴集を検討する。
- 新キャンパスの博物館の設計に際しては、常設展示ができた後は入館料を徴集すること、博物館内にミュージアムショップを設け、図録、写真、絵葉書、図鑑など知的生産物の販売を行うことを検討する。
- 光熱水費の節約を図る。
- 新キャンパスでの博物館建物の建設に際しては省エネ型建物を目指す。
- 新キャンパスでは、人の空間と標本の空間を可能な限り分離して、防虫等のための薬品の影響が人に及ばないように努める。新キャンパス移転後は、模式標本など貴重標本の収蔵・管理のため、標本庫の滅菌、殺虫消毒を定期的に行うが、薬剤による燻蒸を避け、冷凍による滅菌、殺虫を行い、博物館の職員、学生の安全を図る。

3) 教育研究組織の見直しの方向性

- 一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の業務内容の見直しや、系間の境界線の撤去を検討する。また、教員相互の連携を図り、縦割りシステムを改善する。

4) 質の向上に関する具体的方策

- 博物館の設計に当たり、博物館資料のデータベース化を進め、内外の研究者へ向けられた情報の発信を行うスペース、国内外の研究者との研究交流を促進させるスペースを設けるよう検討する。
- 事業計画、予算・決算、博物館活動報告等を載せた年報を作成し、学内、周辺の大学、高校、周辺市町村、県、国、関連機関等へ配布して、博物館活動への理解と協力を求める。
- 入館者に対するアンケート調査を行い、博物館に対する要望、評価をこまめに受けるとともに、定期的に外部評価を実施する。

<p>5) 施設設備の整備などに関する目標</p> <p>○ 貴重な学術標本を安全かつ良好な環境下で保管し、教育研究に活用するため、新キャンパスでの博物館の建物を整備する。</p>	<p>5) 施設設備の整備などに関する目標を達成するための措置</p> <p>○ 新キャンパスにおける博物館については、楽しみながら学ぶ、ゆとりある魅力的な施設を整備する。</p> <p>○ 博物館の研究と教育研究支援業務を円滑に行うための分析機器の導入を図る。</p> <p>○ 保存環境に配慮した安全な標本庫と安定した標本の整理・管理システムを作り、民間等のタイプ標本を含む重要標本の寄贈、寄託に寄与する。</p> <p>○ 科学研究費補助金等を利用して、東南アジアを始めとする国内外の学術調査を行い、標本の充実を図る。</p>
<p>3その他の目標</p> <p>(1) 社会との連携、国際交流等に関する目標</p> <p>1) 教育研究における社会との連携・協力に関する基本方針</p> <p>○ 総合研究博物館は、基礎科学研究に重点を置きながら、産学連携に柔軟に対応した研究を進めていく。</p> <p>○ 地域自治体と連携した社会教育を行い、生涯学習や児童学生の理科離れ対策に貢献する。</p> <p>○ 博物館活動を通じて、地域社会との連携を深める。</p> <p>2) 教育研究活動に関連した国際交流に関する基本方針</p> <p>○ 博物館活動を通じて国際交流に寄与する。</p>	<p>3その他の目標を達成するための措置</p> <p>(1) 社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置</p> <p>1) 教育研究における社会との連携・協力の推進方策</p> <p>○ 学内展示、及び国公立博物館との共催の公開展示、サテライト展示を通じて、大学の研究、教育を社会に紹介する。</p> <p>○ “インターネット博物館”を充実させ、公開展示、大学収蔵標本の概要を紹介する。</p> <p>○ フィールドミュージアム部を中心にして、社会人、及び学生を対象とした野外実習を実施する。</p> <p>○ 博物館専任教員及び外部の研究者を講師とした普及講演会を開催し、生涯学習に寄与する。</p> <p>○ 国内の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）、及び研究の訓練を行う。</p> <p>○ 青少年の理科離れの是正や総合学習を積極的に支援するため、県・市町村教育委員会との間で、小中高校教員が博物館で初等、中等教育にあたる制度を検討する。</p> <p>○ 博物館活動を支援する館外組織としてボランティア制度を取り入れる。九州大学総合研究博物館の社会教育事業を通じて、博物館の円滑な運営を助ける教育ボランティアと標本の収集、整理、データベース化と研究を補助する研究ボランティアの育成を図る。</p> <p>2) 教育研究活動に関連した国際交流に関する具体的方策</p> <p>○ 国外の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）、及び研究の訓練を行う。</p> <p>○ 関連部局の教員と共同で、東南アジアを中心に海外の研究者をパートナーとした協同研究を実施する。</p>

## 九州大学総合研究博物館(平成12～16年度) 自己点検・評価報告書

平成17年3月31日発行

編集者 九州大学総合研究博物館運営委員会  
自己点検・評価委員会

発行者 九州大学総合研究博物館  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
Phone/Fax 092-642-4252  
URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷 株式会社ミドリ印刷

九州大学総合研究博物館（平成12～16年度）  
外部評価報告書

平成18年3月31日発行

編集者 九州大学総合研究博物館  
自己点検・評価委員会  
外部評価委員会

発行者 九州大学総合研究博物館  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
Phone/Fax 092-642-4252  
URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷 株式会社ミドリ印刷  
Phone 092-441-6747









九州大学総合研究博物館  
Kyushu University Museum